ISSN 2436-2336 (Print)
ISSN 2436-2530 (Online)

# 地域と大学
## ── 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要 ──

第 3 号　2023 年 3 月

巻頭言　地域と大学教育への思い……城西短期大学副学長　白幡晶　1

**【論文】**

地域連携を活かすための政策提言
──地域と協働する関係者・関係機関に求められる資質とは──　……柳澤智美・堀由美子　4

**【地域教育実践報告】**

学園祭の模擬店運営を通した「地域教育」の試み
──城西大学・短期大学三國ゼミナールの活動記録──　……三國信夫　18

地域連携PBLの活動報告──2022年度の主なプロジェクトの振り返りから──　……勝浦信幸　27

地域ショッピングモールにおける食育推進プログラム
──折り紙・かるたを活用して──　……深谷睦・山田沙奈恵・山王丸靖子　41

2022年における城西大学経営学部石井ゼミナールの活動
……石塚航貴・加藤太一・門伸聖・神田莉久・杉山侑矢・砂野歩
諏訪真大・寺内なつみ・藤村和洋・堀越渓太・石井龍太　47

高校生参加型研究室インターンシップの取り組み
──地域へ研究室をひらく──　……片倉賢紀・古旗賢二　57

**【地域連携活動報告】**

「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」
──大学生の学習指導補助体験談──　……足立拓哉・上田一斗・請地貴史・渡辺沙織　65

**【地域調査報告】**

世界遺産登録による都市の変容──富岡製糸場を事例として──
……土屋正臣・中嶋俊貴・安部隼平・伊澤陸斗・小川廉・小寺翔馬
川上美優・岸遼河・櫻井敬太・島田享樹・竹村諒大・三澤柚太　69

**【地域情報】**

1 枚の写真絵はがきの検討　……加藤寛之　72

聞き書き　天狗の声　……平井亜未(聞き取り)　横田弥三郎・黒澤清三郎(話)　加藤寛之(解説)　79

**【地域活動ノート】**

管理栄養士養成課程学生による越生町梅農家シェアキッチンにおけるワンデイカフェの取組
……中里見真紀・山田沙奈恵・君羅好史・真野博・内田博之　82

小川町におけるメディアミックスによる観光プロモーションの取り組み……小泉亮汰・遠藤柊一　84

折り紙を活用した食育推進プログラムに参加して
……鶴岡茉里菜・黒須美月・依田栞奈・小池大河・小山昂輝
牧野彩香・山田沙奈恵・深谷睦・山王丸靖子　86

第16回薬局管理栄養士研究会の活動報告
──薬局管理栄養士の真価～どのように価値創出すべきか──
……藤田智子・小口淳美・内山貴雄・川戸麻紀・奥嵜沙恵・宮代由佳・柳岡祐治
堀由美子・君羅好史・松本明世・真野博・清水純・内田博之　88

城西大学ローターアクトクラブの取り組み──西坂戸を中心とした活動の報告──……田口幸多　90

**【講演録】**

公民館事業「かるかや大学・浅羽野」での講演から思うこと
──地域との繋がりの大切さ──……沼尻幸彦　92

英国・アイルランド文学とパンデミック──ペストとスペイン風邪を中心に──……伊東裕起　96

第41回（2022年度）城西大学公開講座──新型コロナウィルスとは？──　……森田勇人　111

2022年度　城西大学・城西短期大学の地域連携・地域活動　115

『地域と大学──城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』投稿規定　132

編集後記　134

城西大学・城西短期大学 地域連携センター

# Journal of Josai Community Liaison Center

## No.3 March 2023

CONTENTS


Preface ……SHIRAHATA Akira 1

【Article】

A Policy Proposal For Regional Collaboration: Ideal Attributes of Collaborators and Agencies ……YANAGISAWA Tomomi, HORI Yumiko 4

【Reports】

Trial of "Community Education" through School Festival Booth Management - Activity record of Josai University and Josai Base College Mikuni Seminars - ……MIKUNI Nobuo 18

Activity Report of PBL with Community Collaboration - Based on the review of major projects in 2022 by seminar students ……KATSUURA Nobuyuki 27

Program to promote food and nutrition education (*Shokuiku*) at local malls - Using *Origami* and *Karuta* - ……FUKAYA Mutsumi, YAMADA Sanae, SANNOMARU Yasuko 41

Activity Report in 2022 about Ishii Seminar, Faculty of Management, Josai University ……ISHIDUKA Koki, KATO Taichi, KADO Noa, KANDA Riku, SUGIYAMA Yuya, SUNANO Ayumu, SUWA Mahiro, TERAUCHI Natumi, FUZIMURA Kazuhiro, HORIKOSHI Keita, ISHII Ryota 47

Laboratory Internship Program for High School Students ……KATAKURA Masanori and KOBATA Kenji 57

Experience Report of the Self-study Support Project "TSURUKKO Summer School" in Tsurugashima-city ……ADACHI Takuya, UEDA Kazuto, UKECHI Takafumi, WATANABE Saori 65

Urban Transformation through World Heritage Registration - The Case of Tomioka Silk Mill - ……TSUCHIYA Masaomi, NAKAJIMA Toshiki, ABE Shunpei, IZAWA Rikuto, OGAWA Ren, ODERA Shouma, KAWAKAMI Miyu, KISHI Ryouga, SAKURAI Keita, SHIMADA Ryoujyu, TAKEMURA Ryouta, MISAWA Yuta 69

【Information】

Examination of a picture postcard photo ……KATO Hiroyuki 72

Voice of "Tengu" ……HIRAI Ami, YOKOTA Yasaburo, KUROSAWA Seizaburo, KATO Hiroyuki 79

【Notes】

Efforts of a one-day cafe at shared kitchen of Japanese plum farmer in Ogose Town by training course students of registered dietitian ……NAKASATOMI Maki, YAMADA Sanae, KIMIRA Yoshifumi, MANO Hiroshi, UCHIDA Hiroyuki 82

Efforts for tourism promotion through media mix in Ogawa Town …KOIZUMI Ryota, ENDO Shuichi 84

Participating in a program to promote food education (*Shokuiku*) using *Origami* ……TSURUOKA Marina, KUROSU Mizuki, YODA Kannna, KOIKE Taiga, KOYAMA Koki, MAKINO Ayaka,YAMADA Sanae, FUKAYA Mutsumi, SANNOMARU Yasuko 86

Activity report of the 16th Study Group on Pharmacy Registered Dietitians - The true value of a pharmacy registered dietitian - how to create value - ……FUJITA Tomoko, OGUCHI Atsumi, UCHIYAMA Takao, KAWATO Maki, OKUZAKI Sae, MIYASHIRO Yuka, YANAOKA Yuji, HORI Yumiko, KIMIRA Yoshifumi, MATSUMOTO Akiyo, MANO Hiroshi, SHIMIZU Jun, UCHIDA Hiroyuki 88

The activity of Josai University Rotaract Club - Report of activity with a focus on Nishisakado area - ……TAGUCHI Kota 90

【Lecture Records】

Some thoughts after giving a lecture at the Asabano Community Center project "Karukaya College for the Elderly" - The importance of connections with communities - ……NUMAJIRI Sachihiko 92

British-Irish Literature and the Pandemic: Focusing on the Plague and the Spanish Flu …ITO Yuki 96

The 41st (2022) Open Lecture at Josai University - What is the COVID-19 ?- ……MORITA Eugene Hayato 111

Annual Report 2022 115

Postscript 134



JOSAI UNIVERSITY and JOSAI JUNIOR COLLEGE
Community Liaison Center
1-1 Keyakidai, Sakado-shi, Saitama, JAPAN

巻　頭　言

# 地域と大学教育への思い

城西短期大学副学長　　白　幡　　晶

長閑な地にキャンパスを構える城西大学の創立当初は、勤務していた事務職員の中に、近所の居住者や農家の人が多かった。従って、創立者水田美喜男先生の温かい人柄と合わせて、坂戸地区では、本学は、顔馴染みの職員のいるアットホームな地域大学として受け入れられていたに違いない。近隣の自治体に公務員として就職した卒業生も多く、自治体が大学の知識を必要とするときには、卒業生からの依頼に協力を厭わない身近な大学として頼りにもされてきた。本学が、公開講座、城西健康市民大学などの市民ニーズに合わせた活動を継続してきたこともあり、「相互連携協力に関する基本協定」等を、坂戸市をはじめとする自治体と締結するなど、時代と共に組織間の協力関係も構築されていった。

しかし、地域とのつながりが大学の教育研究に深く関わるようになったのは、現代政策学部の石井ゼミが休耕地活用プロジェクトを始めた頃からではないだろうか。環境社会学を専門とする石井雅章先生（現神田外語大学教授、教育イノベーション研究センター長）は、キャンパスの周りに休耕地が多いことに注目して、高齢化に伴う地域課題を解決する試みをゼミ学生と共に授業の中で進めようと考えた。使われていない農地を借りて、学生が手分けして酒米を育て、収穫したコメを使って近隣の酒蔵で日本酒を製造し、販路を考え、日本酒を提供する飲食店と交渉するなど、いわゆる６次産業化のプロセスを学生が学び、日本酒「醸彩滝不動」というオール埼玉ブランドの地域に喜ばれる日本酒を作り上げた。学生にしてみれば、学んだ専門性を生かして農家、行政、企業と連携をとり、地域の人々が喜ぶ成果を上げられたことで、地域の大切さ、自分の成長を実感したに違いない。このプロジェクトは、2014年には、経済産業省が選定する「社会人基礎力を育成する授業30選」を受賞するまでになった。残念ながら石井先生は他大学に転出してしまったが、この休耕地活用プロジェクトが、他学部の教員とも連携しながら進められたので、私も含めて少なからぬ教員が地域と大学教育を結ぶ必要性を強く感じることになった。

また、全学的に地域を志向した活動を進める大学等を支援する文部科学省の「知の拠点整備事業（COC）」への採択を目指すことで、地域志向の教育の重要性を学内的に盛り上げることも試みられた。当時は実質の伴わない、助成金獲得のための体制づくりが優先されてしまい、残念ながら申請自体は二次審査で不採択となったが、地域を授業科目の中に取り入れる意識を広く教員の間で共有するきっかけになったことは間違いない。

ちょうどその頃、本学薬学部が「彩の国大学連携による住民の暮しを支える連携力の高い専門職育成」をテーマとした2012年度の文部科学省の助成金事業にも採択された。このプロジェクトは、埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学の埼玉県にある４つの大学が、自らの専門性を他の専門領域と協力しながら発揮する力を養う機会を学生に提供して「連携力の高い専門職」を育成することにより、地域社会に貢献しようとするものだった。この活動自体は、医療福祉系の専門職（学内では薬学部）を対象としたものであり、地域との直接的な関わりをもつものではなかったが、地域を意識しながら議論する演習を中心とした連携教育プログラムの策定は、文系学部も含めて、今後の地域課題を大学の教育研究に取り込む上で非常に重要な視点を提供するものとなった。

この巻頭言では、埼玉東上地域大学連携プラットフォーム（TJUP）の立ち上げ以前の活動を通して、長く感じていたごく私的な思いを綴らせていただいた。

# 地域と大学

## ――城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要――

第 3 号

2023 年 3 月

城西大学・城西短期大学　地域連携センター

【論文】

# 地域連携を活かすための政策提言

## ――地域と協働する関係者・関係機関に求められる資質とは――

柳澤智美*・堀由美子**

キーワード：地域連携　地域と協働　ボランティア　地域貢献

## １．研究の目的と背景

本研究の目的は、地域連携に求められる資質や役割を明らかにしていくことで、地域連携に取り組む大学に必要な政策提言をすることにある。

中央教育審議会（平成27年12月21日の第104回総会）による「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」[1] では、学校と地域の連携・協働の必要性やその推進体制が言及されており、今後の教育活動には地域とのパートナーシップの構築が必要であると説かれている。教育関係者は地域連携担当教員として、総合窓口や学校運営業務、地域住民による学校支援等に必要な企画や調整などへの加担が期待されている。また、地域活動の運営やボランティアの確保、地域住民および各種団体とのネットワーク構築など、学校と地域が連携するためのコーディネーター的な役割も必要とされており、以下のような取組[2] への参画も重要性を増すと考えられている。

・地域の人的・物的資源の活用や社会教育との連携による「社会に開かれた教育課程」の実現
・地域住民による学校支援活動、放課後の教育活動、地域文化活動等の実施
・学校を核として地域全体を学びの場として捉えた地域コミュニティの活性化

これらを実践するためには、「地域人材がそれぞれで構成員を務め、各人の知見、経験、課題等を共有することによる一体的・効果的な推進」[3] が必要であり、大学関係者も地域と一体となった活動ができる社会資源として貢献しなければならず、今後ますます地域と大学との信頼関係の構築とコミュニケーションを管理する能力が重要になってくると考えられる。

一方、学校、特に大学という教育機関における地域連携の在り方について、現在いくつかの疑問が

＊　城西大学現代政策学部准教授
＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科准教授

1　出所https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365761.htm（2022年12月12日確認）
2　出所https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/02/08/1365791_2_2.pdf（2022年12月12日）
3　出所https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/02/08/1365791_2_2.pdf（2022年12月12日）

投げかけられている。まず、地域連携活動が継続しないことである。大学は教育機関であると同時に研究機関であることから、大学教員による地域連携やボランティアは研究目的である場合が少なくない。データを取り終えると活動を停止／終了してしまうため、単年度もしくは数年の活動期間で終了するケースが存在する[4]。また、学生が４年間で卒業してしまうことにも大きな要因がある。活動に意欲的な学生が卒業してしまうと、その翌年から継続できないことも珍しくない。このようなケースが多ければ地域住民側としては、大学が関与することに良い印象ばかりをもっているわけではないとも考えられる。しかしながら、大学が地域連携による事業を実施することやボランティア活動に参加することは、学生にとって大きな学びの機会になるとともに、キャンパス内や学校生活では見ることができない学生の一面に教員が気づかされることがある。共同的な態度や実践を醸成していくことができ、実際の現場での問題解決にあたることも可能となる。このように、学生の実践の機会を守るためには、地域から信頼され、学生を快く受け入れてもらい、協働を望まれる環境づくりが重要と考える。地域連携を教育的側面からとらえた場合、教育の「場」が教室から地域へと広がったと考えなくてはならない。従って、地域と大学の信頼関係の構築が重要であり、大学の教職員間での理解とともに、地域住民および学生を含めた多様な関係者・機関（組織）と相互に連携を図りながら協力するよう努めなければならない。

文部科学省（2015年10月７日）による「コミュニティ・スクールの総合的な推進方策に関する論点（検討の視点）に関する参考資料」[5] において、学校と地域との連携を担う教職員について[6]、以下の２つの観点から議論されている。

１．多くの地域の人々が学校に関わるようになれば、より豊かな子どもの学びが生まれる。
２．子どもの成長とともに大人達の成長を促し、地域の絆を強めていくことは、「地域が良くなれば学校が良くなる」という好循環を生み出す。

地域との連携や協働のあり方として、「教職員等の体制を充実し、地域との連携・協働の担当の配置を促すなど、組織的・継続的な取組に向けた支援が必要である。あわせて、学校運営協議会の委員やコーディネーターとなる地域の人材の育成や確保に向けた支援も求められる」[7] とあり、組織的・継続的な取組に向けた教職員等の支援が必要とされている。

そのような中で、今日の大学における地域連携について鑑みると、「そもそも地域との連携・協働、すなわち地域の人材を含んだ、学校内外の多様な人材との連携・協働をうまくいかせる（可能とする、

4　https://www.chisou.go.jp/tiiki/toshisaisei/dai15/15sanko3.pdf（2022年12月12日）
5　https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf（2022年12月12日）
6　https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf（2022年12月12日）
7　https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf（2022年12月12日）
8　高橋平徳、杉田浩崇、山﨑哲司「地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力を構成する概念に関する一考察」愛媛大学教育・学生支援機構，大学教育実践ジャーナル16, 47－52（2018－03）

支える）資質・能力とはどのようなものであるかについて言及されてはいない」[8] とされており、さらなる検討が必要といえる。文部科学省は栃木県教育委員会の事例を採り上げ、教育機関側の位置付けを「学校と地域が連携するためには、学校の組織的な体制整備が必要」[9] と明確化している。また、「大学教員との地域実践活動の現状について」[10] によれば、多くの大学教員が地域連携に関わっているものの、自治体からは「連携する大学が見つからない」というコメントが示されている。地域連携の「必要性は感じているが適当な大学がない」と回答する自治体も多数存在しており[11]、大学という教育機関との連携では無く、教員個人とのつながりを主として実施されているということが予想される。それゆえ、現状の地域連携活動においては、教員個人の資質に委ねられることとなる。担当する教員にはどのような資質や技能が求められているかを知る必要があるが、これらに関する研究報告は希薄といえる。

そこで本研究では、地域連携活動の際に求められる資質や能力について、アンケート調査を実施し、その結果から、地域社会に望まれる地域連携像を分析し、地域連携を継続・運営しやすい環境とは何かについて言及することを目的とした。

## ２．研究の方法

### ２．１　調査対象者と調査方法

先行研究や行政[12] が実際に行ったインタビューガイドやアンケート（大学と地域の連携協働による都市再生の推進（第十一次決定：平成18年７月４日））を参考にし、Microsoft Formsを用いたインターネットによる無記名のアンケート調査を行った。調査期間は2022年11月～2023年１月である。調査対象者は、城西大学教員と地域連携活動に携わる地域住民や市役所職員とした。回答は20名から得られた。対象者には事前に口頭もしくは書面で、アンケートの趣旨を説明した。また、回答者が特定できないよう質問項目を考慮し、自由記述による文言を使用する際は、個人の特定ができないように十分に配慮した。

### ２．２　調査内容

本調査では、遂行されている大学と地域連携の様態や連携事業において、関係者間の同意／相違事項について把握することを目的とした。すなわち、①地域連携活動で連携・協働する個人や組織、地域について（４項目）、②学生の活動・ボランティアについて（６項目）、③地域連携活動の連携体制について（４項目）の３つの領域に関する14項目に、アンケートに関する意見・感想等を１項目

9　https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf（2022年12月12日）

10　地域実践活動に関する大学教員ネットワーク総務省地域力創造グループ 人材力活性化・連携交流室，P１（平成23年８月）

11　地域実践活動に関する大学教員ネットワーク総務省地域力創造グループ 人材力活性化・連携交流室，P4,（平成23年８月）

12　https://www.chisou.go.jp/tiiki/toshisaisei/03project/index.html（2022年12月12日）

加え、選択式または自由記述により回答を得た。

### ２．３　分析方法

回答結果は、項目ごとに集計した。自由記述による回答は、原文を要約・整形した。なお、この一連の作業は、共同研究者間で検討を重ね、分析の妥当性を担保している。

## ３．結果

### ３．１　アンケート結果

質問１～15に対して、選択肢のうちあてはまるものを１つ選択してもらい、質問３は複数選択可とした。その回答数（%）を以下に示した。なお、質問４と13、15については，自由記述による回答を全て記載した。

１．大学の教員は、その地域や住民がもつ独特の特性等を理解するまでに、比較的時間を要すると感じることがありますか。

| | |
|---|---|
| よくある | 2（10） |
| ときどきある | 11（55） |
| ほとんどない | 7（35） |
| まったくない | 0（0） |

２．協働・連携に関して住民側と大学側の間には温度差があると感じますか。

| | |
|---|---|
| よく感じる | 2（10） |
| ときどき感じる | 11（55） |
| ほとんど感じない | 6（30） |
| まったく感じない | 1（5） |

３．ボランティアの受け入れについて、信頼関係の構築に必要な相手は誰だと思いますか。（複数回答可）

| | |
|---|---|
| 大学 | 10（28） |
| 担当する教員 | 18（50） |
| 学生 | 8（22） |
| その他 | 0（0） |

４．その他、信頼関係の構築に必要と思う相手を教えてください。（自由記述）

・美術館のスタッフ
・お互いを繋げる人
・すでに大学や教員、学生と信頼関係を築いている第三者

・担当する教員の他、大学、学生
・大学教員と生徒さんたち
・大学側、窓口となる事務方
・学生のリーダー
・ボランティアクラブ

5．学生ボランティアと目的意識を一致させることが難しいと感じることはありますか。

| | |
|---|---|
| よく感じる | 4（20） |
| ときどき感じる | 10（50） |
| ほとんど感じない | 6（30） |
| まったく感じない | 0（0） |

6．住民側は、学生ボランティアなどを受け入れるメリットを感じていると思われますか。

| | |
|---|---|
| とても思う | 16（80） |
| 少し思う | 3（15） |
| あまり思わない | 1（5） |
| 思わない | 0（0） |

7．大学生は年度ごとに入れ替わるため、長期的な活動には大学側や教員の関与が必要だと思われますか。

| | |
|---|---|
| とても思う | 20（100） |
| 少し思う | 0（0） |
| あまり思わない | 0（0） |
| 思わない | 0（0） |

8．学生ボランティアが突然いなくなるという経験がありますか。

| | |
|---|---|
| よくある | 0（0） |
| ときどきある | 8（40） |
| ほとんどない | 9（45） |
| まったくない | 3（15） |

9．学生ボランティアに参加意欲がないと感じられることがありますか。

| | |
|---|---|
| よくある | 2（10） |
| ときどきある | 5（25） |
| ほとんどない | 12（60） |
| まったくない | 1（5） |

10. 学生ボランティアを大学に依頼したい場合に連絡先がわかないことがありましたか。

| | |
|---|---|
| よくある | 1（5） |
| ときどきある | 6（30） |
| ほとんどない | 9（45） |
| まったくない | 4（20） |

11. 大学との連携は単年度で終わることが多く信頼できないと感じたことがありますか。

| | |
|---|---|
| 良く感じる | 0（0） |
| ときどき感じる | 1（5） |
| ほとんど感じない | 17（85） |
| まったく感じない | 2（10） |

12. 学生ボランティアが機能するための連携先はどこだと思いますか。

| | |
|---|---|
| 大学 | 0（0） |
| 研究室（ゼミ） | 9（45） |
| 教員 | 10（50） |
| 学生 | 0（0） |
| その他 | 1（5） |

13. その他、連携先として必要と思う相手を教えてください。（自由記述）

・教員
・大学、大学の教員のほか、ボランティアの受入先との連携
・大学教員と生徒さん
・事務方同志の連携
・事務方が柔軟に対応してくれると助かる
・学生のリーダー

14. 地域連携上の問題や課題等について、大学と意見交換する場が欲しいと思いますか。

| | |
|---|---|
| とても思う | 9（45） |
| 少し思う | 9（45） |
| あまり思わない | 2（10） |
| 思わない | 0 |

15. この調査に関して、その他ご意見・ご感想等ございましたら、教えてください。（自由記述）

・ボランティアといっても様々あるかと思いますが、地域社会との連携、人々との関わり体験したことは、必ずや生かされる時がある事と思います。
・継続性のあるボランティアを期待しています。

・学生ボランティアの成否は、所属するグループの風土に左右されることが多いと思います。学生であっても教員であっても、グループ内には様々な温度の方がいると思いますが、コアなメンバーに信念や熱意がないと、温度の低い方が乗り切れ無いのかなと感じます。
・今はコミュニケーションが取れているので不安はありません。学長ともフランクにお話が出来ています。この関係を続けるために、定期的にコミュニケーションを継続していきたいと思っています。
・学生ボランティアの若い力は、受入先で受入れられていると思います。
・城西大学の職員、学生さんたちは、とても協力的でひとえに先生方のご理解と、大学側の協力によるものと感謝しております。
・学生さんが主体的に動いてくれることが活動を維持する源と言ってもいい。
・学生さんが、主体性を持って参加出来る連携を、OBになっても参加出来るなど継続性のある取り組みを構築したい。
・城西大学の学生さん、研究室におかれましては毎年大変力を尽くしていただきありがたいと感じています。学生さんも協働する私たちも日々新しい学びがあると思います。

### ３．２　地域連携活動で連携・協働する個人や組織、地域について（質問１～４）

質問１の大学教員は地域特性を理解するまでに時間を要すると感じるかという問いでは、「ときどきある」の回答が最も多かった。また、質問２の住民と大学側の温度差については、「ときどき感じる」という回答が最も多かった。質問１と２は、大学側に対する信頼性やつながりを尋ねるものであった。「まったくない」の回答はほとんどなく、このことから、なんらかの不満を抱えていることが窺える。

質問３では、信頼関係の構築に必要な相手として、「担当する大学教員」という回答が最も多く、次いで「大学」、「学生」であった。実際、専攻研究にも学生だけではなく教員が通うことで信頼関係が深まっている事例が述べられている（高橋・杉田・山﨑, 2018）[13]。

質問４では、自由記述により信頼関係の構築に必要な相手を回答してもらったが、大学教員だけでなく関係部署や事務、また、改めて学生への期待が高いことも分かった。

### ３．３　学生の活動・ボランティアについて（質問５～10）

地域連携活動において、元来難しいと感じるのは学生ボランティアとの関わりである。学生ボランティアの組織運営を経験したことがあれば、情報共有や連絡を取り合うことの難しさを実感すると思う。ボランティアは急な状況変化にも的確かつ迅速に対応できなければならない。そのためには連絡は密にしなくてはならないが、これがなかなか難しい。そこで、質問５～10では地域連携先がこのような点について、どのように感じているかを伺った。質問５の結果から、目的意識を一致することの難しさを感じていることは多いようである。一方で、質問６の学生を受け入れることのメリッ

13　高橋平徳、杉田浩崇、山﨑哲司「地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力を構成する概念に関する一考察」愛媛大学教育・学生支援機構、大学教育実践ジャーナル16, 47－52（2018－03）

トについては、「とても思う」の回答が大多数を占め、学生ボランティアを好意的に受け止めてくれていることが窺える。しかし、質問 7 の結果から、大学生が入れ替わるため長期的な活動には大学側や教員の関与が必要であるという要望は強いことが分かった。学生の参加意欲に関する質問 8 や質問 9 からは、少数ではあったが、急なリタイアや意欲喪失を感じるという回答が 3 割以上であることを考えると、見過ごすことはできない。

### ３．４　地域連携活動の連携体制について（質問11～14）

質問11～14は、地域連携活動の連携体制について尋ねた。質問11と質問12の回答からは、大学に対する信頼度と大学教員や研究室に対する期待度は高いことが窺える。しかし、質問13では自由記述により連携先として必要な相手を回答してもらったが、事務担当者を希望するものが散見され、新しい発見であった。さらに、質問14では大学との意見交換の場にニーズがあるかを尋ねたが、「とても思う」「少し思う」で大多数を占めた。大学と地域の双方が共に発展する好循環が「大学と地域の連携協働による都市再生の推進」[14] によって述べられており、その中でも話し合いの場の必要性が説かれているが、我々が活動する地域からも話し合いの場を求められていることが分かった。

## ４．考察

今回のアンケート結果から、著者らが行っている地域連携に限って検討するならば、概ね良好な関係を地域と構築できていると考えられる。これは、常に連携先と連絡を取り合い、迅速な対応やリスク管理を心掛けていることなどの成果ともいえる。以下に、筆者らの今後の活動方針について、いくつかの事例を紹介しながら 3 点にまとめたい。

まず、震災後、地域連携を再構築している宮城県・福島県の事例を紹介したい。宮城県・福島県とも、大学ではなく主に小学校・中学校を対象としているが、教育機関を軸にした地域づくりを考えている点や我々の地域活動の対象者も小学生が多いことなどから参考とした。宮城県・福島県ともに震災後、学校と地域との連携方針を新たに打ち出している。2017年、宮城県では、地域連携担当者として専属の教員が配置される仕組みを目指しており、幼児に向けたボランティア活動や、小中学生からのボランティア活動などを推奨している。早い時期からのボランティア活動が、地域への愛着などにつながると考えられており、そのために様々な地域連携活動が行われている。地域連携担当の職務として 1 地域と連携・協働した教育活動の総合調整（プランナー）、2 連絡・調整や情報収集・発信（コーディネーター）、3 地域と連携・協働した教育活動の実践と評価（アドバイザー）を選出し、組織として運営をしている（地域学校協働活動の実施状況に関するアンケート調査報告書, 2017）[15]。一方で、人材不足や、業務および活動を行ううえでの立場が不明確であるなど担当者が抱える問題点があげられている。福島県では、地域連携を担当する学校関係者は専門的な教職員（地域連携担当教職員設置要綱, 2017）[16] を配置し、地域学校協働活動推進員との連携[17] など人的資源の活用例もみられ、

14　https://www.chisou.go.jp/tiiki/toshisaisei/dai15/15sanko3.pdf（2022年12月12日）
15　https://www.pref.miyagi.jp/documents/3705/701465.pdf（2022年12月12日）
16　https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/334064.pdf（2022年12月12日）

受け入れ側と受入れ先の活動のミスマッチを軽減するための調整役が工夫されている。

これに対して著者らは、研究室やゼミ単位で活動関与しているため、少人数ではあるが、連携先との連絡係やイベント運営などそれぞれの場面で担当者を明確にし、学生の主体的な活動を促進している。加えて、教員は常にその動向を把握し、連携先との密な情報交換に務めている。少人数での活動は、地域連携活動の際に意思疎通もしやすく、立場が不明確になるなどの問題点も少ない。また、活動のミスマッチも数回にわたるミーティング等で解消されている。しかし、このような連携の方法は属人的になりやすいという問題点があり、継続という観点からみれば宮城県や福島県のように組織としての活動方法も一部取り入れていくことも検討する必要があるといえる。

次に、教育機関と地域の地域連携を謳っている省庁は多く、例えば、文部科学省中央審議会が2015年に発表した「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申（案））」[18] によれば、今後、１地域社会と学校が協働して取り組むこと[19] について述べられており、これからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿として（１）地域とともにある学校への転換、（２）子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築、（３）学校を核とした地域づくりの推進について述べられている。また、地域との連携を担う教職員の位置づけに関する答申等[20] には、地域との連携を担う教職員の役割の例などが記載されている。

しかし、本研究のように地域連携活動を行う際に受け入れ先が連携先に何を求めているかなどについて検討することを望むような方針は示されていない。地域連携においては、受け入れ先が求めていることを理解することが活動継続の上で必要となる。連携先のニーズを踏まえ、双方でその内容を共有した上で活動を進めて行くことが重要と考えている。

最後に、アンケート結果を踏まえて、定期的な活動報告などを実施して情報共有する必要性を強く感じた。現在、どのような地域連携やボランティア活動をしているのかを組織（大学）内で共有しておくことである。このことによって、連携先から事務に問合せなどがある場合に担当者以外分からないという事態が避けられる。特に、個人や研究室単位で複数のボランティア活動や地域連携をしている場合、同一のボランティア団体でも事業内容が異なることや類似した活動が他地域で実施されている場合などもあり、連絡先や内容は煩雑になるため組織内における細密な調整が必要だということを付け加えたい。組織に所属している以上、組織内の調整を行うことができなければ地域連携活動は上手く機能しないといえる。地域連携を行う際には、大学各関係部署との調整を丁寧に行える担当者でなければ、充実した活動と継続は困難であると、複数・多数の連携先を有することで改めて考えた次第である。

以下に本研究の著者らが実際に活動している地域連携やボランティアについて紹介する。

---

17 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/497788.pdf（2023年２月28日）

18 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1366006.htm（2023年２月27日）

19 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1366012.htm（2023年２月27日）

20 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf（2022年12月12日）

### ４．１　アーツ・イン・エディケーション

2015年から参加が始まり現在にいたる。静岡県熱海市にあるMOA美術館主催の児童作品展の坂戸鶴ヶ島地区の参加である。当初、城西大学近くの坂戸文化会館で開催していた。大学から学生と一緒に授業時間を利用して参加していた。主に絵画を額に入れたり、展示したりすることがメインの作業であったが、翌年から学生に作品展での司会を依頼された。また、ポスターのデザインやパンフレットのデザインなども絵が上手な学生にやってもらえたら嬉しいと要望があった。継続することによって、受け入れ側との信頼関係ができてきたと思われる。

学生の方も、司会者としての緊張感、小学生に賞状を渡す楽しさ、絵を描くことが好きで将来の仕事として視野に入れている学生など、参加する形の広がりがでてきた。一方で、参加している際、受入れ先の担当者からは常に感謝の言葉を頂くが、学生の参入が今までの活動と形が違ってしまうことで寂しさや不快感を持つ人はいないのかと常に気になって参加しており、その違和感は今も持ち続けている。受け入れ先と今回の展示会に関しての互いの問題点や疑問点などを話し合い次回に向けた反省会を定期的に設けている。

### ４．２　キッズワーク・プラス（坂戸市の子育て活動）

地域の子どもを対象に体力低下の改善と居場所づくりを目的とした地域共生事業である。大学や地域のボランティア等と協働しながら、地域の子ども達に運動する環境や共食の機会を提供し、スポーツや遊戯、食育など様々な体験を通して、体力向上や生活習慣改善に取り組むプログラムである。医療栄養学科の学生は、食育部門を担当し、子どもに対する栄養教育の実施、運動後に提供する食事の献立作成と調理を行った。

### ４．３　Happy-lucky-café

「キッズワーク・プラス」から小学生のアンケートによって「Happy-lucky-café」へと名前を変更し、継続している活動である。みんなが楽しくなるような名前を考えて欲しいと小学生に依頼し、城山小学校の生徒さんに考えてもらった名前である。

現在、小学生は遊び場の減少や治安の不安などから放課後に遊ぶ場所が減少している。さらに、子供の減少もあり球技などの遊びが難しくなっている。公園で集まってドッジボールやサッカーを同学年でしようとすると人数が足りないことがおきる。放課後に集まって遊ぶということが非常に困難になっている現状から、地域の公民館を借りて遊び場として提供している。資料作成や、保護者とのメールのやりとりなどは学生が対応しており、大学やアルバイトなどの利害関係がある場以外での対応を学ぶことができる。また、幅広い年齢層とも付き合うことが可能であり、小学生たちが何を望んでいるのか、親とどのような付き合いをしているのかが見てとれることから自分自身が親になったときに、どうありたいかなど考える機会にもなる。当日までに小学校に連絡し、何人くるか、苦手な食べ物はないか、どのような運動をしたいかなど事前に把握する。チラシを配布するが、前回遊んだ際の小学生の希望を盛り込んだ形で行っている。

### ４．４　リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越（がん患者・家族支援チャリティ活動）

がん患者さんやそのご家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん制圧に向けた世界共通のチャリティー活動である「リレー・フォー・ライフ」に参加している。年間を通した支援であるが、川越地区で実施される９月のイベント「リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越」には、城西大学が協賛しており、学科や研究室等で多くのチームが参加している。イベントの運営に携わるとともに、実行委員の皆さんと協働し、がん患者さんならびにその関係者の方達、参加者を支援している。各グループの活動内容は、全国にも紹介されるほど好評を得ている。リレーの基本である24時間チームで襷を繋ぐウォークにおいて、参加者からは「学生さんがいるので頑張れるよ」と感謝され、参加者の歩き続ける意欲につながっている。学生は参加者から感謝の言葉をかけてもらうことで大きな喜びを感じるとともに、参加者が昼夜問わず頑張って歩いているから自分たちも頑張って声かけ・サポートするというwin-winの関係が創造され、お互いの信頼関係が築かれている。また、イベント当日のみならず、参加のための準備・片付けを通して、地域活動の支援の仕組みを学ぶことができるとともに学生間の交流と絆も深まっている。

### ４．５　がんサロン川越（がん患者・家族支援）

がん患者、ご家族、ご遺族がお互い気軽に話ができる場所として利用される「がんサロン川越」に参加している。管理栄養士の有資格者である教員や大学院生が、がん患者さんやその関係者と交流を持ち、食事や栄養の話題を提供したり、がん患者さんの困っていることや不安、要望などを聞いたり、がんに対する食生活支援の課題を抽出している。また、川越地域のがん診療連携拠点病院の緩和ケアチーム、ホスピス、病院、訪問看護ステーションの医師・看護師等が集まって、参加者の支援や情報交換を行っている。

本研究では地域連携においてボランティア活動を受け入れてくださる連携先に求められることについて議論してきた。以下に地域連携に必要な視点を示したい。

第１に、地域との連携・協働を担う際、連携先は教員を通して大学を見ているということである。教員の資質が大学の評価そのものになる場合が多い。また、それらは学生も同様であり学生がボランティアなどで参加する際、学生を通して大学側が判断される。学生にも事前準備や知識などを修得してから地域に送り出す必要がある。学生だから許される、失敗しても学生のうちは許されるという価値観で送りだしてはいけない。学生こそが、大学の顔であり、もっとも効果的に大学を表現するリソースになることを充分認識して地域に送り出す必要がある。

第２に、学生に対して地域連携が学習効果として効果的であるということ示す必要がある。これらが明確に打ち出されれば、学生の意識や行動を変容させることも可能であろう。それらを教員側が説明し、受け入れ先にも丁寧に説明していく必要がある。そのためには、一過性のものや単年度の活動は、大学にとって効果的な手段とは言い難い。総務省の地学連携フォーラム[21]における活動事例では、長期的なプランで成功している事例が多く存在している。著者らも数年単位で受け入れ先と関係

21　https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html（2022年12月12日）

を継続していることで、お互いに理解を深め、信頼関係を築くことができている。

第３に、上記を踏まえたうえで、地域連携の中で学生の変容が確認できるシステムが必要である。つまり学生に学士力として地域連携活動が与える効果を期待できるようなプログラムを開発する必要がある。到達目標としてのディプロマ・ポリシーや、大学全体での方針などを踏まえた地域と継続して付き合うことを可能とするシステム作りが必要になる。地域連携は、大学と地域が同一の目的を持ち、そのことが明確にされることが望ましい。

最後に、本研究でのアンケート調査や実際の地域連携先での活動を通して、その構造を分析することができ、現状において、地域連携のために協働する関係者・関係機関等の課題を抽出することができたと考える。

さらにその課題を解決・改善するための方途を検討するためにも今後さらにインタビュー協力者を増やし検討を深めていきたい。また、アンケート調査から得た結果をもとに地域に貢献できる活動を行い、その効果を可能であれば数値化することを目標としたい。数値としての可視化が行うことができれば、エビデンスに基づいた地域連携に資する教員プログラムなども作成が可能と思われる。

※なお、本研究は、令和３年度学長所管の支援を受けて実施されたものである。

## 参考文献


1）中塚雅也・小田切徳美（2016）「大学地域連携の実態と課題」農村計画学会　農村計画学会誌 35（1）, 6－11

2）樋口とみ子，松村千鶴，外川正明（2007－09）「教育の総合大学としての地域連携のあり方に関する調査研究：京都府・京都市の現職教員・保護者・高校生を対象に」京都教育大学　京都教育大学紀要 111, 107－125

3）黒沢幸子，日高潤子，張替裕子，田島佐登史（2008）「学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長：その様相とキャリア教育の視点からの考察」目白大学　目白大学心理学研究＝Mejiro journal of psychology（4）, 11－23

4）池田幸代，小早川睦貴，中尾宏（2016－09）「大学の地域連携による学生教育の取り組み：地域資源を活用した商品開発プロジェクト」東京情報大学情報サービスセンター　東京情報大学研究論集，東京情報大学学術雑誌編纂委員会 編 20（1）, 1－13


## 参考URL


1）新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）（中教審186号）（2015）
（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365761.htm）（2022年12月12日確認）

2）新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申のポイント）（2015年）
（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/02/08/1365791_2_2.pdf）（2022年12月12日）

3）大学と地域の連携協働による都市再生の推進（2017）
（https://www.chisou.go.jp/tiiki/toshisaisei/dai15/15sanko3.pdf）（2022年12月12日）

4）地域との連携を担う教職員について（2015）
（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/10/07/1362263_07.pdf）（2022年12月12日）

5）都市再生プロジェクト（2001）
（https://www.chisou.go.jp/tiiki/toshisaisei/03project/index.html）（2022年12月12日）

6）地域連携担当の役割（2019）
（https://www.pref.miyagi.jp/documents/3700/784859.pdf）（2022年12月12日）

7）地域連携担当教職員設置要綱福島県教育委員会（2019）
（https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/334064.pdf）（2022年12月12日）

# A Policy Proposal For Regional Collaboration:

## Ideal Attributes of Collaborators and Agencies

YANAGISAWA Tomomi, HORI Yumiko

Key words : Regional cooperation, community cooperation, volunteer, quality

Abstract

The purpose of this study is to identify the qualities and roles required for regional collaboration. Also, I would like to make policy recommendations necessary for universities to engage in regional cooperation. A coordinator role is needed for university-community partnerships, such as in managing community activities, securing volunteers, and building networks with residents and various organizations. For universities to assume this role, university teachers need to have certain qualifications.

In the future, regional cooperation will require university officials and the local community to work together. Universities must also contribute as a social resource. For the region to develop in the future, university teachers will need to be able to build relationships of trust between the region and the university and to manage communication.

【地域教育実践報告】

# 学園祭の模擬店運営を通した「地域教育」の試み

## ――城西大学・短期大学三國ゼミナールの活動記録――

三國信夫*

キーワード：地域教育、学園祭、ゼミナール活動、アクティブ・ラーニング

## １．はじめに

2022年10月、城西大学・短期大学の学園祭であり、近隣の地域にも広く開かれた大型イベントとしての「高麗祭」が、３年ぶりに開催されることになった。

本稿では、この2022年に開催された第55回高麗祭にゼミナール単位で参加し、模擬店を運営した三國ゼミナールの活動について、その活動の際に取り組んだ地域教育の試みについて記録するものである。高麗祭への参加決定から、模擬店の決定、地域との関わり等の具体的な記録を通して、ゼミナール単位での地域社会との交流やそこから得られる学びについて今後に役立つ知見を見出せたらと思う。

## ２．高麗祭

50年以上の歴史を持つ高麗祭も、新型コロナウイルスによる行動制限により、残念ながら、2019年を最後に２年間開催が中止となっていた。中止が続いたことで、高麗祭を経験せずに学生生活を終える学生（例えば2020年入学の短大生）もいた。

高麗祭は、学生団体である高麗祭実行委員会によって、学生中心に運営されている。毎年、10月末から11月初頭にかけての週末３日間で行われてきたが、2022年度は３年ぶりに開催されたこともあり、10月29日（土）および30日（日）の２日間のみの開催であった。

2022年度の高麗祭のテーマは、「笑顔のその先へ」（Don’t　worry!! Be　happy!!）。実行委員会委員長であった竹野開氏によると、「このような状況であっても挫けず、前向きな気持ちで生きていこうという意思を込めて」、このテーマに決定したという。

図２．１　2022年度高麗祭パンフレットより

この高麗祭では、従来から、著名人の講演会や人気バンドのライブ、人気タレントのトークショーが開催されるほか、清光会館前では、城西大学・城西短期大学の父母後援会と同窓会によって物産展も開催され、長い行列を作るほど人気を得ていた。さらには各サークルや研究室の展示発表や、模擬

＊　城西短期大学・准教授

店が運営されていた。

特に、模擬店は、図書館前の大通りに沿って軒を連ね、高麗祭の一番お祭りらしい雰囲気を醸し出していた。2022年度には、３年ぶりにこの光景がキャンパスに復活したのであった。

## ３．ゼミナール単位での高麗祭への参加

２年間中止が続いたということもあって高麗祭を経験している学生も少なくなり（2022年度の在籍生については、学部４年生が１年生のときに高麗祭が開催されたのが最後になる）、３年ぶりの開催になってもサークルや各種団体に所属していない一般学生の参加が乏しくなることが懸念された。

そこで、2022年６月、高麗祭実行委員会は、一般学生の参加率を高めるために、ゼミナール単位での高麗祭への参加を呼びかける依頼状を各ゼミナール担当教員宛に送った。そして、第１回の全体会議を６月16日開催することとし、参加を希望するゼミナールの代表者は必ずこの会議に出席するようにと宣伝した。

三國ゼミナールが高麗祭に参加することとなった直接のきっかけは、まさにこの実行委員会からの呼びかけがあったからであった。

また、コロナ禍のイベント中止が続いたこと、長くオンライン授業が続いたことなどで在学生たちの「学生らしい体験」が不足していることも懸念されていたことから、実行委員会の呼びかけをきっかけとして、「学生らしい体験」や「学生時代の思い出」を得るためにも、筆者はゼミナール単位での高麗祭への参加を強く学生に促すこととした。

### ３．１　経緯

三國ゼミナールは、短期大学１年生（基礎ゼミナールＡ／B)、短期大学２年生（ゼミナールＡ／B)、経営学部３年生（ゼミナールⅠ)、経営学部４年生（ゼミナールⅡ）が存在する。ゼミナールの学習内容・テーマは、４学年ともに広く「観光」や「地域」に関する課題に取り組んでいる。今年度の高麗祭には、この４学年の全てのゼミナールが模擬店出店として参加することとなった。

高麗祭実行委員会からの依頼状を受けて、教員（筆者）から、以下のように説明をした。

「今年度は３年ぶりに高麗祭が開催されることとなりました。①教室だけではない、リアルなビジネスを学べること、②１つの目標を共有することで、ゼミ生同士の交流を深められること、③学生時代の想い出が作れること（場合によっては就職活動でアピールできること)、以上を理由に、ゼミナールの活動として高麗祭に参加したいと思います。」

参加するか否かを学生に尋ねることはせず、参加することを決定して伝えたのは、参加するためには出席が必須であった全体総会の日時が迫っていたこともあるが、それ以上に、参加することの教育効果が大きく期待されたためであった（ただ、本来であれば参加するか否かも学生に判断を委ねるべきことであるかもしれない。ここは、次年度以降の参加の際には検討し直したい)。

それぞれのゼミナールに以上の同じ内容の提案をしたところ、全てのゼミナールで好意的・肯定的にその提案を受け入れてくれた。ただ、その後の経緯は各ゼミナールによって異なる。以下にその経緯の概略を辿ってみたい。

### ３．２　活動目標および方針

教員（筆者）がさらに学生に提示した方針は、以下の通りである。

① 学生が主体的にビジネスを学ぶ活動にする。
② 一人一人が少しでも活動に関わろうとする。
③ 安売りはしない。価格に迷ったら、高いほうを選択する。
④ 学生時代の思い出をつくる。
⑤ 地域と関わる。

以下、項目ごとに説明したい。

「**①学生が主体的にビジネスを学ぶ活動にする**」としたのは、筆者が担当する経営学部ゼミナールと短期大学（ビジネス総合学科）ゼミナールはともに「ビジネス」を学ぶ学部・学科であるので、模擬店運営によって現実の社会と接点を持った形でビジネスを学ぶことが有益であると考えたからである。教室で学ぶ「経営学」「マーケティング」もそれぞれ大事であるが、それだけでなく、アクティブラーニングの場を提供することが現在の大学・短期大学には求められており、模擬店運営はまさにそうした場を学生に提供するものと考えられたからである。

主体的という点では、教員（筆者）からは何もアクションを起こさず、学生が中心となって活動することで、より体験としての学びが深くなると考えられたからである。

「**②一人一人が少しでも活動に関わろうとする**」とは、どうしてもこうした活動になると関わろうとする学生がいる一方で、他人事として関わりを避けようとする学生が出てしまうことから、新しいことにチャレンジすること、自ら関わることが、自分を成長させるということを繰り返し伝えて、濃淡はあってもこの活動に関わることを学生に促した。

「**③安売りはしない。価格に迷ったら、高いほうを選択する**」とは、模擬店で販売する商品の価格を下げることは、たくさん売ろうとする点では合理的な判断であるが、利益は少なくなってしまう。それよりも、価格は下げずに、アイディアと工夫で商品価値を高める努力をしようと学生の学びを促した。

「**④学生時代の思い出を作る**」とは、コロナ禍でイベントの多くが中止になった学生にとって、学生時代の思い出を作る機会が著しく少なくなってしまっていたことから、高麗祭への参加を大切な思い出の一つにしようすることであり、また就職活動をこれから迎える短大１年生と経営学部３年生にとっては就職面接などで「学生時代に力を入れたこと」などを説明する際の材料となるだろうという狙いもあった。

そして、本稿では最も大切な「**⑤地域と関わる**」についてである。前述したように、三國ゼミナールは、経営学部と短期大学の４学年の授業全てにおいて、「観光」と「地域」についての課題をテーマに取り組んでいる。例えば、自分の出身地の観光事情を調べ、その魅力を紹介する観光動画を作成したり、訪日外国人の動向や今後の観光政策を考えるために浅草などの観光地でフィールドワーク調査を実施したりしている。そうした点からも、この高麗祭への参加を通して、どのような形であれ地域と関わることを目標とし、そこから学びを得ることを学生に課した。

地域の名産物を販売すること、地域の方とコミュニケーションをしながら準備を進めること、などが地域と関わることの具体例として学生に提示された。

### ３．３　４つのゼミナールの具体的な活動

以下に、各学年のゼミナールがどのように高麗祭に関わるようになっていったのかを振り返っていく。

#### ３．３．１　短期大学１年生ゼミ

短大１年生は入学してまだ２ヶ月しか経っていないこともあって、ゼミ生同士、お互いの名前も覚えられていないことから、一つの目標に向かって頑張ろう、という雰囲気にも一番なりづらい学年であった。

そのため、まずはゼミ生同士の交流を活発にするために、教室の外に出てさまざまな課題をグループで取り組んでもらい、お互いのことを知る機会を増やし、少しずつチームとして参加する土台を形成していった。

その後、１人の男子学生が中心的な役割を担ってくれるようになった。高麗祭実行委員会から呼びかけられる全体会への出席も厭わず、他の学生の意見や希望を汲み取りながら準備を進めてくれた。

図３．１　１年生の話し合い

模擬店で販売する商品については、学園祭の定番ということで当初は豚汁に決定したが、他の団体と品目が重なることから高麗祭実行委員会から変更を求められ、再検討することとなった。

「⑤**地域と関わる**」という点から「埼玉県坂戸市の学校であることからもっと地域色を出そう」というある学生の提案から、埼玉県で話題になっているという「**肉うどん**」が選ばれた[1]。

その後の準備は、中心的な役割を担ってくれた学生が主導して、周囲の学生は受動的な形で進められた。

#### ３．３．２　短期大学２年生ゼミ

短大２年生は他の学年と異なり少人数であったこと、１年間のグループワークを中心としたゼミナール活動を通してお互いを知っていたこともあり、すぐにグループワークによって模擬店で取り扱う商品についての話し合いが始まった。リーダー格の学生が全体を引っ張る形で運営されていた１年生とは異なり、中心となる存在が見えぬまま、グループによる運営で準備が進められた。

取り扱う商品は、複数の候補から、最後は学園祭の定番ということもあって「**焼きそば**」が選ばれた。

ただ、焼きそばであると「⑤**地域と関わる**」という点で条件を満たさないことから、「**焼きそばパン**」も並行して販売することとし、そのパンを地域のベーカリーである「サン・シーロ」から購入することとした。

---

1　埼玉県のうどん生産量は、香川県に次いで全国２位である（平成21年農林水産省「米麦加工食品生産動態等統計調査年報」）

### ３．３．３　経営学部３年生ゼミ

経営学部３年生は、28名という４学年で１番の大所帯である。そのため、短大１年生のように１人の中心的な学生が全体を引っ張っていくのも難しく、また、短大２年生のように緩やかなチームワークで進行していくのも無理があった。筆者が観察していると、高麗祭に向けてグループワークを重ねていくなかで、少しずつ積極的に関わっていく姿勢を見せる学生が数人出てきた。そこで、その数人の学生（実際には７人）に幹部グループを作ってもらい、そのグループで全体を仕切る方式で準備を進めてもらうようにした。

取り扱う商品は、やはり複数の候補が挙がったが、調理のしやすさや学園祭の定番でもあることから「**ホットドッグ**」に決定した。そして「**⑤地域と関わる**」という観点からは、やはり短大２年生と同じように、川角駅前のベーカリー「サン・シーロ」から食材等を提供してもらうこととなった。

### ３．３．４　経営学部４年生ゼミ

経営学部４年生は、入学した2019年に高麗祭が実施されてはいたが、当時高麗祭に積極的に関わっていた学生はおらず、全員が初めての参加であった。就職活動ももっとも大変な時期であり、また卒業制作へ向けての準備もあることから、筆者としては最も参加に対して消極的になるのではないかと予想していたが、実際に高麗祭への参加を提案したところ、思いのほか前向きに捉えてくれる学生が多かった。コロナ禍で課外活動を含めた学生生活が制限されてきたことからも、むしろ最後の１年でこのような機会を得られることに喜びを感じているようでもあった。

図３．２　４年生の話し合い

高麗祭へ向けての準備は、形態的には短大１年生と同じように１人のリーダー格の男子学生が引っ張っていくペースで進められたが、短大１年生と大きく異なるのが、その他のメンバーが傍観するのではなく積極的に協力してくれた点である。リーダー格の男子学生が上手に仕事を振り分けていた面も大きいが、その他のメンバーもこの活動に期待して協力してくれたことも大きかった。

取り扱う商品は、「**⑤地域と関わる**」という観点から、埼玉県内の名産物をリサーチして、調理のしやすさなどを考慮して秩父の名物グルメ「**みそポテト**」に決定した。

## ４．「地域教育」の観点からの振り返り

４学年の三國ゼミナールが６月から準備を進め、夏休み中の準備を経て、10月29日と30日の高麗祭当日を無事に迎えることができた。

ここからは、各ゼミナールの活動が、地域教育という観点でどのような成果を得たのか、あるいは活動によって見えてきた課題は何か、などについて検討したい。

### ４．１　４つのゼミナールにおける「地域教育」の実践と課題

地域教育を学園祭に参加する過程で実践することは初めての試みであり、また、学園祭の参加自体も３年ぶりとあって、地域教育に関してはなかなか正直なところ十分な準備もできなかった。ただ、

| | 短大１年ゼミ | 短大２年ゼミ | 経営３年ゼミ | 経営４年ゼミ |
|---|---|---|---|---|
| ゼミ生数 | 14人 | ９人 | 28人 | 20人 |
| 販売商品 | 肉うどん | 焼きそば<br>焼きそばパン | ホットドッグ | みそポテト |
| 地域との関わり | 全国２位のうどん県である埼玉のグルメ | 材料を地域のベーカリーから仕入れる | 材料を地域のベーカリーから仕入れる | 秩父観光協会から情報提供を受ける |

表４．１　三國ゼミナールの模擬店と地域との関わり

ビジネスについて学んだり、ゼミ生同士の親睦を深めたりするだけでなく、地域との関わりを意識することで、学園祭への参加が、単に売り上げを大きくするだけの単調な活動になることが避けられ、この活動が「地域から学ぶ」「地域のためになる」活動でもあるという意識を学生に持ってもらえたように感じられる。

総括的に言えば、今後は模擬店運営の準備ばかりに注視するのではなく、地域のことを学ぶ時間をより大きく割き、地域の食材について学んだり、地域の企業と提携したりしながら学園祭に参加することができれば、学生にとってより深い学びが体験できるだろう。これは今後の課題である。

以下は、未完ながらも、今年度に試みた地域教育の活動記録である。

## ４．２　短期大学１年生ゼミ

４つのゼミナールの中で、最も心配されたのがこの学年であった。１人の中心的な学生をサポートする学生がなかなか出てこず、リーダーが１人で仕事を抱え込んでしまっている面があった。高麗祭で模擬店を出店すること自体が危ぶまれるような時期もあったため、**地域教育**まで取り込む余裕がないまま当日を迎えてしまった。

図４．１
肉うどんの調理風景

肉うどんが地元埼玉県のグルメという点だけが地域性を持つことであって、それ以外に例えば地元の食材を調べて取り入れるなどのことができなかった点は反省点であり今後の課題であろう。

チームワークにも課題があった学年であったが、当日になると積極的に関わり始めてくれるメンバーもいて、ゼミナールの活動としてはギリギリ及第点を与えられる結果で終えることができた。売れ行きも好調で、長い列ができ、２日間とも売り切ることができた。

図４．２
２日間とも完売した

## ４．３　短期大学２年生ゼミ

短大２年生は、商品の試食、食材の調達、看板作り、当日の運営全てにおいて、誰かが強いリーダーシップを発揮するということではなく、全体がチームとしてまとまり、最も順調に準備を進めていった。

**地域教育**の観点では、焼きそばの具材などに地域の食材を使用することも考えられたが、焼きそばパンをあわせて販売するにあたり、そのパンを地域で手に入れようということとなった。川角駅前のベーカリー「サン・シーロ」は、短期大学の「地域連携Ⅱ」の授業でも度々お世話になっており、今回の高麗祭での模擬店運営に関しても学生からの依頼を快く引き受けてくださった。パンの仕入れの

際には、複数のサンプルを譲っていただき、それを教室内において全員で試食し、焼きそばパンとして最もふさわしいパンを選定した。その後、価格の交渉、納品、支払いまで、複数回学生が「サン・シーロ」に足を運び、その過程でベーカリービジネスに触れることもできた。

図４．３　焼きそばの販売風景

図４．４　図４．５　試食用のパン

図４．６　パンの試食会

## ４．４　経営学部３年生ゼミ

経営学部３年生では、７人の幹事チームが中心となり、準備を進めた。やはり販売品目を決定する際には複数の候補が挙がったが、最終的には多数決でホットドッグとなった。ゼミ生が28名と多いため、役割ごとの部門を作り、その部門ごとに幹事が割り振られ、以降は部門主体で準備が進められた。「マーケティング広報部門」「会計記録部門」「開発製造部門」が設けられた。

図４．７　サン・シーロでの交渉

**地域教育**の観点からは、ホットドッグの材料を全て（ソーセージを含めて）川角駅前のベーカリー「サン・シーロ」を窓口に仕入れることとした。近隣のスーパーマーケット等の価格調査も実施した上で、当日の材料の運搬などの便宜を考えると大学から徒歩圏内の店舗にお願いしたほうが良いという判断もあったようである。

「サン・シーロ」のご夫婦は、全面的にバックアップしてくださった。パンを切るために「パン切り包丁」があることも知らなかった学生たちに、例えばパンに切れ目を入れる際には少し斜めに入れると良いなどの具体的なアドバイスもしてくださった。

また、販売する際の容器についてもサンプルを見せてくださり、学生たちに選ぶ機会を設けてくださった。特に「開発製造部門」に所属する学生は、何度もお店まで足を運び、高麗祭当日に向けて準備を着実に進めていった。

高麗祭当日、地域のベーカリーと提携して製造・販売していることが示せるように、特別なボードを用意して掲示した。ゼミナールの模擬店運営が、地域と関わりながら行われていることを示すためであった。

図４．８　提携を示すボード

## ４．５　経営学部４年生ゼミ

経営学部４年生では、１人のリーダー格の学生が全体を統括しながら、その周囲に彼を支える学生も集まり、また、そのリーダーが上手に仕事を割り振ってくれたために、みんなが関わりながら準

備を進めることができた。それぞれの学年を比較することは意味のないことかもしれないが、やはり短大１年生と比べると年功を積んだだけあってか、特にアルバイトなどの経験の量の差は大きく、仕事の進め方も上手であった。

**地域教育**の観点から見ると、４年生は販売品目そのものを埼玉県内の名物にしようと絞り、検討していた。最終的には、ゆかりのある学生もいたことから秩父の名物グルメである「みそポテト」になったという点は前述の通りである。

４年生は、さらに地域との関わりを深めるために、秩父観光協会に赴き、秩父の名産をアピールする代わりに何か秩父のものを提供してもらえないか交渉をした。最終的には、彩の国秩父地域観光協議会が発行する無料観光ガイドブック「ちちぶ路」とポストカードを200部超提供してもらった。

図４.９　ガイドブック等の配布

高麗祭当日には、そのガイドブックとポストカードを店舗前に設置して、希望する客にはそれを提供した。また、複数のポスターや看板などで、みそポテトが秩父の名産品であることを前面に出してPRするようにした。さらに、みそポテトのマスコットキャラクターを作ったり、商品を待つ客にみそポテトの購入本数を示す札をポテトのデザインで作ったりして、模擬店全体で秩父の名産物をアピールするようにした。

こうした秩父のPRの効果を測定する方法はないが、学生には、単に売り上げを伸ばすだけでなく地域の魅力を伝える活動をしているという意識も芽生えていたようであった。

図４.10　無料ガイドブック

図４.11　無料ポストカード

図４.12　秩父をPRした模擬店風景

図４.13　オリジナルポテト札

図４.14　手書き看板

図４.15　オリジナルマスコット

## 5．おわりに

図５．１　上級生の店番

４学年のゼミナールが高麗祭に参加することが決まったとき、自分が決めたこととはいえ、この先どうなるのだろうと不安がよぎることも多々あった。実際に、ゼミ生同士がいつも仲良く活動していたかというと決してそのようなことはなく、大小さまざまなトラブルは各学年頻繁に起きていた。

ただ、一方で、こちらが予期していなかった高麗祭参加の効果を多く見ることができた。例えば、普段の授業ではあまり積極性もなくおとなしかった学生が、面倒な仕事を積極的に引き受けてくれたり、やはり内向的な性格の学生が調理の場面で絶大な能力を発揮してみんなを救ってくれたり、想定外の様子が観察できたことは教員として大きな喜びであった。

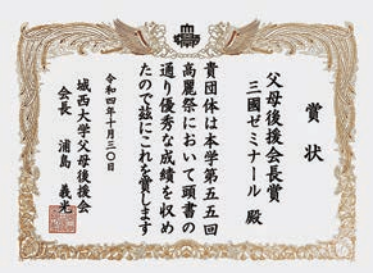
図５．２　OB（左）のサポート

さらに、特筆すべきは、４学年が同時に参加したことで、４学年の交流が始まったことである。例えば人数の少ない２年生のところに、上級生たちが交代で店番を務めてくれたりした。また、準備からOBも手伝ってくれて、このOBを起点に各学年の交流が深まったりした。こうした交流は、高麗祭当日に父母後援会から「高麗祭を４ゼミ一体となって盛り上げてくれた」と評価され、さらには「父母後援会長賞」という賞を４つのゼミナールで受賞することとなるという、想像もしなかったご褒美をいただけることになった。

これらは本稿の主題とは離れるかもしれないが、学園祭という大きなイベントが持つ可能性を感じさせる出来事であり、したがって今後のゼミナールにおける地域教育についてもこの高麗祭というイベントをうまく活用できたらと思う次第である。

図５．３　４年生が表彰を受ける

図５．４　各学年の代表者


賞状

父母後援会長賞

三國ゼミナール　殿

貴団体は本学第五五回高麗祭において頭書の通り優秀な成績を収めたので茲にこれを賞します

令和四年十月三〇日

城西大学父母後援会

会長　浦島　義光

図５．５　父母後援会長賞

### 参考文献

１）若林隆久（2017）「学園祭の模擬店運営を通じたアクティヴ・ラーニングの実践と課題」『地域政策研究』高崎経済大学地域政策学会, 20（２）, 125－135.

【地域教育実践報告】

# 地域連携PBLの活動報告

## ――2022年度の主なプロジェクトの振り返りから――

勝浦信幸*

キーワード：ソーシャル・マネジメント、地域連携PBL、協創、主体的で深い学び、社会人基礎力

## １．はじめに

城西大学経済学部勝浦ゼミ（以下「勝浦ゼミ」という。）では「ソーシャル・マネジメント（創造的地域経営）」を共通の研究テーマとし、様々な実践的な教育（PBL：Project Based Learning）に取り組んでいる。

「ソーシャル・マネジメント」とは、「ニュー・パブリック・マネジメントとソーシャル・マーケティングが結合したもの」（井関ほか2005）とか「マルチステイクホルダーのコンフリクトの最小化とマルチステイクホルダーの変容をマネジメントすること」（大室2014）などと定義される。さらに井関らは「ソーシャル・マーケティングとは、成熟した地域社会における需要サイドと供給サイドの同一化を踏まえた価値創造である」（井関ほか2005）とする。需要サイドと供給サイドの同一化というのは、ヴィンセント・オストロムがその編著「都市型サービス供給システムの比較研究（Comparing Urban Service Delivery System）」（1977）で著した「coproduction[1]」とも共通する。V. オストロムのいう「coproduction」については、荒木昭次郎が「参加と協働」（1990）で日本に紹介したことにより、「協働」という言葉に訳されて日本の地方自治体に広まっていった。その後「coproduction」は、「協働」以外に様々な分野で「共同創造」「共同制作」などとも訳されている。

一方、2016年12月の文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省HP、2016）第６章及び第７章では、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という視点に立って、「主体的で対話的な深い学び」のためのアクティブ・ラーニングの重要性について触れられている。そこでは「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、地域社会との連携・協働による教育活動も求められている。また、大学に対して文部科学省は、「地域を志向した大学であること」「地域が求める人材を育成すること」を求めている（文部科学省HP、2013）。

このように「ソーシャル・マネジメント」は協働をベースとするものであり、それを研究テーマとする勝浦ゼミのPBLは、地域社会との連携・協働が不可欠の要素となっている。それは、城西大学の「協創」にも繋がり、ディプロマポリシーの「社会の多様性に配慮して主体的かつ協働的に実社会に貢献できる能力」の向上にも資するものであると考える。

---

＊　城西大学経済学部特任教授

1　公共サービス効率化のために需要サイドである住民も共同生産者として供給サイドに参画するという考え。

本報告では、2022年度のこれまでに実施した地域との協働・協創による勝浦ゼミのPBLの中から３つの主な事例について、参加した学生たちの振り返りなども含めて報告するとともに、若干の考察と課題について述べたい。

## ２．高齢者スマホ教室

### ２．１　概要[2]

【日時】2022年４月16日（土）及び４月30日（土）　それぞれ13：00～16：30
【会場】鶴ヶ島市富士見市民センター集会室
【連携主体】鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会（市民活動団体）
【参加者数】各回高齢者35人　学生アシスタント（勝浦ゼミ生）35人　その他スタッフ約10人
各回計約80人　２日間でのべ約160人

### ２．２　経過と準備

まもなく３Gサービスが終了[3]するということで、いわゆるガラケーからスマホへの移行が進んでいる。使えなくなると聞いて慌ててスマホに買い替えた高齢者たちには、販売店などが開催するスマホ教室が用意されている。しかしながら、それらのスマホ教室は、時間も限られていて一方的（しかも有料）な講義であり、高齢者の求めに応じきれていないという声が多くあった[4]。このようなことを背景に、鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会事務局から「高齢者スマホ教室を企画したいが、学生たちに協力してもらえないか」との依頼があった。当初事務局では３～４人の学生アシスタントを期待していたが、勝浦ゼミで企画を練る中で３～４人では十分にサポートできない可能性があるので、参加高齢者数以上のアシスタントによるマンツーマンでのサポートが有効ではないかとの逆提案を事務局に対して行った。

ゼミ生全体にアシスタント候補を募ったところ、このプロジェクトにゼミ生35人から参加希望があった（このため高齢者の参加申込みの上限を35人までとした）。このメンバーを中心に、コロナ禍ということもありZoomやLINE　WORKSを活用して、講師による事前学習や事務局等との情報共有をこまめに実施した。

参加者募集にあたっては、難易度レベルを４段階に分けて、第１回の４月16日は「甘口（レベル１）」と「ちょい甘（レベル２）」、第２回の４月30日は「ちょい辛（レベル３）」と「中辛（レベル４）」としてレベル分けをした。しかしながら、参加者は各自のレベルに合わせて申し込んだというより、スケジュールが許す限り、「甘口」から「中辛」まで全てに参加を申し込んだ。

### ２．３　当日

ゼミ生たちは、開始１時間半前の11：30に集合し、会場設営、事前打合せ、受付準備などを行っ

2　https://www.josai.ac.jp/news/20220418-01.html
3　KDDIは2022. 3. 31にすでに終了。ソフトバンクは2024. 1. 31に、NTTドコモは2026. 3. 31に停波予定
4　鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会事務局山本恵男氏からの聞き取り

た。会場は指定席とし、２人用のテーブルの一方に担当ゼミ生の名前のシールを、もう一方に参加予定高齢者の名前のシールを貼って、サポートする側・される側双方が名前で呼び合えるように工夫を凝らした。一応講師はいたが、参加者たちは講師の話を聞くよりも学生アシスタントとのマンツーマンでのやり取りを楽しんでいた。

終了後、ゼミ生たちは毎回振り返りのためのミーティングを行った。コロナ禍で途絶えていた学年を超えた対面でのミーティングを新年度早々にできたことは、その後のゼミ活動のチームワークにも良い影響（顔を覚えられただけでも）があったと思う。

## ２．４　評価

### ２．４．１　参加高齢者の声（インタビューによる）

・「孫のような若い方とお喋りしながらわかりやすく教えていただき、とても楽しかった。」

・「家族にはなかなか聞きにくかったが、学生さんが丁寧に話を聞いてくれたので、有り難かった。」

・「久しぶりに若い人と会話ができた。何よりそれが楽しかった。」

・「スマホの使い方について、学生さんがとても詳しいので驚いた。」

など、学生がマンツーマンで高齢者に寄り添う形でのスマホ教室は、参加者に高く評価していただいた。

### ２．４．２　連携主体（富士見地域支え合い協議会）による評価（インタビューによる）

・「スマホでやってみたいことが参加者それぞれで違うし、レベルもバラバラなので、どうしたものかと悩んでいたが、学生がマンツーマンでわかりやすく説明してくれたので助かった。」

・「支え合い協議会のスタッフも高齢者ばかりなので、孫のような年代の学生たちと一緒に企画し、運営できたことで、気持ちが若返った。」

・「会場に学生たちがいてくれるだけで、明るくワクワクした雰囲気になる。」

・「来年度もぜひ一緒にスマホ教室を開きたい。」

など、連携主体からも高い評価をいただいた。

### ２．４．３　参加学生の声（インタビューによる）

・「教えることができるか不安だったが、わからないところは近くにいるゼミの先輩に助けてもらいながら、何とか質問に対応できた。達成感を感じたし、自信にもなった。」

・「高齢者と会話するのは生まれて初めてだったのでとても心配だったが、真剣に聞いてくださったので話しやすかった。コミュニケーション力がついたように思う。」

・「意外と自分にもコミュニケーション力があることに気づいた。少し自信がついた。」

・「アシスタントと言っても黙っていては始まらないので、自分から主体的に話しかけるようにした。実行できたと思う。」

・「アシスタントをしているときも楽しかったが、終了後の振り返りミーティングで先輩たちと語

り合えたのは有意義な時間だった。」

など、参加ゼミ生も概ね高い評価をしている。特に「初対面の人との会話に自信が持てた」という声が多かった。毎回３時間30分以上、初対面の他人と対話するという経験はあまりできないはずなので、そこから得られたものは大きかったように思う。

### ２．４．４　参考資料

参考資料として、参加ゼミ生が2022年度地域連携活動発表会のために作成したパネルを掲載する。

図２．１　2022年度地域連携発表会用のパネル（勝浦ゼミ３年上間月乃作成）

## ３．「レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に！」

### ３．１　概要[5]

【日時】2022年10月１日（土）　10：00～14：30

【会場】カインズモール川島　蔦屋書店前駐車場

【連携主体】埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（川越市、坂戸市、鶴ヶ島市、川島町、毛呂山町、越生町）、埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）、カインズ川島インター店、ブラジル

5　https://www.josai.ac.jp/news/20221003-04.html

ストア、アマゾン川島FC、NPO法人川島町国際友好プラザ
【参加ゼミ生数】勝浦ゼミ生47人
【来場者数】約5,300人

### ３．２　経過

埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（略称「レインボー協議会」。以下「レインボー協議会」という。）は、埼玉県中央部の川越市を中心に坂戸市、鶴ヶ島市、川島町、毛呂山町、越生町の６市町（設立当初は日高市と含めた７自治体）で構成される広域行政推進の組織である。レインボー協議会は、「第３次埼玉県川越都市圏まちづくり基本構想・基本計画（レインボープラン）」に基づき、公の施設の相互利用、婚活事業、広域防災などに取り組むとともに、構成自治体が順番に幹事となって広域観光のPRや都市圏住民の相互交流を目的に「レインボーまつり」を開催してきた。2022年度はコロナ禍が少し落ち着いたことから３年ぶりに「レインボーまつり」が開催されることとなり、川島町がその幹事となった。

前年の2021年度に勝浦ゼミ生たちが第６次川島町総合振興計画の政策研究員として関わったことなどの縁から、川島町政策推進課から一緒に企画を考えてくれないかとの申し出が勝浦ゼミにあった。３年ぶりの開催であり、これまで実施してきた内容も講演会などが中心で若干マンネリ化の感もあるので、地域活性化につながるような企画を学生たちの新しい発想で考えてほしいとのことであった。

地域の課題を地域の様々な主体の連携によって解決を試みようというソーシャル・マネジメントが勝浦ゼミのテーマなので、川島町をはじめとする６市町、地元の国際交流NPOなどとの連携は、大変ありがたい機会であった。

企画内容については、各学年のゼミで議論を重ねた結果、多文化共生社会に向けたインターナショナルフェスティバルとした。実は、勝浦ゼミでは2015年から2018年まで５回（2015年は春秋２回）インターナショナルフェスティバル（通称「つるがしマルシェ」）を開催してきたが、諸事情や新型コロナウィルスの影響で中断を余儀なくされてきた。ゼミ生たちは動画などで先輩たちの活動をよく知っていたので、イメージしやすかったということもあった。

企画内容は、勝浦ゼミ生たちが提案し、レインボー協議会構成市町との調整を経た結果、次のようなものとなった。

１　目的（一部抜粋）
　今回開催する「レインボーフェスティバル」は、第３次レインボープランで掲げる施策「地域や世代を超えた交流の促進」に基づく事業として、地域や世代、国籍を超えた都市圏住民間の相互交流を図るとともに、都市圏の一層の発展や当協議会及び広域観光PRを目的として開催する。
２　名称「レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に！～」
３　日時　2022年10月１日　10：00～14：30
４　会場　カインズモール川島　蔦屋書店前
５　交通　東武東上線若葉駅から会場までシャトルバスを運行
６　主催　埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（レインボー協議会）
７　共催　埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）

城西大学経済学部勝浦ゼミナール

8　協力　カインズ川島インター店、ブラジルストア、アマゾン川島FC、NPO法人川島町国際友好プラザ

9　来賓　川島町議会議長、埼玉県川越比企地域振興センター所長

10　世界のグルメの出店　12ブース
セネガル、チリ、フィリピン、バングラディシュ、ブラジル、ペルー、コロンビア
ベトナム、スリランカ、イタリア、アメリカ、パラグアイ

11　構成６市町の出展　６ブース

12　地元企業・NPOの出展　６ブース

13　地元高等学校の出展　１ブース

14　世界のダンス・音楽・ステージショー
パラグアイ・アルパ、ブラジル音楽、カポエイラ（ブラジル）、ご当地ヒーローショー（城西大学経営学部石井ゼミも出演）、チリダンス、セネガル太鼓とダンス、ベリーダンス、アメリカンポップス、ビートルズナンバー、ペルーダンス、サンバ

15　想定来場者数　5,000人

### ３．３　準備

勝浦ゼミ生主体で準備を進めていくので、何よりもチームづくりが重要であり、そこから始めていく必要がある。新年度早々に、実行委員長、副実行委員長、本部チーム、会場チーム、ステージチーム、広報チーム、出店チームの５チームに分けて、希望を募った。１年生はゼミ活動についてよく理解できていなかったことなどから、参加希望はなかった。また、４年生はまさに就活最中でもあり、参加希望がなかった。結局、２年生25人と３年生22人の計47人でチーム分けを行い、準備にとりかかることとなった。

実行委員長、副実行委員長を３年生が担うことになったものの、各チームのチームリーダーがなかなか決まらない。それ以前にチーム毎の打ち合わせにメンバーが出席しない、あるいはチーム毎のグループLINEに反応しないという状況であった。何とかチームリーダーが決まったが、３チームのリーダーを２年生が担うという結果となった。

７月中にポスター、チラシデザイン完成、８月中にはグルメ出店者やステージ出演者たちへの説明会２回開催、９月には完成したポスター、チラシなどの配布、当日のパンフ等の作成など、川島町政策推進課を通してレインボー協議会構成６市町と調整しながら準備を進めた。

### ３．４　当日

レインボーフェスティバル当日は晴天となり、開会式から閉会まで来場者が途切れることなく、大盛況で終わることができた。城西大学地域連携センターもTJUP事務局として活躍してくださった。出展・出店ブースの方々も会場を盛り上げるのに協力的であり、それぞれのブース間でも、来場者間でも多文化交流が盛んに行われた。ステージで繰り広げられた各国の音楽やダンスも盛り上がり、ステージ前では多くの来場者が踊りまくっていた。音楽やダンス、グルメに国境はない。

また、公式来場者数は想定を上回る5,300人と過去最大であった。来場者が想定以上ということは、運営側には様々な場面で臨機応変の対応が求められる。駅から会場までのシャトルバスに乗り切れない来場者、すぐに溢れてしまうゴミ箱、トイレのチェックや掃除、落とし物、迷子、会場案内やそのアナウンス対応など、指示を待っていたのでは対応困難なことが多く、その場での適切な判断が求められる。ゼミ生たちは苦悩しながらもそれぞれ適切に対応していた[6]。

## ３．５　評価

### ３．５．１　来場者の声（インタビューによる）

当日の来場者に聞いた感想は、以下のとおりであった。

・「学生たちが主体的・積極的に動いていて、好印象を受けた。」
・「若葉駅でシャトルバスに乗り切れない人たちからの苦情に対して、本部に確認しながら臨時バスを依頼するなど適切に対応していた。学生でそれができるのはすごい。」
・「学生たちが運営しているという姿自体が、参加者をワクワクさせてくれる。」
・「受付の学生には丁寧で適切な応対をしてもらい、とても嬉しかった。」

など、参加者には好印象を持っていただいた。

### ３．５．２　連携主体（川島町政策推進課Ａ氏）による評価（インタビューによる）

＜自治体として大学（学生）と連携する目的、意義などについて＞

・若い学生ならではの企画を取り入れたいというのが目的であった。
・実際に多くの来場者の方々に満足してもらえたのは、自治体職員にはない学生の斬新な視点を企画に組み入れられたからだと思う。
・自治体主催のイベントに若者が関わることが少ない中、若い世代の活躍の場を地域に設けることの重要性を発見することができた。

＜連携して苦労したことについて＞

・準備段階での連絡調整がスムーズに進まなかった。学生にとっては、本業である学業の合間での対応しかできなかったこと、一方自治体職員としては「仕事」として取り組んでいることのギャップが理由だと思う。
・学生の主体性に任せることにしたが、その加減が難しく、一部では進行の遅れからフォローに追われる時期もあった。

＜連携したメリットについて＞

・学生の視点を知り、理解することができた。
・川島町には大学が所在していないので、今後の政策立案等の参考になる。
・イベント当日、自治体のスタッフだけではとても対応しきれなかった。学生スタッフの存在は大きかった。

---

6　来場者の評価からも適切に対応していたことが窺われる。

＜大学との連携にあたって今後注意した方がいいことについて＞

・イベントの準備・実施にあたり役割分担をすることは必要ではあるが、進捗状況の確認と共有は密に行った方がいい。遅れている作業の進行を促すことにもなり、フォローの先手が打てる。

・学生に決定権を委ねる部分を増やした方がいい。自治体が関係するイベントでは組織という壁など制約が多くなりがちだが、学生のモチベーションを高め、より成長できると思う。

### ３．５．３　参加学生の評価（振り返りアンケートから）

レインボーフェスティバル参加ゼミ生に対して、後日振り返りアンケートを実施した。ここではその結果の一部について報告したい[7]。

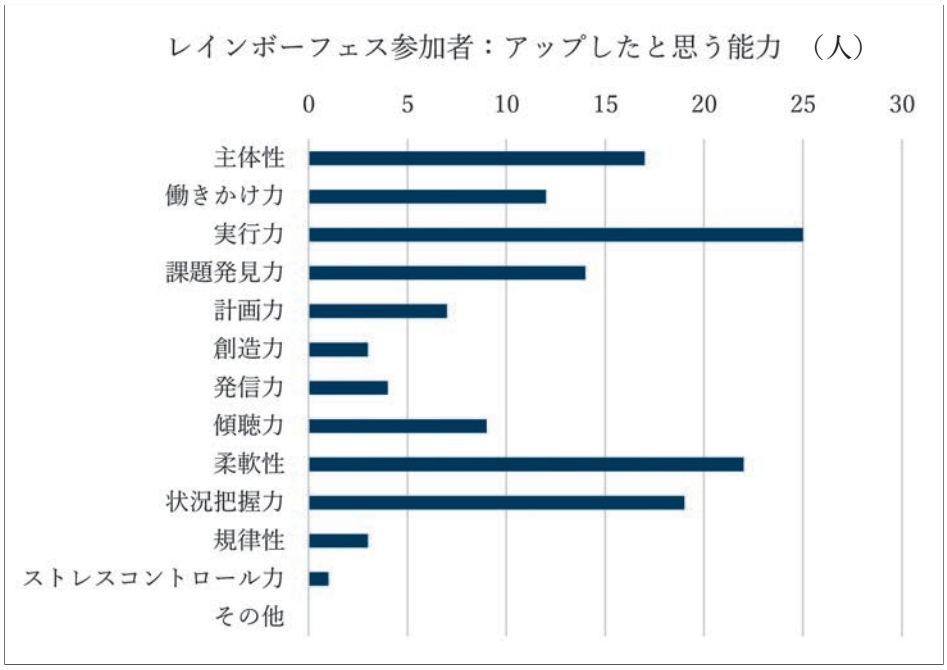



図３．１　参加したことによりアップしたと思う能力（複数回答　n＝42）

7　振り返りアンケートは、ゼミの授業時間に１年生から４年生の出席者全員に対して、各プロジェクトの参加の有無とその理由、今後の参加意向などについて行った。回答者数72人、うちレインボーフェスティバル参加者の回答者42人、長野市りんご農家応援プロジェクト参加者の回答者12人。詳しい分析等は別の機会に報告したい。

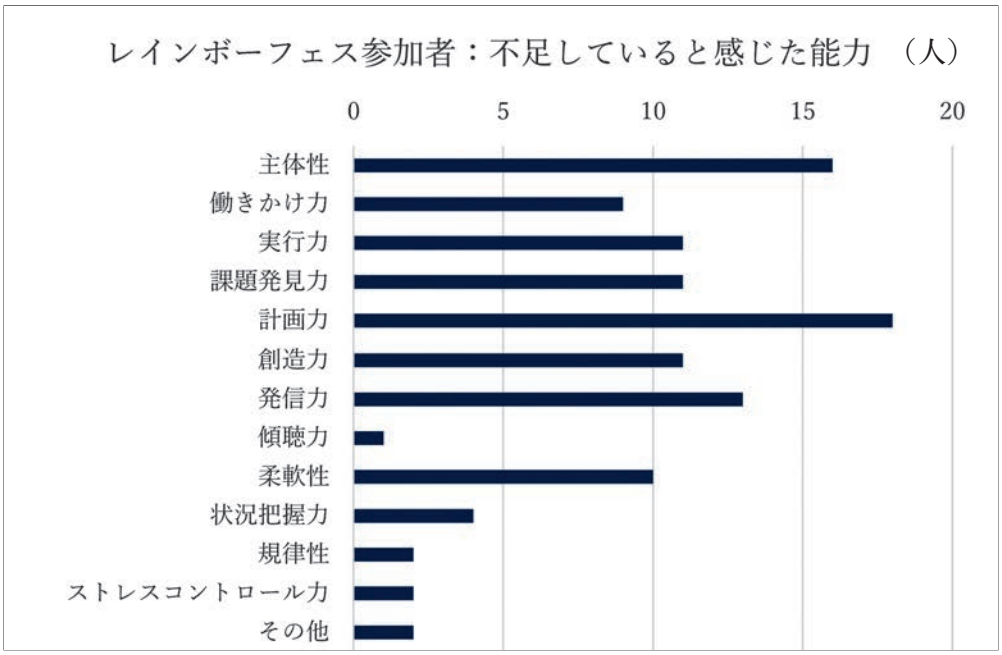



図３．２　参加してみて不足していると感じた能力（複数回答　n＝42）

## ４．減災のための長野市りんご農家応援プロジェクト

### ４．１　経過と概要[8]

2019年の台風19号で長野市のりんご農家が大きな被害を受けたことがゼミで話題になった。その際、「台風が来るのは３～４日前にわかるのだから、一気に収穫してしまえばいいのになぜ収穫してしまわないのだろう」という意見が出た。その声に長野市出身のゼミ生Ａが、「りんご農家の多くは中山間地域や過疎地域。りんご畑を管理しているのは高齢者ばかり、しかも、りんごの木に登ったり、脚立を使ったりと大変。りんごは結構重いんだよ。一気に収穫なんて人手が足りなくてできないのが実情」と発言した。

「じゃあ、ゼミで収穫のお手伝いができないかな～」との提案が誰からともなくあがり、Ａが知り合いのりんご農家さんをゼミと繋いでくれたのがこのプロジェクトのきっかけであった。

コロナ禍が少し落ち着いた2021年10月９日（土）～10日（日）に第１回を実施し、今回は２回目の実施となった。

概要は次のとおり。

【日時】2022年10月８日（土）～９日（日）　１泊２日

【場所及び連携主体】長野市若穂保科地区りんご農園

【参加費】各自15,000円程度（交通・宿泊費）自己負担

8　https://www.josai.ac.jp/news/20221013-04.html

【参加者数】勝浦ゼミ生14人
【収穫したりんご数】約5,200個

### ４．２　準備

手挙げ方式（主体的）で決まった幹事長が、訪問する長野市のりんご農家と調整して日程を確定後、Zoomで２回説明会を開催し参加ゼミ生を募った。参加ゼミ生確定後、りんご農家近くの宿泊施設を予約して、自動車を提供できる参加者を把握し、配車計画を参加者に提示するという段取りで準備した。

前回はレンタカーを３台利用したが、自己負担額が高額となってしまった。2022年は交通費を抑えるために自動車を提供できる参加者を募り、乗り合わせで長野市に向かうことになった（同乗者への補償のある任意保険加入が条件）。

２日間のスケジュール、持ち物、服装、注意事項等は、幹事長がりんご農家と連絡を取り合って決定し、参加者に共有した。昨年同様、感染予防を徹底すること、検温チェックとワクチン接種済みであることを参加条件とした。

### ４．３　１日目・２日目

１日目は、７：00に坂戸駅南口に集合してりんご農家の所在地と行程を確認し合ってから分乗して出発した。途中、LINEで互いの現在地を確認し合いながら、10：30に長野市のりんご農家に無事到着。到着後、りんご農家の方から、収穫した方がいいりんごと収穫するには早すぎるりんごの見分け方、枝からの取り方、園芸用３本脚立のセットの仕方などの簡単なレクチャーを受けた。参加ゼミ生たちは、脚立に上ってりんごを枝から取る者、取ったりんごを受け取ってカゴに入れる者、カゴに入れられて集められたりんごをコンテナにきれいに収める者など、自主的に役割分担、チーム分けをして収穫に取り組んだ。

１日目は16：00過ぎに終了し、須坂温泉の宿に向かった。宿に着く頃には辺りはすっかり暗くなっていた。入浴や夕食会場、その後の各部屋での語りの場では、学年を超えて懇談することができた。このような機会はコロナ禍ですっかり失われた貴重なものであった。

２日目は、朝４：00に起きてセルフ・ウォーク・リレー[9]のためにウォーキングに出かける学生たちもいた。全員が早々に朝食を済ませて出発、９：00にりんご農家に到着した。２日目となれば、役割分担にも慣れ、チームワークも向上して効率的に収穫を進めることができた。２日目の作業は正午で終了にした。昼食では、りんご農家の方々が手作りの信州そばや漬物、おやきなど、学生ならもっと食べられるだろうとたくさんご用意していただき、すっかりご馳走になった。

また、りんご農家の方からは心から感謝しているとの言葉を頂戴し、お土産として収穫したリンゴを好きなだけ持ち帰えらせていただいた。参加ゼミ生にとっては充実感と達成感を感じることができた２日間であった。２日間で収穫したりんごは、5,200個であった。

---

9　勝浦ゼミ生たちは、９／18～10／17の１ヶ月間、合計歩数ががん患者支援のための寄付につながるセルフ・ウォーク・リレーというプロジェクトに参加していた。

ゆっくり昼食を味わった後は早々に帰路についたが、観光シーズンの日曜日の上りとあって渋滞に巻き込まれながらも午後６時過ぎには坂戸駅南口に全員無事到着することができた。

## ４．４　評価

### ４．４．１　参加ゼミ生の声（インタビューによる）

参加した学生に聞いた感想は、次のとおりであった。

・普段、当たり前のようにスーパーに並んでいると思っていた野菜や果物だったが、今回りんごの収穫を体験して、栽培から収穫・出荷、市場を通してスーパーに並ぶまでの多くの関係者の方々のご苦労にありがたみを実感した。収穫だけでも大変な苦労がある中、生産者の方々には「いつも美味しい野菜や果物をありがとうございます。」と感謝を伝えたい。

・とにかく楽しかった。空気もすごく美味しかったし、農家の方や仲間たちと協力しながらの作業はとても充実した時間だった。

・人口減少、高齢化は、私たちの生活にもっとも大切な農業など一次産業の分野でより深刻な問題になっていることを実感できた。

・来年も絶対参加したい！

なお、幹事長の感想は、以下のとおりであった。

・この活動により、「行動力」「主体性」「推察力」「チームワーク力」「思考力」が大きく成長した。どういう大変さがあるのか、今自分にできることは何があるのかを考え、仲間と協力することによって社会人基礎力の向上につながったと感じる。例えば、リンゴがなっているところを初めてみるゼミ生がほとんどだった。そのため、初めはどのりんごを採って、どのりんごを採らないのかといった色づきの判断がわからず、自分では決められなかったが、２日目はひとりひとり黙々とりんごの収穫に励む姿があった。また、各々が脚立をどう掛ければよいかなど試行錯誤する機会が多かった。そして、りんごを採る人と採ったりんごを受け取る人で２人１組になり、協力し合う姿も見られた。活動を通して、ひとりひとりが達成感、充実感を感じられ、大変有意義な時間を過ごせた。

・りんご農家の方々に対しては、感謝の気持ちでいっぱいである。参加ゼミ生からもりんご農家への「感謝」の声が多く聞かれた。普段、私たちが当たり前だと思って食べている食材の背景には汗水流しながら一生懸命育ててくださった農家さんの丹精が込められていることを身をもって実感できる活動であった。

### ４．４．２　参加ゼミ生の評価（振り返りアンケートから）

長野市りんご農家応援プロジェクト参加ゼミ生に対して、後日振り返りアンケートを実施した。ここではその結果の一部について報告したい。

レインボーフェスティバル同様に、社会人基礎力の12の能力要素に関する調査となっている。

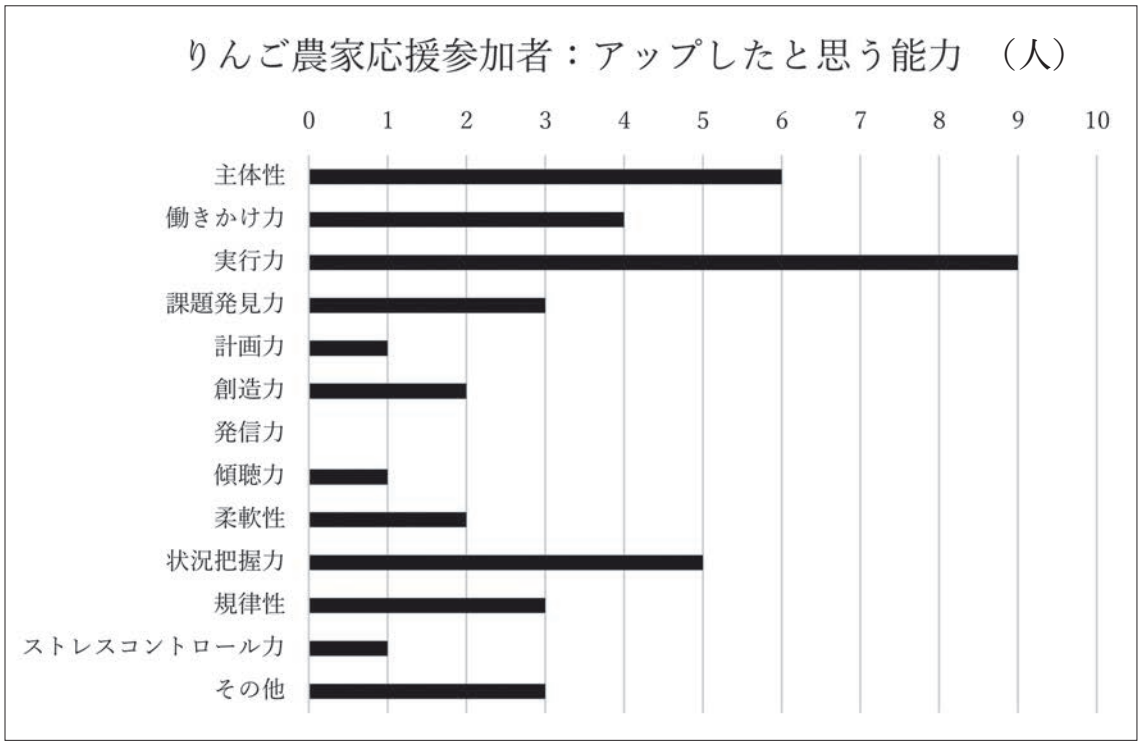



図４．１　参加したことによりアップしたと思う能力（n＝12）

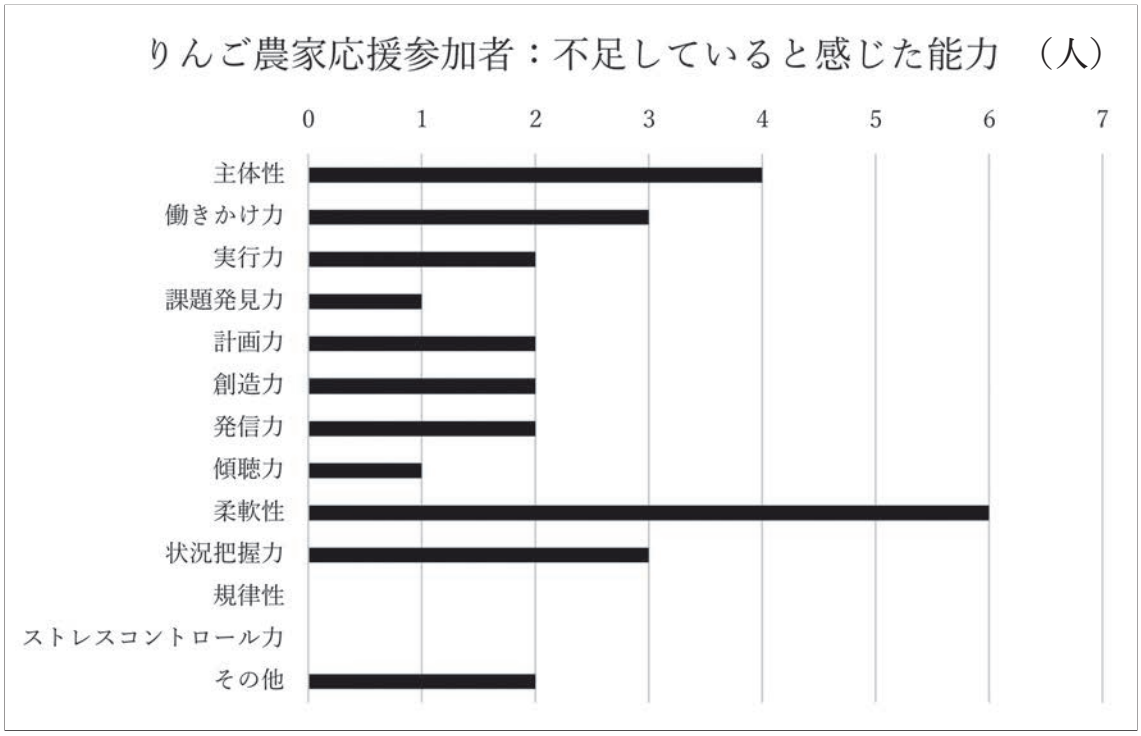



図４．２　参加してみて不足していると感じた能力（n＝12）

## ５．簡単な考察と地域連携PBLの課題

### ５．１　簡単な考察

2022年度に行った勝浦ゼミの主なプロジェクト[10]について、その概要と参加ゼミ生たちの声などについて報告させていただいた。勝浦ゼミ生たちは、プロジェクトを通して各自成長できた能力とまだまだ不足している能力を自覚することができたようである。

レインボーフェスティバルについては、長い準備期間（５月から９月）の中での滞りがちとなってしまった進捗への反省から、「計画力」「主体性」「発信力」の不足を自覚したようである。一方、レインボーフェスティバル当日は、想定を超える来場者やさまざまな要望が飛び交う現場での臨機応変の対応に自信を深めることができたことから、「実行力」「柔軟性」「状況把握力」がアップできたと自覚したと考えられる。

長野市りんご農家応援プロジェクトについては、りんご収穫経験のないゼミ生が９人だったこともあり、実際にりんごを収穫したという体験それ自体が「実行力」、「主体性」がアップしたという自覚につながったと考えられる。不足を感じた能力として「柔軟性」「主体性」が挙げられているが、事前準備を幹事長に任せてしまったことなどに起因していると考えられる[11]。

年度当初と年度末に実施している生きる力（社会人基礎力）調査、プロジェクトの振り返りアンケート、リアクションペーパーなどによる詳細な分析については、改めて別の機会に報告させていただきたいと思う。

### ５．２　課題

地域連携PBLによる学生の成長については、さまざまな先行研究からもその有効性が明らかにされている[12]。しかしながら、地域連携PBLを拡大していくには課題もある。

課題の一つは、地域連携PBLを実践しているのが一部の教員のゼミや科目に限られていることである。一部の教員に過重な負担となっているとも言えるが、学生にとっては参加の機会が限られてしまうということが問題である。一方、地域連携に取り組むゼミなどに所属した学生の負担も大きくなってしまう。少人数のチームで取組むべきプロジェクトもあるが、活動内容によっては、多数の学生で取り組む必要が生じてくる。レインボーフェスティバルでは47人のゼミ生がフル活動した。りんご農家の応援でも参加する学生の人数が多ければ短期間に収穫できる量も多くなる。城西大学の学生であれば誰でも、興味のある地域連携PBLに参加し、他者との活動の中で社会人基礎力を身につけていく機会を得られるということが望まれる。

ボランティア、サービスラーニングなど地域連携活動の実践に取り組んでいる科目が学部ごとにあ

---

10　2022年度は他に、東京都中小企業紹介プロジェクト、がん患者支援のためのセルフウォークリレーなどを行った。

11　２つのプロジェクトは終了直後にリアクションペーパーを提出してもらっている。そこに記されたワードからもこのことを推測することができる。

12　勝浦2019、山口2020など

るが、それらを統括して全学部共通科目（例えば「地域協創実践」など）にはできないか。地域連携センターに専門の「地域連携コーディネーター」を配置[13]し、学生たちとともに複数の地域連携プロジェクトを企画運営していくことができないか。検討していく意義があるように思う。

課題のもう一つは、参加学生への支援である。振り返りアンケートの結果では、参加したかったが参加できなかった理由として交通宿泊費の負担が大きな壁になっていたことが明らかになっている（特に長野市りんご農家応援プロジェクト）。他大学のように地域連携PBLに参加する学生への経費支援[14]なども検討する必要があるように思う。

コロナ禍で内向き姿勢になってしまいがちな学生たちが、地域の大人たちとの協創によって成長し、将来、社会で活躍してくれることを願ってやまない。

## 参考文献


1）荒木昭次郎（1990）『参加と協働』ぎょうせい

2）井関利明・藤江俊彦（2005）『ソーシャル・マネジメントの時代－関係づくりと課題解決の社会的技法』第一法規

3）大室悦賀（2014）「ソーシャル・マネジメントの確立と社会的影響」『京都産業大学総合学術研究所所報』9, 177－186

4）勝浦信幸（2019）「地域連携PBLにおける学修成果の可視化について」『城西大学教職課程センター紀要」3, 45－60

5）山口泰史（2020）「大学教育におけるPBLの実践と地域課題解決への貢献」『産学連携学』Vol. 16, No2, 1－10

6）文部科学省　中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf）（2023年１月14日）

7）文部科学省（2013）『平成25年度　地（知）の拠点整備事業』公募要領 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/04/15/1332621_01_3_1.pdf（2023年１月14日）


13　専門の地域連携コーディネーターを設置する大学も多数ある（立正大学、十文字学園女子大学、福知山公立大学、和歌山大学、富山県立大学など）。

14　帝京大学経済学部地域経済学科では、ゼミ活動に関して学生１人３万円まで補助が出るという。

【地域教育実践報告】

# 地域ショッピングモールにおける食育推進プログラム

## ――折り紙・かるたを活用して――

深谷睦*・山田沙奈恵*・山王丸靖子**

キーワード：食育、折り紙、かるた、コロナ禍、産学連携

## １．はじめに

超高齢社会に突入しているわが国において、生活習慣病の予防および改善は喫緊の社会的課題である。この解決のためには、国民一人ひとりが「食」に関する正しい知識を身につけ、自ら心身の健康を確保することが重要である。

2005年に制定された食育基本法によると、食育とは、「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」と位置づけられており、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている。また、「あらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである」とある[1)]。

昨今の新型コロナウイルス感染症流行下（コロナ禍）において、友人との会話が弾み楽しいはずの学校給食では「黙食」を余儀なくされている。さらに、体験型学習や外食の機会の減少など「食」に対する制限を強いられている。その一方で家庭での時間が増えたことから、家庭における「食育」の機会が増えていると推測される。

さいたま市にある大型ショッピングモール「イオンモール浦和美園店」で2022年10月７日～16日にかけて、健康イベントが実施された。イオンリテール株式会社は、買い物のみならず、様々な体験や地域の「つながる」場としてのモールづくりに取り組んでおられる。今回は、「健康で暮らせることが幸せ」という意味合いの【健幸】をテーマとしたイベントの開催だった。城西大学・城西短期大学は、産学連携として「食育折り紙」、「ロコモティブシンドローム」、「健康レシピの配布」、「楽しく歌を歌おう」の計４つのコンテンツで参加した。

我々は、地域住民を対象とした食育推進プログラムを学生とともに考案し、「食育折り紙」のコンテンツで10月８日および９日に「食育折り紙でさつまいもやきのこを作ってみよう！」、「チーム対抗食育かるた大会」を開催したので、「地域住民への食育」および「学生の課外活動」の観点から報告する。

＊　城西大学薬学部医療栄養学科助手
＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科准教授

# 2．地域ショッピングモールにおける食育推進プログラム

## 2．1　プログラム実施に向けた準備

医療栄養学科３年生に本プログラム実施に協力してくれる学生を募集したところ、６名の学生が集まった。本学年は2020年に入学し、１年次をほぼオンライン授業で過ごした。入学早々、日常生活においても学生生活においてもコロナ禍による影響を受け、あらゆる制限を強いられてきた学年である。

図２．１　食育折り紙（選定のための試作品）

図２．２　プログラムで用いる食育折り紙
「さつまいも」「しいたけ」「かぶ」「なす」

今回の食育推進プログラムでは、おもな対象年齢を未就学児～小学生とその保護者とし、実施内容は「折り紙」および「かるた」とした。「折り紙」は、創造性や想像力、造形感覚、色彩感覚を刺激し、自立性、思考力、社会性や生活態度等を育てる援助の仕方を工夫することができる教材[2]とされており、食育ツールとしても有用と考えた。

まず、「折り紙」で折る食材を、書籍「おいしく折ろう　食育おりがみ」[3]および「おいしく折ろう　食育おりがみ　第２集」[4]より選定した（図２．１）。秋という開催時期や折り紙の難易度を考慮した結果、「さつまいも」、「しいたけ」、「かぶ」、「なす」にすることとした（図２．２）。決定後、学生たちは何度も何度も繰り返し折り、当日スムーズに教えられるようになるまで自主的に練習をしていた。また、プログラム終了（帰宅）後の食育として、家族で楽しめるよう「さつまいも」、「しいたけ」、「かぶ」に関するリーフレットを作成し、配布することとした。リーフレットの表面にはレシピを、裏面には食材や栄養等の情報を掲載した。レシピは、小さいお子さんも一緒に作れるよう簡単かつ多くの方が好き嫌いなく食べやすいであろうものを考案した。試行錯誤ののち、さつまいもは「さつまいもの蒸しパン」、しいたけは「しいたけのチーズ焼き」、かぶは「豚とかぶの煮物」に決定した。研究室や自宅で調理し、料理写真を撮影し、リーフレットに掲載した（図２．３）。

図２．３　作成したリーフレット（両面）　左：「しいたけ」、右：「かぶ」

一方の「かるた」には、医療栄養学科の学生を中心とした食育サークルDHA（Diet and Health Association；食と健康のサークル）で作成した「みんなで栄養かるた」を活用することとした（図２．４）。「みんなで栄養かるた」は、DHA設立当初の2005年から、子どもたちが気軽に遊び楽しみながら「食」や「栄養」について学べる食育ツールを目指し、親しみやすい文章やイラストになるようサークルで独自に作成したものである。これまではサークルメンバーが近隣地域の保育園などに出向き、子どもたちと一緒に「かるた」を楽しみながら食育を実施してきたが、コロナ禍によりこの機会も減少していた。

図２．４　みんなで栄養かるた

## ２．２　プログラム実施当日

我々のブースは、３階のエスカレーター付近であった。この階には、子ども向け雑貨や子ども服などの店舗が多く並び、また、フードコートもあるフロアである。ここで、開店時刻から夕方まで「折り紙」や「かるた」を用いた食育推進プログラムを実施した。ブースの周りに食育折り紙を貼付し作成したパネルを開店前に設置した（図２．５）。また、リーフレット上部に「３Ｆで食育おりがみやってます！」などと書き入れた即興のチラシを作成した（図２．６）。開店後にこれを他のエリアや階などブース以外の場所で学生が交代で配布し、プログラム参加の声かけをおこなっていた。

図２．５　ブース付近に設置したパネル

図２．６　リーフレットを活用し学生が即興で作成したチラシ

### ２．２．１　食育折り紙

声かけやパネルに興味を惹かれた児童が続々と参加してくれた。参加者に「さつまいも」、「しいたけ」、「かぶ」のうちどれを折りたいか聞いていく。ただし、「かぶ」や「なす」は難易度が高いことから、未就学児には「さつまいも」もしくは「しいたけ」の２者から選んでもらった。事前に食材に合わせて選んでおいた色や形の折り紙を提示し、好みのものを選んでもらい、折り方の説明紙を示しながら、参加者と一緒に折っていく（図２．７）。様子を見ながら状況に合わせてフォローをした。無事に完成すると「わぁ、できた！」とみな嬉しそうな声をあげてくれた。「しいたけ」を人気ゲームのキャラクターに見立てアレンジする児童もいた。専用台紙を用意し、完成後に作品を貼り、持ち

帰りできるようにした（図２．８）。こうすることで、自宅に帰宅した後もこの経験を思い出すことができ、長期にわたる食育の効果が期待できると考えた。なお、コロナ禍であることから感染対策として、１組あたり５分程度で完成できるよう配慮した。

図２．７　「食育折り紙」の様子

### ２．２．２　食育かるた　～みんなで栄養かるた～

本プログラムの２日目である10月９日には「食育折り紙」の合間を縫って「食育かるた大会」も併せて実施した（図２．９）。実施の十数分前に拡声器を使って参加者を募った。家族や友人同士で参加したり、何度も参加してくれた児童もいた。読み札を読みあげる声を真似て口ずさんでくれる児童もいた。毎回、絵札の残りが少なくなるにつれ参加者の気合は一層高まり、白熱した戦いが繰り広げられ、おおいに盛り上がった。参加賞として食育消しゴムをプレゼントした。こちらもコロナ禍を考慮し、札の枚数を減らすことで、１回10分程度で終了できるよう調整した。

図２．８　完成した作品

図２．９　「食育かるた大会」の様子

## ２．３　プログラムを振り返って

２日間を通して１歳くらい～80歳代と幅広い年代の方々約150名に参加していただくことができた。参加者の中には城西大学の卒業生の方もおられた。参加者してくれた児童はみな「折り紙」や「かるた」に楽しそうに取り組んでいた。折り紙を折りながら「さつまいもおいしいから大好き！」や「しいたけはあまり好きじゃないけどがんばって食べてみるね。」などと話してくれた。また、配布したレシピを大事に抱え、「おばあちゃん、お家でこれ作って！」と言っている姿を見ることがで

き、「食育推進」を目的としたプログラムの成功を感じられ、大変うれしく思えた。「孫に持って帰ってあげたい。」とリーフレットと折り紙の見本を持って帰った高齢の方もいらっしゃった。今回は単回のプログラムであり、参加者へのその後の「食育」に対する効果をはかることはできないが、少なからず好影響を与えることはできただろう。

一方、今回協力してくれた学生たちにも変化がみられた。「折り紙」の指導では児童と対面に座って実施することが多くあり、相手に分かりやすく説明するためには、通常とは逆向きで折らなければならない。指導者側に立つという難しさを実感するとともに、自ら課題を見つけ解決策を模索していたようだ。１日目の帰宅後に睡眠時間を削り、何度も練習をしていたと後に聞いた。また、プログラム参加の勧誘の声かけをする際には、どの時間帯やどの売り場にいる方に声をかけると効果的なのかなどと考察している様子もうかがえた。これまでにアルバイト経験がなく、さらに、コロナ禍の影響を受け家族や大学関係以外の人とほとんど接する機会がなかった学生もおり、本プログラム実施前は「自分にうまくできるのか」と不安を抱く様子もみられた。しかし、プログラム実施中は終始、対象者に合わせた話しかけを自然と意識できており、さらに、プログラム終盤には、自ら積極的に声をかけるなど短期間ではあったものの、学生主体のプログラム実施としたことで大きな成長を目の当たりにすることができた。学内の実習（必修科目）において「栄養教育論実習」や「公衆栄養学実習」、「臨床栄養学実習」等で食育・栄養指導等の手法を学び、媒体作成し、模擬体験をする学修機会がある。今回は、それらを実践する初めての貴重な体験となったことだろう。我々教員にとっても教育の効果を実際に確認することのできる機会となった。コミュニケーション力をはじめ今回身につけることのできた能力は、将来、管理栄養士として活躍するうえで役立ててほしい。

本プログラムでは、リーフレットを配布し勧誘したり、また、折り紙を貼ったパネルを掲示することで、まずはプログラムに興味を持ってもらうよう工夫した。そして、参加していただけた児童には、「折り紙」を折ることで食材について知ってもらい、あるいは、「かるた」を通じて「食」や「栄養」について楽しみながら学んでもらい、さらに帰宅後にはリーフレットを見ることで食材について再度知り学びを深める、料理を作る、その料理を食べるという段階的かつ継続的な食育をねらい実施した。加えて、保護者への食育と同時に、家庭におけるお子様への食育推進にも貢献できたと感じている。

今回はショッピングモールでの開催であったことから、当然ながら多くの方の目的は「買い物」であると考えられる。そのため、プログラムの参加に勧誘してもお断りされることも多かった。また、お子さんは「折り紙やりたい」と興味を持ってくれても、保護者の方に参加の意思がなければ難しいものとなるのも事実だ。とくに未就学児の場合は、まず保護者の方に興味を持ってもらうことが、プログラム参加ひいては食育推進に最も有効であると改めて気づかされた。おそらく最も食育を必要としているであろうこれらの方々をいかにしてプログラム参加へと促すかが今後の課題である。

## ３．おわりに

昨今のコロナ禍の影響により、食育プログラムを受ける機会、また、学生の課外活動の機会が減少していたが、感染対策等コロナ禍に配慮した本プログラムの実施により両者の機会を設けることができた。今回参加した学生の中には「栄養教諭」を目指すものもおり、将来に向けた貴重な経験となったことだろう。

「食育」の場としておもに「学校」、「家庭」、「地域」が挙げられるが、本プログラムの実施により「家庭」および「地域」での食育に貢献できたと考える。今後もこのような産学連携を通じて、管理栄養士として活躍するために必要な能力を育成する（学生教育）のはもちろんのこと、地域住民の健康の維持増進に携わっていきたい。

### 参考文献

１）農林水産省『食育基本法（平成27年９月11日最終改正）』（https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-20.pdf）（2023年１月12日）.

２）五十嵐裕子（2012）「折り紙の歴史と保育教材としての折り紙に関する一考察」『浦和大学・浦和大学短期大学部　浦和論叢』46, 45－68.

３）西田良子・平野誠子（2012）『おいしく折ろう　食育おりがみ』全国学校給食協会.

４）西田良子・平野誠子（2020）『おいしく折ろう　食育おりがみ　第２集』全国学校給食協会.

【地域教育実践報告】

# 2022年における城西大学経営学部石井ゼミナールの活動

石塚航貴*・加藤太一*・門伸聖*・神田莉久*・杉山侑矢*・砂野歩*・
諏訪真大*・寺内なつみ*・藤村和洋*・堀越渓太*・石井龍太**

キーワード：ローカルヒーロー、アクティブラーニング

## １．はじめに

城西大学経営学部内にローカルヒーローによる地域貢献活動を行うゼミを立ち上げたのが2015年、今年度で８年目が終わろうとしている。毎年新しい進級生と新しいヒーローの物語を作り上げて来たことで、石井ゼミ発のローカルヒーローは既に９シリーズを数え、記憶の限り100を超えるキャラクターを世に送り出すことが出来た。

本稿は、石井ゼミ第７期生（2021年石井ゼミ進学生）による、2022年度の活動の振り返りである。直近の先輩となる５期生、６期生はコロナ禍が始まった頃の活動となり、苦労と挑戦の多い世代だった。第５期生は祭事自粛の中でステージ活動の機会を失ったが、手作りマスク配りや衛生啓発カードの配布といった社会貢献活動、ステージのオンライン配信や美術展等を展開し活躍した。６期生はコロナ禍と社会の分断をテーマにし、未曾有の事態を前に混乱した世界を描くヒーロー『リジェネイダーJ』を作り出し、社会性の高さから注目されテレビ埼玉で取り上げられもした。

７期生もまたコロナ禍の中で2021年４月から活動を始めたものの、催事が少しずつ再開される等社会情勢が少しずつ変化していく時期でもあった。そうした中で、作品のテーマは「日常を取り戻す」に決まった。また「全員ヒーロー」という構成も取り入れた。地震、津波、放射能汚染、温暖化、伝染病…人類を立て続けに襲った大災害によって平凡な生活を奪われ、管理社会に組み込まれた若者が、かつての日常を取り戻すために反旗を翻す。一方で人類の存続と安定のため、管理社会を守る者達もまたヒーローとして現れる。７期生のヒーロー『レベルJ』はこうした世界観を持って、変わり行く２年間を駆け抜けた。世界観に加えアクションにもかなり力が入り、石井ゼミ８年の歴史の中でトップクラスのスピードとキレのあるステージを繰り広げた。その模様はYoutubeやHP（https://josaiishiiseminar.wixsite.com/rebelj）で確認してもらうこととして、本稿では学生達が活動の中で何を考えどう成長していったのかを彼らの言葉で描き出せればと思う。なお執筆担当は文末に（　）書きで記した。（石井龍太）

＊　城西大学経営学部石井ゼミ第７期生（2021年石井ゼミ進学生）※あいうえお順
＊＊　城西大学経営学部准教授

## ２．活動内容

### ２．１　第２回毛呂山町ビジネスコンテスト（６月25日　埼玉県坂戸市　城西大学坂戸キャンパス）

2022年６月25日、城西大学、清光会館清光ホールにて、第２回毛呂山町ビジネスコンテストが開催された（一次審査）。昨年に引き続き二回目のビジネスコンテストとなった。主催は毛呂山町のまちづくり会社「もろやま創成舎」である。コンテストの目的は「毛呂山町を元気にする事業の発掘」である。この毛呂山町をよりよい町にするための案を、いくつかの採点項目をふまえてプレゼンテーション形式で様々な企業から集めた。企業の発表が終わるとコンテストにご来場の審査員の方々に採点してもらった。コロナ禍ということもあり採点方法はQRコードを用いたフォームからの集計を活用した。

我々石井ゼミナールは「ローカルヒーロー」の研究とヒーローを用いた地域貢献活動を目的としているゼミである。今回もビジネスコンテストへの協力依頼を受けて、コンテストの会場運営を行った。会場設営、３、４年生の合同ヒーローショー、受付担当、司会、機材操作などそれぞれに役割を決め、度重なるリハーサルの下で行った。ヒーローショーでは、冒頭にヒーローたちが悪の怪人軍団にやられてコンテスト会場を乗っ取られ（図２．１－２）、怪人が司会をするといった一風変わった構成の話で進めた。最後に、ヒーローたちが必殺技で怪人軍団を倒しコンテスト会場を取り戻した（図２．１－３）。コンテスト終了後はヒーローたちと来場者全員での記念撮影が行われた。

1

2

3

図２．１　第２回ビジネスコンテスト
１．ポスター
２．会場を支配する怪人たち
３．コンビネーションアタック

今回のビジネスコンテストでうまくいった点は、本番を見据え繰り返し行ったリハーサルで発見した、機材操作、ショーの殺陣などのミスの多いところを都度修正したことによってミスを最小限に抑えられたところだといえる。リハーサルは２、３、４年生合同で行い、４年生が皆を率いて何度も繰り返し練習を重ねた。練習では学年関係なくどうすればよいのか、どう動けば面白く見せられるのかを意見交換して質の向上を図った。今回のビジネスコンテストのショーでは我々石井ゼミだけではなく、もろやま創成舎からもアクションに参加していただき、最後に怪人を倒す際のヒーローたちのコンビネーションアタックの先導をしていただいた（図２．１－３）。これはビジネスコンテストに来場した方々に強く印象付けられた出来事になったといえる。

苦労した点は、大人数でのヒーローショーで舞台上でのそれぞれのポジショニングに手間取ることが多く見受けられた。また、使い慣れない機材操作があったうえ、リハーサルではしばしば機材トラブルに見舞われたため万が一のための代案を考えるなどと苦労したところである。

最後に、ビジネスコンテストという大舞台でのヒーローショーは、ゼミ生のチームとしての団結力、統率力を成長させ、緊張感のあるショーを経験したことによって一体感を得ることができた。地域を変えるべく考えられた熱量のこもったプレゼンテーションは企業の情熱を感じさせ社会人としての姿勢を学ぶ機会となる貴重な体験になった。（藤村）

1

2

図２．２　坂戸七夕まつり
１．殺陣の様子
２．ステージ後の集合撮影

### ２．２　坂戸七夕まつり（７月17日　坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場）

坂戸駅前のサンロード商店街で行われた、「坂戸七夕まつり」に参加させていただいた時の活動についてまとめる。内容は私たちが企画実行する『レベルJ』の第６話である。

サンロード商店街のイベントには坂戸イルミネーション点灯式など毎年参加させていただいており、地域活動として根付いている活動であるため、７月のとても暑い中であったがたくさんの人に集まっていただきステージショーを披露することができた。ステージショーの前にグリーティングを行い告知し、ショーの後にも撮影会を行い大盛り上がりのイベントに出来たといえるだろう。

このイベントに参加して良かった点は、お祭りということもあり普段の単独でのイベントよりも幅広い人に見てもらうことができたことである。ショーの内容としては殺陣（図２．２－１）もしっかりとできていて、演技も良くできたと自負している。また、全体での撮影会（図２．２－２）の後も声を掛けていただいたり、一緒に記念撮影をしたりと来ていただいた方々にも満足していただけるイベントにできたと考えられる。反省点は、ショーの撮影を後日、Youtubeに投稿するためのカメラの画角をしっかりと把握できていなかったため、後日確認した際、見切れていたり映っていなかったりしてしまった点があった。

最後にこの活動を通じて、私は地域の人々と触れ合いイベント等を通じ喜んで貰える充実感や達成感、また人前に出て活動したことにより、自分自身の成長を感じることで自信につながるなど学生として大きく成長することができた。（砂野）

### ２．３　こども大学にしいるま（７月30日　埼玉県坂戸市　城西大学坂戸キャンパス）

城西大学で開催された子ども大学にて、私は１日先生となり小学校４～６年生と一緒に地域の悪役を作ることになった（ヒーローは昨年作製した）。まず初めにキャラクターを３体作るということで３つのグループに分かれてみんなで話し合い、私のグループではダークヒーローを作り始めた。私は先生をした経験がなかったのでまとめられるのか、とても緊張していたが、子供達がたくさん発

言をしてくれたのでなんとか形にできたのである。

大変だなと思ったことは、まず子供達がいろいろな案を出してくれたものの、ご当地キャラクターとして地域の有名なものなどをヒーローに載せるということがとても大変で、どうしても子供たちはアニメや仮面ライダー、戦隊モノのようなかっこいいキャラクターにしようとしていたので、地域の特産物などといったものからは遠ざかってしまった。それを軌道修正し案を出してもらうのはとても難しかったのである（図２．３－４）。

しかし、私がしっかりと子供達に寄り添い、地域の特産物でダークヒーローを作りたいから特産物ってなんかないかな？と聞いた時に子供達は納得してこれある！これもいいんじゃない！など色々案を出してくれた。私自身子供の頃からあまり強制されるのが好きじゃなくそれは今の子供達も同じだろうなと思っていたので回りくどい言い方をされるよりは直球で勝負して正面からぶつかってやろうと思っていたのもあり、回りくどい言い方をせずしっかりと話したらわかってくれたのでよかったなと思っている。

また、ダークヒーローの絵をみんなに描いてもらうとなった時に絵が下手で書きたくないという子供がかなり多かったものの、自分自身絵が下手なのでとりあえず褒めちぎってやろうと思いどんな絵を描いてもめっちゃ上手いじゃん！などと褒めたところ感触がよくみんな喜んで描いてくれたのでとても助かったのである。その描いた絵から１カ所ずついいなと思ったものを引っ張り出して１人１人に描いてもらい最後に色を塗ってもらい、ようやく形にできた時の達成感はすごくあり、とても嬉しかったし、感動した。

各チームでできたヒーローはアダサ、ピンククイーン、アロキバ、の３つの悪役である。（図２．３－２、３、４）。先生も悪くないし強いて言えば教員になるのも悪くないなと思う１日であった。もっと早く石井先生のゼミでこういったイベントをしてればまた何か自分の中で変わっていたのかなと思う。普段やっているヒーローショーよりも正直なところ楽しかった。（杉山）

1

2

3

4

図２．３　こども大学にしいるま
１．アダサ　２．ピンクイーン
３．アロキバ　４．授業の様子

## ２．４　学生イベント交流委員会事業「コロナ禍の学生生活　振り返り！ピンチをチャンスに！座談会　2022」（８月24日　東京家政大学）

城西大学はTJUP加盟校である。TJUPとは、埼玉東上地域大学教育プラットフォームの略称で、埼玉県の東武東上線沿線および西武線沿線の大学・短期大学、自治体、企業が加盟しているプラットフォームのことである。生活しやすい地域づくりや、地域産業の活性化を促がしている。

その活動のひとつとして、2022年８月24日に東京家政大学狭山校舎にて学生座談会が行われた。「ピンチをチャンスに」と題されたこの座談会は、コロナ禍の学生生活を振り返り、生じた課題と解決策を各校の生徒が発表し、意見交換を行うというものだった。コロナ禍により失われた学生の交流の場を設け、社会性、コミュニケーション能力の向上を目的としている。

運営の東京家政大学を始め、TJUP加盟校の中から東邦音楽大学、武蔵丘短期大学、山村国際短期大学、日本医療科学大学、女子栄養大学、跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、文京学院大学、東京電機大学、立正大学、城西大学、駿河台大学の計13校が発表に挑んだ。

座談会は司会が進行しつつ、書記がホワイトボードに内容を写すといった形式で行われ、石井龍太ゼミナールはコロナ禍におけるヒーロー活動を題材に発表を行った。

他校の学生もそれぞれの立場ならではの課題を示しており、いち学生の身として見識を深められたと感じた。中でも東邦音楽大学や山村国際短期大学は我々と同じくコロナ禍におけるイベント運営についての発表だったため、得られるものが多かった。（神田）

1

2

図２．４　ピンチをチャンスに！座談会2022
１．イベントのチラシ
２．発表の様子（神田）

## ２．５　狩俣子供会（９月17日　沖縄県宮古島市　狩俣集落センター）

2022年９月17日、沖縄県宮古島市の狩俣集落センターにて行われたローカルヒーローステージショーについてまとめていく。今回行われたヒーローショーは普段披露している物語とは違い、学年が違うヒーローたちのコラボレーションとなった。また元々は敬老会で披露する予定であったヒーローショーはコロナウイルスが懸念され敬老会が中止となったがその代わりに子供会で披露した。

我々は石井先生が監督する宮古島市クバカ城跡の遺跡調査を行いつつ、宿泊していた宿の前でショーの練習をした。人口が少ない宮古島市といえど宿の前は想定以上に通行人が多く、着ぐるみを着ずに練習をしていたので少し恥ずかしかったのもいい思い出である。

狩俣の子どもたちからしたら我々は埼玉からやってきた知らないヒーロー。そんなところに人は集まるのだろうか、見ていただいた方々に満足してもらえるだろうか、そんな不安もあったが、蓋を開

1

狩俣にヒーロー登場

城西大石井研究室がステージ

九州に特別警報の可能性

「経験ない危険な台風」

2

図２．５　狩俣子供会
１．ステージショー後の写真撮影会、
　　交流会の様子
２．宮古毎日新聞の掲載紙面

けてみるとたくさんの子どもたちや親御さん方が来場していた。その中に新聞の記者がおられ、ステージショー後にインタビューを受け、翌日の新聞記事になった（図２．５－２）。

ステージショーは大盛況に終わり、無事幕を閉めた。そしてステージショー後の写真撮影会、交流会も盛況で子どもたちがとても興味津々でヒーローのもとに子どもたちが押しかけた。普段訪れない地でのステージショーだったが、ショー中の子どもたちの反応や前のめりになるほど集中して見ていてくれたこと、ショー後の盛り上がり度合いからすると、とても満足していただいた良いステージショーになったと言えるであろう。

上手くいった点として、やはり普段あまりヒーローが訪れない地でヒーローショーを行ったことが挙げられる。子どもたちからしたらヒーローはテレビの中の存在であるので実際に見られるとなると物珍しさに見に来るに違いない。

反対に苦労した点は、クバカ城跡の遺跡調査後に練習をしなくてはならないことであった。普段は講義の後に練習をしていたため、あまり肉体的に疲労していなかった。だが調査後は疲労が溜まった状態で練習が行われたため体が思うように動かなかった為、苦労した。

最後に、普段行くことのない地域で普段一緒にショーを行わない仲間たちと協力して作り上げたステージショーはとても良い刺激となり、これからの活動により拍車がかかる経験ができた。こういった経験を学生のうちにできたことを活かし、今後活躍するための糧にしたい。（堀越）

## ２．６　レインボーフェスティバル（10月１日　埼玉県川島町）

令和４年10月１日に、川島町上伊草にある大型商業施設「カインズモール川島」の蔦屋書店川島インター店前駐車場において、「レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に～」が、「埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）」と「城西大学経済学部勝浦ゼミナール」との共催で開催された。「地域や世代を超えた交流」をテーマに開催された今回の交流事業では、レインボー協議会を構成する６市町のご当地グルメに加えて、世界各地のグルメを堪能できた。

特設ステージ上では、我々ローカルヒーローショーの他、世界の踊りや音楽が披露され埼玉県のマスコットキャラクター達も登場するなど、会場は大きな賑わいを見せた。今回は沢山の地域の方々が会場に集まった為小さな子ども達からお年寄りの

1

2

図２．６　レインボーフェスティバル
１．ステージショーの様子
２．ゲーム大会の様子

方達の前でステージショーをする事になり普段とは違った緊張の中で臨む事になった（図２．６－１）。ステージショー以外では、地元川島町のヒーロー『田園戦士かわじマン』と共に小さな子ども達と「叩いて被ってジャンケンポン」や「腕相撲」などのゲーム大会（図２．６－２）で楽しく交流した。

このイベントを通して良かったことは町内だけでなく、近隣市町との地域連携を通して発展していくこと、海外から移住者が増えている中、互いの文化を尊重し合いながら暮らせるまちづくりに我々石井ゼミが地域連携活動の一環として貢献できたことである。ヒーローショーイベントでは子供達と沢山触れ合う機会が沢山あったが、中々大人の方やお年寄りの方達と触れ合う事がなかった為、子供達を喜ばせるいつものイベントとは違った気持ちになり、自分自身の成長や自信に繋げた。（加藤）

## ２．７　ローカルヒーロー博覧会３（10月30日　埼玉県坂戸市　城西大学坂戸キャンパス）

城西大学坂戸キャンパス17号館（経営学部棟）２階にて開催となった３回目のローカルヒーロー博覧会。我々石井ゼミのヒーローだけではなく、「暗黒魔戦士クロウリー」や「英雄収集ツインジャー」、「魂の演者ゲキダイヴァー」、「離島閃隊タネガシマン」といった総計50を超えるローカルヒーローが全国各地から城西大学坂戸キャンパスに集まって下さった。

本博覧会ではヒーローたちの集合写真（図２．７－２）や我々石井ゼミの城西大学ヒーローズと「離島閃隊タネガシマン」のコラボショー（図２．７－３）や本大学の漫画研究会が作成した「宇宙刑事キャビン」や株式会社L4様の「鎧勇騎月兎」などの作品を上映する上映会、RAPID　PROGRESSの荒井豊氏、「離島閃隊タネガシマン」の企画者であり本大学のOBでもある野田直志氏たちに「ローカルヒーローの深淵を探る」をテーマにローカルヒーローの成り立ちについて伺う講演会が同時に実施された。

1

2

3

図２．７　ローカルヒーロー博覧会３
１．ポスター　２．参加ヒーローたちの集合写真
３．「離島閃隊タネガシマン」と城西ヒーローズのコラボショー

受付や各催しの司会や運営は我々石井ゼミが主体となって行った。運営などはリハーサルや練習を重ね失敗しないよう緻密に準備を進めた。本番を迎えた当日この博覧会には沢山のお客様が来場し、素晴らしいスタートを迎えることができた。

私は上映会の運営の担当をした。内容としては主に上映会の司会進行、上映する作品の再生、照明の調整、音響の調整、各運営者の作品紹介の撮影を行った。

成功した点は開催前に設定した担当グループで開催前に入念にミーティングや練習を重ね、開催前日までには確実にスケジュールを把握し、当日は情報共有を怠らないようにしていた点にある。また、前日に担当メンバーで作業ダイヤを作成し、当日は作業ダイヤをもとに担当メンバーとの連携が上手くいき、トラブルもなく上映会を終えられた点である。

学生として成長できた点は我々石井ゼミ生との情報共有を大切にし、柔軟な行動ができるようになった点とこの博覧会を通じて沢山の方々と協力をし、この博覧会を成功させられたという点である。この博覧会で得たことを将来に生かし、様々なことに取り組む姿勢を忘れず大切にしていきたいと思う。（門）

### ２．８　華麗なるカレー博（11月19日　埼玉県ふじみ野市　イオンタウンふじみ野）

埼玉県ふじみ野市にあるイオンタウンふじみ野にて行われた、“華麗なるカレー博”というイベントに私たち石井ゼミは昨年に引き続き２回目の参加をした。立体駐車場屋上の一部が利用された本イベントでは様々な団体が参加しており、特設ステージでの催し物や屋台が出展されていた。石井ゼミでは４年生の作品である『レベルJ』の第８話を、３年生の作品である『ディフロンターJ』の第２話を特設ステージで披露した。

このイベントでうまくいった点は、事前にチラシ配りをしたことであると考える。普段は坂戸市を中心に活動をしている為、私たち石井ゼミのヒーローを知らない現地の方々に向け、ショーが始まる前と終わった後にグリーティング（練り歩き）を行った。そして会場に疎らにいた子供たちを中心にチラシを配り、観覧してもらえるようにお声掛けを行った。結果、ショーが始まる時には大人も子供も関係なくたくさんの人が観客席を埋め尽くしてくれた。

ショーの中で特に盛り上がりを見せた所は殺陣のシーンであった。チラシを見ながらお気に入りのヒーローたちの名前を応援する子供たちの声が会場を大いに盛り上げたのだと感じた。ショーが始まる前にヒーロー達の詳細が書かれたチラシを配ることで、子供たちが推しのヒーローを探すことができ、応援に力を入れることができた為盛り上がりをみせたのではないかと私は感じた。ショーが終わった後の写真撮影でも多くの人に撮っていただき、集合写真撮影後に個人で撮影をしに来てくれた方々の中にも、ヒーローの名前を覚えてくれていた方がおり、ショーとして成功を収めたのではないか

1

2

図２．８　華麗なるカレー博
１．集合写真撮影の様子
２．ステージショーの様子

と言える。私たち一同もとても達成感の得られたイベントであったと思える。（図２．８－１）

反省すべき点はステージの上下をあまり活用できなかったことである。練習時にステージの上側を利用することを意識していなかった為、本番当日に急遽各々の登場するシーンや移動する時などを変更して行った（図８－２）。緊急で変更したこともあり、上下のあるステージという特徴をあまり生かせずに終わらせてしまったという反省点があった。

最後に本イベント又ゼミ活動を通して、チームで一つの大きな作品を作り上げることの大変さやショーが終わった後の達成感を体験することができ、また自分達で考えて行動する自主性を身につけられたのではないかと考える。私自身は音響や殺陣で多くの失敗をして仲間達に多大な迷惑をかけてしまったが、失敗したことを引きずらずに次のショーに挑む強い心を持つことができた。（寺内）

## ２．９　坂戸イルミネーション点灯式（12月４日　坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場）

クリスマスの地元恒例イベントとなった坂戸イルミネーション点灯式に参加した我々４年生は、式典の前座として「レベルJ」第９話を披露した。最終回に向けて、物語が加速していく回であり、会場は大きな声援と共に盛り上がりをみせた。今作は物語が複雑であり、理解がしにくい点も多いが、それに伴いキャラクターの個性が際立っており、複数のキャラクターに一定数のファンが付くほどである。そのためか、大人も子供も大勢の方が足を運んで下さり、ステージショーとイルミネーションを観覧して下さった。ステージショー後の写真撮影では、子供だけではなく、幅広い年齢層の方々と写真を撮っていき、大盛り上がりのイベントとなった。

上手くいった点は、練習時間が少ない中、ステージショーとして作り上げたものが結果的に大成功を収めたことにある。また、天候による影響でのアクシデントもありながらも、観覧に来てくれた多くの方々を楽しませることができ、その熱気のままイルミネーション点灯式の式典に移れたことは１つの成功点といえる。

反省点と苦労した点は、暗い中でのステージショーであったこともあり、視界が悪く、普段はしないようなミスが全体的に多かったことである。また、練習不足から出るミスも多々あり、今後のための課題点が多くみられた。

学生として成長できた点は、石井ゼミナールの目標としている「地域振興」を肌で感じることができ、坂戸市のイベントをいち参加者として、１人の学生として、チームとして動くことができる達成感や楽しさを知ることができたことにある。今回のイベントだけではなく、石井ゼミナールで培ってきたものは今後の人生において忘れられない経験であり、自分自身の成長や自信に繋げることができたと思う。（諏訪）

1

2

図２．９　坂戸イルミネーション点灯式
１．ステージショーの様子　２．集合写真撮影の様子

## ２.10　坂戸児童センタークリスマス会（12月23日　坂戸児童センター）

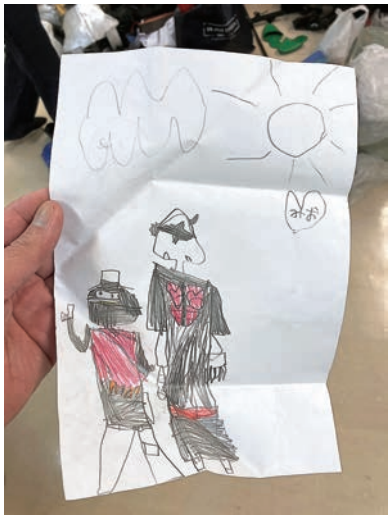
2022年12月23日、坂戸児童センターのクリスマス会が行われた。石井ゼミは「タップダンスユニットNaNoHa」「きまぐれ手品師よだたかみ」とともにゲストとして当イベントに参加し、「レベルJ第10話（最終回）」を披露した（図２.10－１、２）。児童センターだけあって、会場の大部分は子供たちで埋め尽くされており、ステージショーは元気な声援が飛び交う大盛況となった。また、最終回ということもあり、過去のレベルJのステージショーを見に来て下さった方もいたようだ。

しかし、そのステージショーでは数々のトラブルに見舞われることになった。具体的には、殺陣の最中に武器が破損したことや、殺陣の振り付けを間違えたことが挙げられる。小道具のチェック、振り付けの確認が甘かったことは大いに反省しなければならないが、本番ではこれらのトラブルにも落ち着いて対処し、アドリブで演技を続けることができた。これまでのヒーローショーの経験を活かして最終回でこのような対応ができたことに成長を実感した。ヒーローショーの後にはヒーローたちとの写真撮影会が行われた（図２.10－２）。多くの来場者と写真を撮影し、交流を深めることができた。

最後に、図のイラストは、観客の子供の１人が描いてくれたファンアートである（図２.10－３、４）。レベルJに携わってから約２年弱になるが、このようなファンアートを頂けたことは初めてである。地域貢献を目的として活動している石井ゼミにとって、これは大変喜ばしいことであると同時に、私たちの活動が子供たちに有意義な時間を与えられていることを形として感じたことで、より自信をつけることができた。とはいえ、有意義な時間を過ごすことができたのは私たち石井ゼミも同様であり、この坂戸児童センタークリスマス会で得た経験は何事にも代えがたいものである。（石塚）

1

2


3

4

図２.10　坂戸児童センタークリスマス会
１．ヒーローショー出演者の集合写真
２．ステージショーの様子
３、４．ファンから贈られたファンアート

【地域教育実践報告】

# 高校生参加型研究室インターンシップの取り組み

## ――地域へ研究室をひらく――

片倉賢紀*・古旗賢二**

キーワード：研究体験、主体的な学び、探究、大学生の学び

## １．はじめに

研究室インターンシップとは、高校生が大学の研究室で３日間を過ごし、研究活動を体験すると共に、現役大学生と交流し自分の進路について考える企画である。大学の理系研究室は対外的にみれば閉鎖的で、オープンキャンパスや体験実習などで研究室を訪れ雰囲気を感じる機会はあるが、実際どのような活動が日々行われているのかと疑問を持たれることがある。

研究室インターンシップは、高校生が自ら将来を考えるきっかけとするために企画した事であったが、実施すると大学の学生にも良い影響があった。本稿では、企画の趣旨、概要、アンケート結果とともに、今後の展望についてまとめた。

## ２．企画の趣旨

この企画の趣旨は、近隣高校生に大学での研究活動を知って欲しいという願いであった。これは、単に大学で行っている研究の内容を紹介することではなく、研究とは何か、実際にどのような活動をしているのかを知ってもらうことであった。

大学生や大学院生の就職活動を参考に、研究室インターンシップを大学で３日間研究を体験する形式とした。大学生の一部は、低学年の内から就職先を定め、必要な準備をしている。しかし、最終学年の一年前に学生達の多くは就職する先を模索するために企業説明会に参加後、書類審査を経て企業インターンシップに参加して実際の業務の一部を体験し、その後面接へ挑む。企業インターンシップは、企業によりその実施期間や内容は様々であるが、一般的には数日間現役社員によるガイダンスが実施されているところが多い。業務の内容もさることながら、そのとき接した現役社員との相性等も最終的に企業を志望するかどうかの重要な要因となっている。企業側も面接だけでは図りきれない学生の気質を企業インターンシップを通してみている。これらの積み重ねは、企業側と学生側とのミスマッチを防ぐための重要な鍵となっている。政府や産業界ではインターンシップの期間延長や内容を精査し、採用に活用する動きもある。

高校生の場合、企業説明会にあたるのがオープンキャンパスであり、その後、高校生が自らインタ

＊　城西大学薬学部薬科学科栄養生理学准教授
＊＊　城西大学薬学部薬科学科機能性食品科学教授

ーネット、高校教員や塾講師などから情報を得て進路先を決定している。研究という活動の実際をほとんど知らずに志望分野と各自の現在の偏差値で大学を選択している。漠然と研究がしたいという気持ちで大学に入学し、いざ研究活動をしてみてから、自らの考えと異なることに気づく学生もいるように感じる。このような学生は、活動意欲が減退し、最悪の場合退学を選択することとなる。このようなミスマッチを防ぐには、パンフレットやオープンキャンパスだけでなく実際に研究室での活動を体験する企業インターンシップのような形式が良いのではないかと考えた。この点で、名称も研究室インターンシップとした。

地域貢献という観点も企画の趣旨の一つとしてあげられる。城西大学薬学部は2023年度50周年を迎える。半世紀間ここ坂戸市けやき台キャンパス内に校舎を構え、地域の核としての存在であり続ける責任がある。前任の島根大学は地方の国立大学であり、地域貢献を重要課題の一つとして掲げていた。そのため、近隣の医療系専門学校へ講義のために出かけたり、近隣の高校生が大学に来校する機会も多かった。城西大学では多くの学部学科で様々な形で地域貢献されている。これまでとは異なる形で近隣高校生の役に立てることはないかと考えた。その結果、近隣の高校生を研究室に招いて、数日間研究活動を体験して頂く事で、研究の楽しさや充実感、大変さを体験する事ができるのではないかと考えた。この体験を通じて、研究者を目指している高校生は、自分のイメージを明確にすることにつながり、まだ、先を決めていなかった学生には、研究という道も選択肢としてあるのだということを知ってもらうきっかけとなるのではないかと考えた。

## ３．研究室インターンシップ2021、2022の概要

### ３．１　参加高校生アンケート結果

初年度の2021年は、７月末から８月末にかけて３回、計18名の高校生が参加した。参加した高校生の学年は、１年生６名、２年生11名、３年生１名であった。参加時点での進学志望分野は、薬学部５名、その他理系のほか、経済学部や商学部、未定のであるものもいた。参加を決意した動機は、こちらが意図していた趣旨と合致していた（表３．１）。初年度は、著者が主任を務める栄養生理学研究室単独で全ての高校生を受け入れた。受け入れ準備として、予備実験、事前学習資料の作成、担当者の振り分け等は全て大学院生が中心となり学部４年生、

表３．１　2021年度参加者の参加動機

学部検討のため

- 理系の勉強をしたくて参加を希望しました。行きたい大学の１つに決めているから。
- 技術職に就きたく、貴校の校風を間近で見たいと思ったからです。
- 薬学部はどのようなことを学ぶのか、知りたかったため。大学の風景をみるため。

興味を持てたため

- 学校で配られたパンフを見て。生物が好きだから。色んなことに興味を持とうとしたからです。
- 学べることがあると思い決意した。化学に興味があったから。面白そうだったから。
- 実際に大学の研究室などがどのようなものなのか見てみたかったからです。
- どのような機械で、どのような研究をし、どのようなレポートを作成するのかに興味があったからです。

早期配属３年生が担当した。当日の対応もはじめのガイダンス以外全て学生が高校生の対応をした。18名を５つのグループに分け、各グループで異なる実験を行った。実験内容は、５つのグループ合わせて一つのストーリーとなるようにした。１）過酸化水素水細胞毒性に対する脂肪酸の効果の検討、２）過酸化水素水添加による細胞の形態変化の観察、３）過酸化水素添加時の細胞内活性酸素量の測定、４）脂肪酸添加による細胞内活性酸素消去酵素遺伝子発現量の変化、５）脂肪酸添加による細胞膜脂肪酸組成の変化。３日目には学科教員、大学院生が集まり全グループの発表会を開催した。高校生は、グループを担当した大学生にサポートを受けながら発表し、質問にもきちんと答えていた。事後アンケートの結果を表３．２に示す。いずれの回答もポジティブであり、参加満足度の高さがうかがえる結果となった。事後アンケートでの高校生の感想（自由記載）を示す。当初著者が意図していた以上の反響であった。

表３．２　2021年度参加者の事後アンケート結果

| | とてもそう思う | まあまあそう思う | どちらでもない | あまりそう思わない |
|---|---|---|---|---|
| 参加して良かったと思いますか | 100% | 0% | 0% | 0% |
| プログラムの内容に興味は持てましたか | 80% | 20% | 0% | 0% |
| 教員や大学生の説明は良かったですか | 100% | 0% | 0% | 0% |
| 機会があればもう一度参加したいですか | 80% | 20% | 0% | 0% |

参加した感想（自由記載）

・薬学を知ることができ、新しい進路の道もできた気がします。実験では死細胞を数えるのが大変でした。間違えたらやり直してなどをやってたので３回くらい同じのを数え直してました。最後のセミナーに向けて短い時間で資料などを作ったのですが発表はうまくいったと思います。また機会があれば参加してみたいと思います。３日間ありがとうございました。
・初めてのことで分からない事があったが大学生の方が優しく教えてくれてとても良かった。私は進路を全く決めてなかったので、参考にしようと思って参加したけど、自分の想像よりとても楽しかったです。科学は苦手だと思っていたけど、実験するのは楽しいんだなと思いました。他の人の実験も大変そうだと思いました。思ったように結果が出なかったけど、とても楽しかったです。
・今回の研究室インターンシップでは、研究の楽しさについて知れたし、城西大学の薬学部の研究内容や優しい先輩方がいるなど、参加して良かったとおもっています。
・多くのことを３日間で学べ生かせることがあった。
・研究内容だけでなく、校内や学生の雰囲気も味わえたためとてもためになりました。さらに研究にもより興味を持つことができました。
・普段使えない器具や、内容の実験ができて楽しかった。また大学生の前で発表するのは少し緊張したが、いい経験になった。
・大学生の方々に直接大学の話や受験体験談が聞けたことが、これから進路を決めるのにありがたい体験でした。また、文系選択の私ですがこのような実験に興味があったので見聞を広めることができて嬉しかったです。楽しい体験をさせていただけて感謝で一杯です。是非、友人、後輩にも伝えていきたいと思います。ありがとうございました。
・とても楽しかったですが、実験失敗してしまったので、もう一度実験したいです。参加して良かったと思っています。
・とても丁寧に教えていただいて、基礎知識があまりない私も実験の内容をしっかりと理解し、発表する

ことが出来ました。また、研究室の奥まで見せて頂けて本当に良かったです。楽しく面白い３日間をありがとうございました。

二年目2022年は、７月末から８月初旬にかけて２回、６校から計13名の高校生が参加した。参加した高校生の学年は、１年生１名、２年生７名、３年生５名であった。内１名は、昨年度に引き続き２度目の参加であった。参加時点での進学志望分野は、薬学部３名、その他理系のほか、文系、未定であるものもいた。参加を決意した動機は、１年目よりも学科のことを知った上での参加者が多かった（表３．３）。2022年から薬科学科全ての研究室で高校生の受け入れを承諾頂き、学科挙げてのイベントとなった。各研究室の大学院生、学部生が中心となり事前準備・当日対応をした。３日間のスケジュールは2021年度と同様であったが、内容は各研究室で様々であった。事後アンケートの結果を表３．４に示す。いずれの回答もポジティブであり、参加満足度の高さがうかがえる結果となった。また、今回は興味のある研究テーマを高校生に選んで頂いたが、最終日の発表を聞いて他の研究にも興味を持つ学生もいた。事後アンケートでの高校生の感想（自由記載）からは、高校ではできない体験ができたり、現役大学生と交流出来て良かった、研究について認識ができたなど、１年目と同様、有意義であったことがうかがえる回答であった。

表３．３　2022年度参加者の参加動機

**学部検討のため**

- 私は城西大学の理学部化学科を目指しています。同じ大学である上、化学科と薬科学科では、実験など、近しい要素があるため魅力を感じて参加を決めました。
- オープンキャンパスで研究室を見て、興味を持ったからです。
- 薬学科はどのような研究をしているのか気になった

**興味を持てたため**

- 薬学の分野に興味があったため実際に研究室で体験できるということで参加を決意しました。
- 学校の先生からの紹介で知り、化粧品開発に興味があるから。
- 興味を持ったから
- 実際に研究室でじっくり体験してみたかったからです
- なにかここで掴めればなと思った事と、もしかしたら今後に生かせるのでは？と思ったからです。
- どのような感じで研究をしていくのかを、この機会に体験してみたいと考えたからです。

表３．４　2022年度参加者の事後アンケート結果

| | とてもそう思う | まあまあそう思う | どちらでもない | あまりそう思わない |
|---|---|---|---|---|
| 参加して良かったと思いますか | 64% | 36% | ０% | ０% |
| プログラムの内容に興味は持てましたか | 73% | 27% | ０% | ０% |
| 教員や大学生の説明は良かったですか | 100% | ０% | ０% | ０% |
| 機会があればもう一度参加したいですか | 36% | 36% | 18% | 10% |

**参加した感想（自由記載）**

- 高校ではやらないことを今回はできたのでとてもいい経験になりました
- 大学生のみなさんは優しく丁寧に教えて下さり、高校生のみんなとも楽しく出来ました。研究室では貴重な体験をさせていただきました。この研究室インターンシップに参加して良かったです。ありがとう

ございました。
・高校では体験することの出来ない色々なことを体験することが出来ました。貴重体験をさせていただきありがとうございました。
・大学の研究室はどのような研究をしていてどんな設備があるのかが知れてとても勉強になった。
・貴重な体験をさせていただきとても楽しかったです。
・とても楽しかった。周りの学生さんや先生方もとても優しく何から何まで教えてもらった。機会があれば是非参加させて頂きたい。
・大学での研究がどのようなものなのかを高校生の時点で知れたので、私達にとってとても有意義な時間になったと思います。大学での実験や研究はとても面白そうだったので、大学に入れるように、しっかりと勉強に励みたいと思います。
・初めての体験や大学生や大学院生の人たちとの交流が出来たことがとても楽しかったです。
・研究はもちろん、研究室の先輩たちが大学生活や単位の話をして下さり、貴重な経験でした。
・事前資料の内容が難しそうで不安な面もありましたが、大学院生の方達が分かりやすいように１つ１つ教えてくださり、とても良い経験になりました。また、城西大学の雰囲気や中身もオープンキャンパスでは知ることのできない所まで知れたと思うので活用していけたらなと思います。
・普段体験出来ないような事を、今回の研究室インターンシップで体験することが出来て良かったと思っています。今回の研究で、人の肌についてさらに興味を持ちました。参加して良かったです。

## ３．２　大学生のアンケート結果

高校生を指導した大学院生の感想（自由記載）を表３．５に示す。研究内容についてこれまで教員から教わり、学会等でも専門知識のある方と話す事が多く簡単に伝わっていたが、高校生に対しては理解しやすい言葉を選び、基礎的なことを再確認する良い機会になったと思われる。大学生は高校生と年齢も近く高校生に寄り添いながらすすめていたことがうかがえた。アンケートでは高校生の立場からみると研究室インターンシップという企画はどのようにみえるかについても回答を得た。アンケート結果をみると、著者は研究室をオープンにしていると考えていたが、まだまだ敷居が高く、モチベーションの高い高校生でないと参加まで至らないことが考えられた。この点に関しては今後検討する必要がある。さらに、アンケートでは研究室インターンシップを高校生だけでなく大学院生にとって利点となるにはどうしたら良いかについて回答を得た。高校生と大学生が今以上に交流する時間を持ち、高校生にも大学生の研究する姿、発表する姿を見せることが必要であると回答があった。以上のことから、研究室インターンシップは高校生だけでなく、大学生の学びの場としても充分機能することが明らかとなった。

表３．５　大学院生事後アンケート

| Ｑ１．参加した感想 |
|---|
| ・高校生の一年の違いはとても大きいと感じた。知っている知識も理解のしやすさも学年によって違うため、大学の研究を体験してもらうなら一人一人に内容をしっかり理解している大学院生がつくべきだと思った。<br>・研究のイメージができないという理由で参加してくれた高校生が機械の使い方や実験内容に興味を示し |

質問してくれて研究が楽しいと感じてくれて嬉しかった。スライド作成に時間がかかってしまったのでもう少しサポートできたらと思いました。
・わかりやすい言葉に変換する過程で、調べ物をするので知識の再確認ができて良いと思った
・普段はある程度知識のある人たちの中で説明したりしているがまだあまり知識のない高校生を教えることで自分の実験についてよく知っておく必要があると感じた。
・自分の知識を含め改めて手技を確認できるいい機会となった。また高校生と触れ合うことで今の高校生までの世代がどういった未来像を描いているかを見定めるいい機会であった
・高校生にとっては全くわからない実験を行うので、自分自身がその実験を理解していないと大変だと感じた。参加している学生同士で少しでも交流があるのか気になった。（交流があれば実験も楽しいし、発表もうまくできそうだから）
・担当する学生以外の学生も積極的に高校生と会話などを率先して行った方が良いと感じた。
・高校生の発表を聞いて短期間で実験して発表まで行えていたのは素晴らしいことだと思う。

Q2. 高校生の立場からみるとこの企画はどのようにみえると考えられるか？

・新環境というところに足を踏み入れるうえで少し敷居が高く、参加するには勇気が必要だと考えられる
・友達と一緒になら、という子だったら参加しようと思えるかもしれない
・入学の判断材料になるだけでなく、新しい興味を持つことができる可能性がある企画
・参加してくれた高校生はとても大きな成長をしたと思うが、高校に大学院生が行って研究の話や簡単な実験をするなど参加しやすいように出来たらさらにいいと思う
・普段できない特別な経験として有意義な時間が過ごせると思う
・参加した場合でも質問は慣れるまでしにくいと考えられる
・拘束時間は短くし、長期間にすることで研究の面白さを経験してもらえるには長期間とる必要があると思う

Q3. どのような形式だと高校生と大学院生双方の利点になるか？

・ディスカッションを増やすことで高校生側と大学生での意見交換ができる
・高校生に教えながら実験スライド等作ってもらい発表させた後、同じテーマで大学院生が発表する
・高校生が大学院生の発表を聞いて勉強になることがたくさんあるのはもちろんのこと、高校生の発表を大学院生が聞くことで、違った見方や考え方、簡単な伝え方など学べると思ったから。
・高校生の希望の研究室に参加できるように期間を増やす
・発表後の質問タイムを先生なしで行うことで、高校生が質問しやすくなり自分の行った実験以外にも興味が持つことができ、大学院生も違う視点の意見や質問を聞くことができる。

## 4．今後の展望

本企画では、高校生の将来設計を後押しすることを目的としていた。この目的は充分に果たせた様に感じている。また、高校生の対応をした大学院生・学部生にも良い影響があった。

高校生には将来は自ら選ぶことができることを知って欲しい。日本財団がインド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツ、そして日本の17～19歳、各1000人を対象に、

「国や社会に対する意識」について2019年９月下旬～10月上旬実施した18歳意識調査では、「自分は責任がある社会の一員だと思う」割合が他国の半分程度、「将来の夢を持っている」割合も他国の７割程度、「自分で国や社会を変えられると思う」割合は他国の３割と非常に低い[1)]。これらの結果は、日本人は自分に対しても社会に対しても多くのことを他人の対応に依存していると考えている割合が他国と比べて非常に多いことを示している。自らの道を自ら切り開く事を諦めていることがうかがえる。また、日本の教育制度は、しっかりと基礎を積み上げていくことで一定の成果をあげている。一方で、自由な発想で学習する機会が少ないと考えられる。さらに、自ら主体で考える体験を通じて成功したり失敗したりしながら成長する機会が少ない。「親ガチャ」という言葉が、株式会社　小学館の国語辞典『大辞泉』が選ぶ新語大賞2021の大賞に、「現代用語の基礎知識選　2021ユーキャン新語・流行語大賞」のトップ10に選ばれた。本来の意味は、子供がどんな親のもとに生まれるのかは運任せであり、家庭環境によって人生を左右されることを、カプセルトイのランダム性に例えた言葉である。親により良い教育環境が与えられなかった場合や親が過剰に子に常に努力することを強要するときなどに使用される。この言葉からも日本では子ども自らの人生であっても子ども主体で考えられていない事がうかがえる。高校生には自分の人生は自らが選択でき、明るく楽しいと感じて欲しい。社会に貢献できることはたくさんあり、他人に与えられるだけでなく、自ら模索して欲しいと考えている。

全国どこでも一定水準の教育を受けるための基準となる高等学校学習指導要領は、2018年に改訂され2022年４月入学の生徒から段階的に適用が始まり、高等学校での学習内容が大きく変化している[2)]。子供が何をどのように学ぶか、何ができるようになるかという観点で「主体的・対話的で深い学びの実現」をさせるという目標がある。主体的な学びとは、学ぶことに興味や関心を持ち、自身の将来に関連づけながら、粘り強く取り組み、次につなげる学習とされている。また、対話的な学びとは、生徒・教員・地域の人との対話を通じて、今までの考え方を手掛かりにして、自己の考えを広げ深める学習のこととされている。さらに、探究の授業が必須となり、これまでの暗記型学習、受動的学習ではなく、自らが課題を発見し、自ら学ぶ能動的学習が必要となっている。これまでの高校までの学習は、常に正解があり、それ以上は求められることが少なかった。今後は、基礎的に学習した先に何があるのかを常に考えて学習する必要がある。自らの興味と基礎的な学習を結びつけて考えることが大切である。研究室インターンシップは、主体的・対話的で深く学ぶ要件を満たす良い企画であると考えられる。

大学での研究活動は、世界初の技術や課題に取り組んだり、社会に貢献するために既存の技術を応用したりすることである。城西大学薬学部薬科学科では、医薬品・化粧品・食品分野に関わる基礎研究・応用研究を多角的に行っている。入学希望者の多くは、将来研究・開発職を希望している。早期配属制度があり、成績に応じて学部２年生から研究室に所属して研究活動を開始でき、３年生後期からは全員がどこかの研究室に配属する。４年生では、大学院生とほぼ同じように研究活動をする。研究を進めるにあたり、これまでに理解できていなかった知識を再確認したり、教科書にはない情報を学術誌や学会に参加することにより入手する。自らの結果と得られた知識をもとに新たな理論を構

築してゆく作業をする。著者が主任を務める栄養生理学研究室では、学年上下にかかわらず、相互に技術や知識を共有する体制をとっている。例えば、学部生が大学院生に実験手技を教えることもある。このような体制にすることで、各自の主体性が向上することを期待している。また、研究テーマも教員から提示するものだけでなく、学生自らの提案に対しても共に検討し実施する事もある。中には私がこれまで経験していない内容を提示する学生もいるが、できる限り共にチャレンジするようにしている。以上のことから、大学での研究活動は、探究の延長線上に位置しているといえる。

今後、高大接続（高大連携）が進むにつれ、大学での研究（学び）を高校生もともに実施する機会が増えると予想される。この場合、大学教員が高校生にアドバイスするだけでなく、大学生が高校生との接点の窓口となり研究をすすめることは、高校生にとっても将来の目標が明確になるばかりでなく、大学生にとっても大学の講義や研究活動では得られない情報発信能力を鍛えることとなる。研究室インターンシップは、高校生に大学での研究を体験して頂く事で自らの将来を主体的に考えるきっかけとなり、協力した大学生とっても自らを成長させるきっかけとなった。今後もこの活動を継続し、大学生と高校生に学びの場を提供したい。

## 謝辞

本企画の一部は2021年度学長所管研究費の補助を受け実施されました。城西大学 藤野陽三 学長はじめ選考委員の先生方に感謝申し上げます。

本企画の実現に向けてアドバイスいただいた城西大学副学長 蓼沼康子 教授、入試課 内山健太郎様、田村ひろみ 様、入試部長 坂本武史 教授、薬学部広報委員長 関俊暢 教授はじめ広報委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

企画の実施にあたり、薬科学科の各研究室の教員、大学院生、学部配属生に心より感謝申し上げます。特に１年目、栄養生理学研究室で実施に関わった学生達には、前例のない中手探りで実施成功まで導いてくれたことに心より御礼致します。

最後に、ご協力頂きました各校の進路指導教諭、理科の先生方に深謝致します。

### 参考文献

１）日本財団（2019）『18歳意識調査　第20回テーマ「社会や国に対する意識調査」について報告書』（https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/11/wha_pro_eig_97.pdf）（2023年１月16日）

２）文部科学省（2018）『【総則編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』（https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf）（2023年１月16日）

【地域連携活動報告】

# 「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」

## ――大学生の学習指導補助体験談――

足立拓哉*・上田一斗**・請地貴史***・渡辺沙織****

キーワード：鶴っ子サマースクール、鶴っ子土曜塾、鶴ヶ島市、WIN-WIN、TJUP

## １．鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業とは

「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」は、児童生徒の夏休み期間を利用して児童・生徒が自主的に学ぶ機会を提供し、学習習慣の定着を図ることを目的とした、鶴ヶ島市と埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）会員校を含む地域の大学・短期大学とが連携した事業です。児童・生徒の学習をサポートする先生（学習指導補助員）は、大学生が務めました。

この事業が実施されるにあたっては、2020（令和２）年度の新型コロナウィルス感染症の第一波の頃に遡ります。当時、新型コロナウィルス感染症拡大の影響で鶴ヶ島市では2020年３月２日から５月31日の約３ヶ月間休校を余儀なくされ、学習に不安を抱える児童生徒、保護者が多くいました。そこで、鶴ヶ島市教育委員会が「鶴っ子土曜塾×大学生WIN-WIN事業」と銘打ち、地域の大学・短期大学の学生を「学習支援補助員」として採用し、毎週土曜日に鶴ヶ島市内の小・中学校で、自習の際の疑問点を解消するためのサポートをしました。児童生徒やその保護者にとっては、学習不安の解消、大学生にとっては、コロナ禍で減少したアルバイトや収入の助けとなりました。特に教職課程を履修している学生にとっては多く中止されていた教育実習に代わる現場経験となり、まさに双方にとってWIN-WINな事業でした。この成果をもとに、2022（令和４）年度「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」が実施されました。

図１．１　鶴っ子サマースクール大学生募集ポスター

今回は、「サマースクール」ということで、夏休みの宿題、ドリル、ワーク、自主学習ノートなどの課題を児童生徒が自ら選んで、自分の通う小・中学校で学習に取り組みました。大学生の「学習指導補助員」は、分からないところやつまずいているところについてアドバイスをしたり、取り組み状況のチェックや採点作業をしたりしました。

＊　城西大学経営学部４年生
＊＊　城西大学経済学部４年生
＊＊＊　城西大学現代政策学部３年生
＊＊＊＊　城西大学・城西短期大学地域連携センター事務室職員

今回、この「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」に参加した３名の城西生の方々に、体験談を寄稿していただきました。

## ２．令和４（2022）年度の実施概要

日程　大学生学習支援補助員研修日　2022年７月25日（月）
　　第一クール　７月26日（火）～29日（金）
　　第二クール　８月22日（月）～26日（金）　　合計10日間
時間　小学校　　８時30分～12時30分
　　中学校　　12時30分～16時30分
場所　鶴ヶ島市内の小・中学校（小学校８校、中学校５校）

## ３．参加学生の体験談

### ３．１　経済学部経済学科４年　上田一斗さん（新町小学校、西中学校で指導）

鶴っ子サマースクールに参加したきっかけは、教職課程を履修しており学校からの案内で児童・生徒に確かな学力を身につけさせたいのと自分自身の勉強にもなると思い参加を決めた。鶴っ子サマースクールでは、午前中に小学校、午後に中学校に行った。それぞれの校種で課題はたくさんあった。

小学校では、席に座って集中して学習に取り組む児童が少なかった為児童にどのようにして集中させて学習に取り組めるかが難しかった。また、我々は騒がしい児童に目を向けることに重点を置いてしまったため静かな児童にあまり指導ができなかったのも課題である。高学年になるに連れて、落ち着いて学習をすることができる児童が多かったため指導をすることができた。

中学校では、主に１年生を担当した。夏休みの宿題に取り組む生徒、塾の夏期講習の課題に取り組む生徒さまざまであった。中学生は静かに学習をすることができたが、小学生とは違い分からない所を自分から聞くことができない生徒が多かったため積極的に声をかけ指導を行った。課題点としては、中学校の学習内容になると難しい問題もあったため教えることができないのもあった。今後のサマースクールでは、文系専門の大学生と理系専門の大学生をペアにして指導を行った方がより深い学習につながると思った。

今回の鶴っ子サマースクールでは、様々なことを学習することができた。例えば、難しい内容を易しく言い換えの工夫を行う、児童・生徒たちとの関わりのなかでコミュニケーションの重要性を学習した。次年度以降も夏季休業期間を利用して子どもたちの学習機会に携わりたいと思う。

### ３．２　現代政策学部社会経済システム学科３年　請地貴史さん（新町小学校で指導）

まず、鶴っ子サマースクールを知ったきっかけとして広報誌から知りました。自分は市のボランティアには参加したいという気持ちがありましたが、なかなか都合が合わず参加することができずにいました。そこで今回鶴っ子サマースクールを見つけ、実施期間も夏休み、また自分がアルバイトで仕事している学童保育の経験を活かすことができると考え、絶好の機会だと思い参加に至りました。

自分は、第二クールからの参加で鶴ヶ島市立新町小学校に配属されました。母校ではないのですが、スポーツ少年団で知っている学校だったので、母校のような懐かしさを感じ少し感極まりましたが、子供たちに教える立場だと気持ちを切り替えて臨みました。

サマースクールの自分と同じボランティア指導員ですが、ほとんどが教職を目指している方と聞いて少し肩身が狭かったのですが、子供たちとの接し方、諭し方など多くのことを学ぶ機会になりました。また、みなさん優しく仕事しやすい環境でした。

生徒の雰囲気ですが、自分は２、４、６年の偶数年生の担当を持ちました。４、６年生はさすが高学年だなと思うおとなしさでしたが、対照的に２年生は教室を走り回ったり、おしゃべりしてしまったり、やる気がなかったりととにかく勉強をスタートさせるところからだったため大変でした。そのため色々工夫をして喋る子は机を離したり、教室を走ってはいけない理由をわかるようにしっかり説明したり、やる気のない子にはなるべくついてやる気を出してもらうように動きました。また、メモや電子辞書を用いてわかりやすく教えられるよう工夫しました。

自分はとにかくどうやったら子供達が楽しく勉強ができるかを考えてこのボランティアで臨みました。何もやることがない子には問題を作ったり、周囲を見て手が止まっていたり悩んでいたりしている子がいたらなるべくついてあげて解けるように教えるよう頑張りました。しかし、自分にはその楽しみを教えるための能力が足りなかったと思いました。というのも、文章問題など自分ではわかっているもののレベルを下げて話すというのがうまくできなかったり、そもそもの能力が違うため、自分の視点で説明してしまい、子供にもわかる様な説明ができなかった点が挙げられます。しかし、勉強を見ていた子にはあだ名で呼ばれて、子供たちには慕われていたのかな？と個人的には感じています。

今後の展望としてはまた都合が合えば反省を活かして参加したいと考えています。というのも子供の様子を見るのは面白く、学ぶべきものもあると思うからです。ただ来年は、就職活動や卒業論文で忙しいため参加できるかわかりませんが、機会があれば参加したいと考えています。

### ３．３　経営学部マネジメント総合学科４年　足立拓哉さん（南小学校で指導）

私が「鶴っ子サマースクール」に参加しようと思った理由は、夏休みに子供と関わる仕事をしたいと考え応募しました。もともと私は、子供と関わることが好きでアルバイトで塾講師や子供たちを山や川に連れて行って生活をする野外体験のリーダーなどを数々行ってきました。教育実習を終えて、教育に対する思いが一層強くなり、夏休みにできるアルバイトを探したところ「鶴っ子サマースクール」を見つけました。時給1,300円と高かったことも選んだ理由の一つです。時給が高い理由は、働く人がしっかり子供と向き合う意識づけをするためであると面接の時に説明を受けました。そのため、実際に働いている時間は、子供たちと積極的に関わることを意識するようになりました。

初日、子供たちはいつも通っている小学校の中に知らない先生がいるということで警戒している生徒がいました。しかし、私たちが積極的に声をかけることによって、２日目からはわからない問題があると手を挙げて質問をする生徒が増えました。それでもなかなか質問ができない生徒がいます。そこで私は、手が止まっている生徒や集中が切れている生徒に声をかけることで質問しやすい環境づくりを心掛けました。

私は、これまで教職や教育実習で培った知識を活用して指導をすることで一緒に働く仲間にも良い

影響を与えることができました。仲間から子供との接し方や指導時の工夫を学ぶことができました。

「鶴っ子サマースクール」は、教職に就きたいと考えている人はぜひ参加することをお勧めします。我が校は中学校と高等学校の教員免許を取得することができますが、小学校の児童と関わる機会はあまりありません。幅広い生徒を指導することで指導の幅が広がります。

今後の展望として、参加した子供たちが参加したことによって、勉強が楽しくなった、もっと学んでみたいと思ってもらえる子どもが増えること、そして、「鶴っ子サマースクール」に参加した学生が、成長できたと感じることを望んでいます。

## 謝辞

「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」の実施に際し、鶴ヶ島市教育委員会学校教育課の皆様や鶴ヶ島市内各小中学校の職員の皆様に大変お世話になりました。大学生にとって大変貴重な経験を積むことができる機会をご提供いただき、ここに深謝申し上げます。また、本紀要への投稿に際し、鶴ヶ島市教育委員会学校教育課の皆様に執筆内容のご確認、ご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

### 参考文献

1）鶴ヶ島市（2022）『「TJUP教育連携市民フォーラム2022～鶴ヶ島市WIN-WIN事業【鶴っ子サマースクール】による小学校・中学校と大学双方の教育的効果について～」を開催しました』（https://www.city.tsurugashima.lg.jp/page/page009456.html）（2023年1月16日）

【地域調査報告】

# 世界遺産登録による都市の変容

## ――富岡製糸場を事例として――

土屋正臣*
中嶋俊貴・安部隼平・伊澤陸斗・小川廉・小寺翔馬・川上美優・岸遼河・
櫻井敬太・島田享樹・竹村諒大・三澤柚太**

キーワード：世界文化遺産、富岡製糸場、観光地化

## １．はじめに

富岡製糸場が2014年に世界文化遺産として登録されると、北関東の一地方都市であった富岡市の旧市街地は、観光地化が進み、まちの環境は一変した。

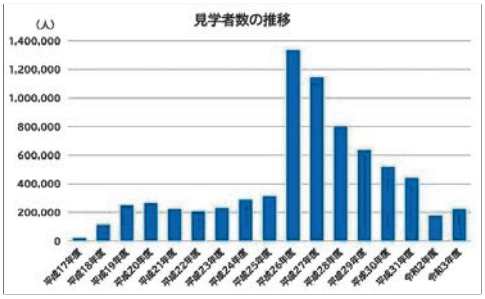



図１　富岡製糸場見学者数の推移
（富岡市観光HPより）

これまで世界遺産登録後における地域社会変容の課題については研究が蓄積されてきた。たとえば、中国雲南省・世界遺産麗江古城を事例分析した高倉健一によれば、麗江古城が世界遺産に登録されると、観光開発が進んだ結果、経済発展を遂げたが、観光地化による生活環境の変化によって麗江古城内に住んでいた人々が周辺地域に流出し、これまで継承されてきた生活文化の存続が危ぶまれるようになったという[1]。ベトナムの世界遺産ホイアン、チャンフー通りを事例分析した内海佐和子は、世界遺産登録を契機とした観光地化による店舗の経営形態変化に伴って、通り全体の景観が変化したことを明らかにした[2]。

これらの先行研究が示すように、世界遺産登録が結果的に当該地域の観光開発によって経済的な発展を遂げる一方、当該地域における生活文化の変容や景観の変化をもたらすことが明らかにされてきている。では、富岡製糸場の場合、立地する市街地の景観やそこに暮らす人々にどのような変化をもたらしたのだろうか。このことを明らかにするため、土屋政策ゼミナールでは、前期授業内で文献調査を行い、夏季休暇中の2022年９月にインタビュー調査を実施した。

---

＊　現代政策学部社会経済システム学科准教授
＊＊　城西大学現代政策学部３年生

1　高倉健一（2016）「生きている文化遺産の保護・活用と住民の役割：中国雲南省・世界遺産麗江古城を事例に」『国立民族学博物館調査報告』136, 91－106.

2　内海佐和子（2020）「観光地化する町並みにおける店舗の経営形態別による景観の変化」『日本国際観光学会論文集』27, 95－101.

## ２．調査の内容と結果

### ２．１　観光関連団体調査

富岡市は、富岡市景観形成ガイドラインを設定し、「にぎわいの風景」「農のある風景」「住まいの風景」と３つの類型に分けてガイドラインがある。なかでも富岡製糸場を含む「にぎわいの風景」ではまちなかに様々な風景資源があり、うまく活用していないことで魅力が発揮されていない現状があるため、有効的に活用することで風景を創造することを目指している。

富岡市観光協会へのインタビューで、同協会代表のＯさんは、「富岡市は、富岡製糸場が世界遺産に認定されたときに観光地化が急激に進んでいる。そのため、富岡市や富岡製糸場の受け入れ態勢が整っていなかった。しかし現在では、富岡市の活性化のために富岡市観光協会が、市内の店舗や富岡市役所などと連携を取り、富岡製糸場の来場者を増やすために、受け入れ態勢を整えている」と答えている。

### ２．２　富岡市役所インタビュー

・初年度は観光客に恵まれたものの、直後のコロナ災禍や地域アクセスの問題、上信電鉄の赤字にも悩まされている。減少した観光客を増やすために市役所の方では見学しやすい形への整備を進めている。

・開発途中に世界遺産登録→登録後開発計画の中断と現状の維持が必須となり、開発そのものが中断になった。そのために歪んだ十字路が残されている地域も存在している。

・市役所では双方の合意の上で登録制度を用いており、登録された建物はその保存を保証する代わりに資金面の保証がある。

・富岡製糸場は近代遺産と呼ばれる、今までの世界遺産と比べて保存方法が特殊になっている。

・街の景観保存のために行われている登録制度は市の審査が必要になってくる。

### ２．３　地域住民インタビュー

商店を営むＩさんは、「とにかくおもてなしをしなくてはならない。」ということとなった。その昔にどの人がどのような生活を営んでいたのか、など地図に載っていない情報を手書き、手作りの看板、プラカードを作ったりし始めた。ゴミとかのトラブルはいうほどない。しかし、観光客による違法駐車などの生活道路の占有があり、ストレスが溜まった。店を開けるときに挨拶をしても無視される時のストレスがすごかった。コロナ禍に直面し、人がいない状況が生まれたとき、「やっと元の街並みに戻った」と正直安堵している。

## ３．まとめ

富岡製糸場が世界遺産登録されることで、富岡市旧市街地の観光地化が進んだ。観光協会や地元自治体、地元住民は積極的に観光客を「もてなす」ことに注力し、新たなまちづくりに期待を寄せた。

旧市街地全体が観光都市としての変容を遂げる一方、それ自体が地元住民にとって新たな「ストレス」を生じさせ、道路整備は利便性確保と景観保護との間で調整を余儀なくされるなど、負の側面も生み出した。

本研究では、正負両面にわたり影響を及ぼす「世界遺産登録による観光資源化」の実態を把握した。この成果は、今後世界遺産登録を目指す都市にとって、観光資源化による都市の変容についての議論に一石を投じるものである。

【地域情報】

# １枚の写真絵はがきの検討

加藤寛之*

キーワード：絵はがき、飯能河原、岩根橋、筏流し、名栗川

## １．はじめに

カメラが広く普及していなかった時代、画像に写真を使った絵はがきは当時の様子を生写真にかえて今日に伝えている。本稿は、飯能市の観光名所を写した絵はがきの一枚、「飯能名勝 名栗川岩根橋」（図１．１）を検討する。この写真は赤田喜美男（1985年）『写真集 明治大正昭和 飯能』国書刊行会13ページに「大正５年」（1916年）のキャプションを付して掲載されており、飯能市の郷土史に興味をもつ人にはよく知られた一枚である。

本稿は論文の体裁はとらず読み物として記述しており、読む際に煩わしい出所ページは必要最小限にした。画像は比較しやすいように末尾にまとめた。また、資料の性格上、元号表記も大切にしている。

## ２．絵はがきの様式

原島広至（2004年）『彩色絵はがき・古地図から眺める東京今昔散歩』中経出版 にある「古い絵はがきの年代推定のヒント」に基づくと、絵はがき（図１．１）は、通信欄が下３分の１から下半分に拡大した大正７年（1918年）４月改定後の様式であり、「か」に濁点がない「郵便はかき」であることから昭和８年（1933年）１月改定前の様式である（図２．１）。郵便はがきとしては改定後でも改定前の様式が使えるが、観光記念で販売する私製はがきは改定に合わせないと商品にならない。流通段階で多少の前後はあるにしても、特定の様式で製造販売可能な期間は改定日を基本にとらえるべきだろう。

## ３．絵はがきの表題

この絵はがきにある文字は右から左へ「飯能名勝 名栗川岩根橋」と読む、いわゆる戦前の一般的な書き方。この絵はがきは、画像や画質、印刷文字からみても戦前の製作である。

「名勝」の呼称は現在も飯能の指定文化財の分類にあり、飯能市教育委員会（2009年）『飯能の指定文化財』には「天覧山の勝」と「能仁寺庭園」の２件が指定されている。この絵はがきにある

＊　元城西大学広報課課長

「名勝」は文化財のそれではなく、絵はがき製作者が独自に記載したもので、観光地として訪れたい場所という程度の意味。

「名栗川」は現在、河川法上ではほぼ全域が「入間川」である。山﨑修二（2002年）『阿須ふるさと散歩』（出版社名なし）の記述を整理すると、大正 7 年（1918年）5 月に河川法で岩根橋より下流が入間川となり（それより上流は名栗川ということ）、昭和39年に名栗村（現在は飯能市）の山中まで入間川の起点が上流へと延長された（つまり、名栗川の名は使わなくなり、ほぼ全流域が入間川になった）。地図にある名前は、河川法上の名前が反映されることが多いが、住民意識はその後もながく飯能河原に流れる川は上流まで含めて名栗川であった。この時代に民間で作成した絵はがきであれば、「名栗川」は妥当である。

絵はがき（図 1．1）で背後にある木製の橋が岩根橋で、これは 2 代目。昭和 8 年（1933年）に、この画像でいえば奥のより高い位置にトラス型の鉄橋が 3 代目として架けられた。写真は 3 代目への架け替え前に撮られたものである。

## 4．記念印

「天覧山遊覧記念 8.10.15」の記念印がある。「天覧山」は飯能市街地に隣接する低山。飯能第一国民学校（1944年）『飯能郷土史（全）』飯能翼賛壮年団 には「天覧山」の名について「同山は初め能仁寺守護神たる愛宕権現を祀って愛宕山と称された。元禄年中羅漢を安置してから羅漢山となり、明治十六年 明治天皇の御登臨になってから天覧山となった」と記述している。呼称の変遷はこれが通説で、現在の観光案内でもこれと同様に説明している。

羅漢山から天覧山への改称がいつかは判然としないのだが、明治45年（1912年）5 月 8 日に行われた本多静六の遊覧地に関する講演に「天覧山」の名があるので、命名がそれ以前であることは明瞭。この講演内容は、浅見徳男（2009年）『飯能の住民が燃えた時－武蔵野鉄道と観光開発－』文化新聞社 が利用しやすい。

だが、飯能の住民がある時点を区切りに「羅漢山」から「天覧山」へと呼び方を変えたのではなさそうだ。小室太一・原田雅義（1988年）『記憶をたどりて』（出版社名なし）には「此の山を能仁寺から町が借り受けて、遊覧地としたのは、武蔵野鉄道が出来てからの事で、本多博士を聘して遊覧地としての設計をして貰って、現今の形態にしてから、天覧山の名が有名になったのであるからである」（本田→本多に訂正）とある。天覧山の名は観光面で率先して使われ、地元での常用には時間がかかったということだろう。絵はがきは観光記念なので「天覧山」が妥当だ。

「遊覧」とは「観光」のことで、現在でも「遊覧船」という言葉がある。「天覧山遊覧記念」は「天覧山観光記念」ということである。

「8.10.15」は、後述の10. 検討の整理 で扱う。

## 5．筏流し

筏流しは山間部から江戸・東京への木材運搬方法である。武蔵野鉄道の開通や自動車の普及によっ

て衰退した。

「埼玉新聞」1944年11月15日に「木材増産に筏流し復活 名栗川ほか明年には荒川にも実施」の記事があり、この記事中に「この名栗川の筏流しは既に大正十年頃までは相当盛んに行はれ」とある。「埼玉新聞」1944年12月19日の「来春西川材の筏流し再現」の記事には、「武蔵野鉄道の開通に次いで貨物自動車の発達に伴なひ漸次陸送に転じ大正初期には全くその影を絶って今日に至った」とある。

前掲『写真集 明治大正昭和 飯能』は絵はがき（図１．１）に「大正５年」とキャプションを付しているが、大正５年（1916年）に特定した根拠は書かれていない。同書71ページには「大正の中期から筏流しはなくなったが、その風情をなつかしむ人も多かったので、遊覧地宣伝のために、時々筏流しが催された」とあり、同書70ページには「自動車での輸送が始まると筏流しは衰えた」とも記している。

飯能で材木商を営んでいた小林貞二氏は筏流しについて 著書 小林貞二（1974年）『超えて来た道』日刊木材新聞社 で、「ついに大正10年ごろになると、まったく影をひそめた」とある。飯能市（1988年）『飯能市史 通史編』も、筏流しについて「大正10年頃を境にして姿を消していったという」とある。

現在は一般に、筏流しの終焉を大正10年（1921年）ごろとしているように思える。だが昭和19年（1944年）発行の前掲『飯能郷土史（全)』は、概ね、大正４年（1915年）４月15日開通の武蔵野鉄道が輸送形式に大変化を与え、従来飯能から川、又は陸上川越経由の途を武蔵野鉄道に依るに改めさせたとはあるが、筏流しについては「既に過去のものとなった」とあるのみで終わった時期は記していない。

## ６．水量、水流等

筏流しは随時行なうことでなく、川の水量が多いタイミングをみて行われたと伝わっている。「埼玉新聞」1944年12月19日の「来春西川材の筏流し再現」の記事には、上掲の後に「来春彼岸の増水期を待って筏流しを再現し」とある。

絵はがき（図１．１）の画像の一部を拡大してみた（図６．１）。水面を見ると、流れは穏やかである。岩根橋から手前の途中までの水面の幅はかなり狭く、水流を挟んで河原に立っている人がいる。水面が左右に広がっているのは筏の辺りからだ。水流の左右に立てる程度の細い水量でも筏流しに相応しいのか、細い水量なのになぜ手前の水面が広いのか、が課題である。

その水流は手前中央のやや右に集まって流れ込んでいる。画面の左にも流れ込んでいる。つまり、足元で分かれているようだ。

## ７．堰

大正６年（1917年)、飯能河原に遊覧地の呼びものとして堰が造られた（図７．１)。水を貯め、舟遊びや自然のプールとして使われた。

小松崎甲子雄（1968年）『飯能の明治百年』文化新聞社 に、「名栗河原が遊覧地化されたのは、大正 6 年に前田の栄屋材木店主人大久保栄さんの手で進められた。今のコンクリートせきを造ったのが手始めで」とある。名栗河原とは飯能河原のことである。前掲『写真集 明治大正昭和 飯能』も、舟遊び写真のキャプションに「大正 6 年にコンクリートの堰ができると」と記している。

当然のことだが、堰は筏流しに邪魔である。前掲『飯能市史 通史編』には明治30年（1897年）の飯能町議会で飯能町久須美地区に建設申請があった入間馬車鉄道を電気鉄道にするための発電所建設について、上流部の林業者が筏流送の障害になるので許可しないでほしい旨の請願書が出されたことを記している。このことからも、河原を仕切る堰が造られる前提として、大正 6 年（1917年）の時点で筏流しがなくなっていたことを推定させる。

## 8．どこから撮ったのか

絵はがき（図 1．1）の写真は、筏を見下ろす高さから撮っている。しかも川幅の中央に近いやや左岸寄り。私は堰の上から撮ったのだろうと推定して、2022年 6 月21日に現存するコンクリートの堰に立って写真を撮り比較した。その写真を掲載する（図 8．1）。このときは堰で水を止めていないので水面は広がっていないが、俯瞰の感じはよく似ている。

２代目岩根橋を河原のやや左岸寄りから撮ったとみられる絵はがき（図 8．2）の画像と比べたい。俯瞰の感じや岩根橋を見上げる感じは絵はがき（図 1．1）と異なるし、こちらは足元に水がない場所から撮っている。筏流しを写した絵はがき（図 1．1）は、水がない河原の面でなく、足元にまで水流があり、かつ高い位置から撮ったと考えるのが適切だ。

もう 1 枚、大正 4 年（1915年）4 月15日開通の武蔵野鉄道開通の記念絵はがきセットの 1 枚とみられる絵はがき（図 8．3）の画像をみてほしい。コンクリートの堰が造られる前の飯能河原の姿である。河岸に木材が揚げてあるから、川の水流を利用して木材を飯能河原まで運んでいたことが分かる。河原をみると右岸に堤防を盛り上げている。絵はがき（図 1．1）の撮影時に同様な堤防があったとしても、その堤防は右岸寄りであるから、絵はがき（図 1．1）の場所では撮れず、また一方的に左岸へと寄ってはいない水流の説明もできない。

## 9．後ろ向きに乗っている筏師

この絵はがきの場所では、奥が上流で手前が下流になる。この絵はがきでは、筏師が体を上流側に向け背を下流側に向けている。筏は押して操ることが多いらしいのだが、それが写っている（図 6．1）。その姿勢が妥当だからこそ、絵はがきに使われたと考えることが自然である。

## 10. 検討の整理

筏流しがなくなった時期は、5．筏流し の項で示したように「大正10年ごろ」が現在の通説である。絵はがき（図 1．1）の撮影時期について、前掲『写真集 明治大正昭和 飯能』は「大正 5 年」

（1916年）としているから、大正 6 年（1917年）の堰の建設前であり、筏流しがあっても不自然ではない時期である。

絵はがき（図 1．1）の様式は大正 7 年（1918年）4 月以降かつ昭和 8 年（1933年）1 月以前の様式である。絵はがきの写真は過去のものでも使えるので、写真が大正 5 年撮影であっても不自然といえないのだが、絵はがきの様式は前掲『写真集 明治大正昭和 飯能』にある「大正 5 年」（1916年）とずれている。

どこから撮った写真かを考えると、堰の上からが妥当だろう。仮に堰の建設前であれば、川幅いっぱいに水面が広がり足元に水が流れ込んでいる河原の真ん中あたりに脚立のような高いものを置き、それに上がって撮ったとしか考えられず、不自然である。水流を左岸に寄せる堤防があったとしても、それでは川幅に対して左岸寄りの撮影位置や足元に流れ込む水流の説明ができない。

記念印にある「天覧山遊覧記念　8.10.15」の「8」は、明治や平成は論外だから、大正 8 年（1919年）か昭和 8 年（1933年）のどちらかである。絵はがきの様式からみれば昭和 8 年（1933年）10月15日時点のそれではない。このときの様式変化は「か」と「が」の濁点有無の相違に過ぎないので実用に問題はないにしても、商品として旧様式で販売し続けることは不自然である。しかも岩根橋は昭和 8 年（1933年）にトラス形式の鉄橋になる。新しい岩根橋の完成が昭和 8 年のいつであるかにかかわらず建設工事は進んでいたはずであり、昭和 8 年（1933年）10月15日時点ならば旧い橋は観光絵はがきの画像としてふさわしくない。このことから「8.10.15」を昭和 8 年（1933年）とみることは無理があり、大正 8 年（1919年）10月15日とみるべきだろう。

## 11. まとめ

いずれも証拠不十分といわれればその通りだが、そろそろまとめたい。

「天覧山遊覧記念 8.10.15」は大正 8 年（1919年）10月15日だろう。絵はがき（図 1．1）写真の撮影場所は、普通に考えると堰が出来た後に堰の上から撮ったのだと思う。そうなると撮影時期は、堰が出来た大正 6 年（1917年）以降で、記念印がある大正 8 年（1919年）10月15日の間だろう。前掲『写真集 明治大正昭和 飯能』にある「大正 5 年」（1916年）のキャプションは、堰が出来る前の撮影と推定したものではないか。

ではなぜ筏流しが行われているのか。私は、飯能河原へコンクリートの堰が造られた後に撮られた、遊覧地を盛り上げる観光イベントの写真ではないかと考える。

同じ画像の絵はがきで「天覧山遊覧記念 7.10.9」の記念印が押されたものを紹介しておく（図 11．1）。こちらは「(飯能名勝)」と半丸カッコがあるので、画像は同じでも絵はがき（図 1．1）とは別物である。記念印にある「7」の元号は図 1．1 の絵はがきと同じ性質のものだと思うので、大正 7 年（1918年）ならばこの画像を使った絵はがきの販売期間は少なくとも 1 年間ほどあったことになる。また、撮影時期は大正 7 年（1918年）10月 9 日以前にまで狭められる。この画像は、大正 6 年（1917年）に飯能河原へコンクリートの堰が造られてから 1 年くらいの間に筏流しイベントが行われたことを記録しているのかもしれない。

この撮影時期の推定は誤っているかもしれないが、それでも筏師が体を上流側に向け背を下流側に

向けていたことを写したことには資料価値がある。

根拠が曖昧なことばかりのまとめではあるが、曖昧さは仕方のないことだと思う。数十年前に絵はがきを製造した人も、記念に買って記念印を押した人も、後世のための資料としてそうしたのではないのだから。

## 12. 付記

筏流しがなくなった後も、遊覧地宣伝のために時々筏流しが催されたという。ところが、太平洋戦争の終戦間際にあらためて輸送手段としての筏流し復活が構想された。「埼玉新聞」1944年10月26日、「埼玉新聞」1944年11月15日、「埼玉新聞」1944年12月19日、「埼玉新聞」1945年５月19日に該当記事がある。それによれば、この筏流しの範囲は名栗地区の名郷から飯能の間である。実施構想には東吾野、秩父、荒川があるので、下流で荒川に合流する名栗川（入間川）であるにも関わらず飯能までというのは不自然である。飯能までで終わるのは、堰の存在が筏流しを妨げるからではないか。言い方をかえれば、大正６年（1917年）に堰が造られたということは、この時点ですでに輸送手段としての筏流しが行なわれていないことの傍証だと思う。

図１．１　絵はがき「飯能名勝 名栗川岩根橋」
記念印に「8. 10. 15」の日付がある

図２．１　図１．１の宛名面
宛名欄が上半分で「郵便はがき」が「か」なので 大正７年（1918年）４月改定後で昭和８年（1933年）１月改定前の様式

図６．１　図１．１の一部拡大
河原に立つ人がいるから水流は細い　筏師は後ろ向きで操っている

図７．１　飯能河原の堰の写真
堰は開いている
2022年６月21日撮影

図８．１　堰の上で撮影の写真
写真図１．１の構図と俯瞰状態が似る
2022年６月21日撮影

図８．２　絵はがき「（飯能名所）岩根橋」
河原の左岸寄りから撮った２代目岩根橋図１．１とは俯瞰の感じが異なる
このときは流れを左岸へ寄せていない

図８．３　絵はがき「飯能町役場ヨリ岩根橋ヲ望ム（飯能駅ヨリ約五丁）」
大正４年（1915年）４月15日開通の武蔵野鉄道開通の記念絵はがきセットの１枚とみられる
右岸に堤防を造り、揚げ場がある左岸へと流れを寄せている

図11．１　絵はがき「（飯能名勝）名栗川岩根橋」
記念印に「7.10.9」の日付がある

【地域情報】

# 聞き書き 天狗の声

聞き取り　平井亜未*
話　　横田弥三郎**・黒澤清三郎***
解　　説　加藤寛之****

キーワード：天狗、飯能、秩父

## １．解説　飯能・秩父地域の天狗伝説

本稿は飯能・秩父地域の天狗伝説を概観し紹介するもので、網羅的なものでも学術的なものでもない。天狗に興味を持たれる方に導入のための読み物として受け入れていただければ幸いである。

天狗の話は各地にあり、飯能・秩父地域にもたくさん伝わっている。現在の飯能市の山間部は文化的に秩父の影響が強いことが知られており、一緒に扱っていいと思う。

太平洋戦争前から奥武蔵や秩父の山村を歩いて多くの見聞を残した神山弘は『増補ものがたり奥武蔵』に「奥武蔵天狗譚」の章を設けて、７つの天狗伝説を記している。それらは「天狗の提灯」「天狗の怪音」「天狗の休み木」「弱虫男に力をさずけた話し」「天狗猿・コーモリ穴の怪しい天狗」「天狗がくし」「椀貸し伝説」である。

飯能の郷土史研究に多大な功績をのこした新井清寿は、『飯能の伝説』の「天狗の話」の章に９編を記録している。神山弘の記録と同じらしいものもあって、「ちょうちんをつけた天狗」「天狗の灯」「いたずら天狗」「おこった天狗」「自慢男の鼻をへしおった天狗」「天狗かくし」「何も書いてない巻物」「力を授けた天狗」「逃げた天狗」の９編である。新井清寿は同一書名のガリ版刷り『飯能の伝説』にも、天狗について「天狗の腰掛松」「天狗松」の２編を収めている。

他の方の著述も含め、飯能地域にある多数の天狗伝説を整理分類した著述に、『飯能市郷土館研究紀要』第４号所収の村上達哉「飯能市域に残された天狗の伝説について」がある。飯能市域の天狗伝説を、光りにまつわる怪異、音にまつわる怪異、天狗の居場所にまつわる怪異、天狗がくしにまつわる話、人間へのいたずらなど、の５項目にまとめ、さらに寺院との関係にも触れている。飯能周辺の天狗研究には、便利な著述である。

秩父地域に目を向けると、坂本時次『秩父の民話と伝説』があり、これを原作とした山田えいじ『秩父の民俗と伝説等』には絵物語風にアレンジした「お天狗さまを見た話」「天狗さまのとまり木」が収められている。この「お天狗さまを見た話」は絵物語風ゆえに天狗像の期待を裏切らないと

＊　　城西大学広報課事務職員
＊＊　　平井亜未の母の父方の祖父
＊＊＊　平井亜未の母の母方の祖父
＊＊＊＊　元城西大学広報課課長

ころが貴重で、「神楽で見るあの姿そのままの衣裳を着て、一枚歯の下駄をはいて」「衣裳は金ピカに光って」いたのだという。なんとなく出来すぎ感はあるが、これなら一目で天狗と分かる。ちなみに前掲の「天狗猿」は猿の姿を天狗と認めた例（ホンモノの猿じゃないのか？）であり、村上は「飯能市域に残された天狗の伝説について」で飯能市域では「基本的に天狗の姿が現れない」としている。ほかには大田巌『奥秩父の伝説と史話』に「天狗の火の番」という話が載っている。これは火に関係している。秩父の天狗伝説はまだまだありそうだがこのあたりでやめ、次はお祭りの話にする。

天狗は怪異なものであるにせよ、昔は（あいまいで便利な表現だ）秩父の各地で、神として天狗をお迎えして祭る風習があったという。そのほとんどが昭和30年代に消えてしまったらしい。そのなかで白久のテンゴウ祭りは、埼玉県指定無形民俗文化財になっている。秩父市のホームページには「テンゴウ（天狗）まつりは、子ども中心の山の神、塞の神をまつる行事である。」「天狗様に一年の安泰を祈願する火祭りである。」とある。ただし「現在一時休止中」。平成22年11月20日に再興し開催されたときに、神事としての伝統と住民参加行事への転換や火の扱いで揺れたようだが、これは本稿とは別の事情である。

さて、天狗について、思ったところをいくつか書いておきたい。

天狗というと深山幽谷の感があるが、そうではない。天狗伝説の場所は、人が往来できるところである。村上は、飯能市域では子の権現付近が多いと指摘しているが、子の権現は戦前から奥武蔵の代表的な日帰りハイキングコースになっていて、それほど山奥とはいえない。人が行って天狗の気配を感じるのであり、人がいるからそれが伝わるのだ。当然といえば当然である。新井『飯能の伝説』（単行本）にある話のうち「力を授けた天狗」「逃げた天狗」は日高市にある日和田山がその場所である。城西大学のすぐ近くの山だから、どうみても深山幽谷ではない。日和田山の天狗については、こんなものもある。飯能の地元紙「文化新聞」昭和37年10月20日に「日和田山の天狗」という話が掲載されている。それは「りっぱな一人の大男」だったとある。天狗に性別のあることが面白い。読者の方はここに至るまで、なんとなく天狗に男性像を思い浮かべていたとは思うが。

最後に村上の著述に収録されていない、天狗の市街地出現例を紹介して終わりたい。それは小谷野寛一『続　民俗茶ばなし』に収録されている「川天狗」だ。山に住む天狗を「山天狗」、川に住む天狗を「川天狗」と分類（？）することがあるが、これは「川天狗」になる。それには「岩根橋あたりによく川天狗が出たという話が残っている。魚とりがメシより好きという橋のたもとのお爺さんが釣りをしていて度々川天狗にじゃまされた。」とある。展開としては天狗に釣りの邪魔をされたが、釣った魚の何匹かを置いて帰ると次は邪魔されない、という川天狗らしい話なのだが、注目は「岩根橋」「橋のたもと」にある。岩根橋は３代目から高所に架橋されており、そこは深い谷で両岸は崖である。「橋のたもと」らしい場所が存在するのは初代と２代目の岩根橋だろう。初代と２代目の場所はほぼ同じで、初代は明治23年（1980年）ころ建設、３代目は大正８年（1919年）架橋だから、その間の出来事となろう。架橋場所は飯能河原の西端である。当時の飯能河原周辺は飲食店や旅館が並ぶほど繁栄しており、今風にいえば充分に市街地である。こんな賑やかな場所にも天狗は現れていたのだ。

## ２．証言　天狗の声

これは、平井亜未が母の記憶をたどって聞き取り記すもので、大体今から60年くらい前、母親が10歳くらいのときに祖父達から聞いた話である。

**母親の父方の祖父「弥三郎」の話**

「今から100年くらい前。弥三郎お爺さんが山奥の川に行ったとき、奥のほうから蓄え地鳴りみたいな声が聞こえてきたという。場所は秩父の川、長瀞や親鼻のあたり。

魚が面白いように取れた時、ものすごく響く『ワッハッハ、ワッハッハ』という声が聞こえ怖くて魚を置いて逃げ帰ってきた」

**母親の母方の祖父「清三郎」の話**

「こちらも荒川の出来事。清三郎お爺さんが自転車で釣りに行ったところおもしろいように魚が取れ、持って帰るときに『おいてけぇ、おいてけぇ』とものすごく大きな声で言われ、必死で自転車をこいで帰ってきた。あまりの怖さに毛がウワーっと逆立ったと」

この話をする時、思い出しても怖いのか祖父の腕の毛や髪の毛も逆立っていたと話していた。

【地域活動ノート】

# 管理栄養士養成課程学生による<br>越生町梅農家シェアキッチンにおけるワンデイカフェの取組

中里見真紀*・山田沙奈恵*・君羅好史**・真野博***・内田博之***

## 活動の概要

管理栄養士の業務の１つに給食管理がある。給食経営管理は献立作成から食材管理、調理、資金管理、衛生管理などその学びの内容は多岐にわたる。これまで医療栄養学科では「コラーゲンようかん」を通じて越生町の梅農家と共同でスポーツ和菓子の開発をした。これがきっかけで、山口農園の協力のもと、シェアキッチン「梅凜カフェ」でのワンデイカフェを開催につながった。本取組は、管理栄養士養成課程の学生が越生町梅農家シェアキッチンにおけるワンデイカフェの企画運営をアクティブラーニングで行うことで実践的に給食経営管理を学ぶことを目的としている。

キーワード：越生町、地域活性化、管理栄養士、食育、カフェ企画運営

城西大学薬学部医療栄養学科では、管理栄養士の養成を行っている。管理栄養士の主な業務は栄養指導や給食経営管理、栄養管理である。その中で給食経営管理は、献立作成、栄養価計算、発注、在庫管理、食材の検品、資金管理、調理、配膳、食器洗浄、厨房内の食品衛生管理など学びの内容は多岐にわたり、授業実習以外で実践的に学ぶ機会は少ない。これらはシェアキッチンによるカフェ企画運営を通して、実践的に学び身に着けることができると考えられる。シェアキッチンとは、保健所の許可を得た業務用キッチンを複数人でシェアして営業している店舗で、手軽に飲食店の経営にチャレンジできるメリットがある。

越生町で梅栽培を営む山口農園は、越生町の固有種の香り豊かな「べに梅」を栽培している。収穫されたべに梅の商品になりにくい規格外の果実を利用した「JOSAIコラーゲンようかん べに梅」の開発を城西大学医療栄養学科と共同で行い、これがきっかけで今回のワンデイカフェの取組が実現した。山口農園で運営しているシェアキッチン「梅凜カフェ」は、自宅敷地内にある75年前に蚕の飼育に使用していた養蚕小屋をリノベーションして“梅で人と人を繋ぐ”をコンセプトに掲げ2021年にオープンした。本取組は、管理栄養士養成課程の学生がシェアキッチンに

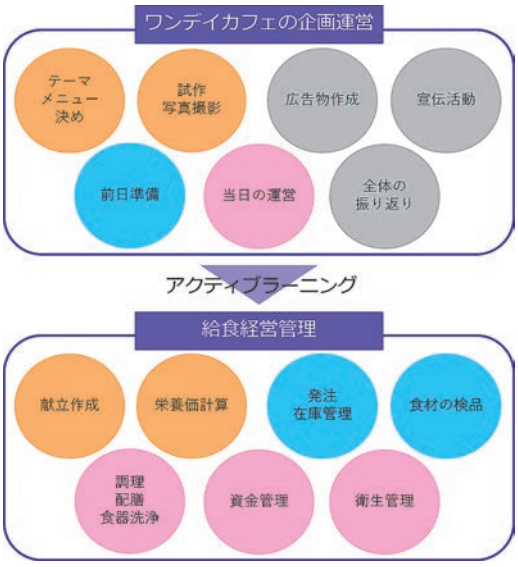



図１. ワンデイカフェ企画運営における学びの関係図

＊　城西大学薬学部医療栄養学科助手
＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科助教
＊＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科教授

おけるワンデイカフェの企画運営を通して実践的に給食経営管理を学ぶことを目的としている。

医療栄養学科学生によるワンデイカフェは、2021年12月から現在までに３か月に１度、計５回実施しており、カフェの企画・運営に興味があり、調理が好きな医療栄養学科１～３年生や大学院生を中心に活動をしている。店名は“このカフェを通して人が笑顔になれるように”という想いを込めて「Smile up caffe」と名付けた。

図２. 企画から当日の運営までの写真

カフェの企画運営はまず毎回カフェのテーマを決め、メニューの話し合いを行う。次にメニューの試作を数回繰り返し、提供メニューを確定後、宣材用の写真を撮影する。それを元にメニュー表やリーフレットなど広告用媒体、オーダー表の作成、SNSによる宣伝活動を行う。カフェ開催前日には食材等の買い出し、調理の下準備、お釣りや雑貨の準備、メニュー表やリーフレットの印刷をしてカフェに搬入をする。当日は朝から11時のオープンに向けて調理、飲み物の準備、使用食器の決定、盛り付けの確認、試食、当日宣伝用の写真撮影、広報活動、提供シミュレーション、予約の確認などを行い、オープンしてからは、調理班、ドリンク・ホール班に分かれて運営する。カフェ閉店後は後片付け、当日の売り上げ計算や清算をして、１週間以内に当日の振り返りを行い次回運営に活かしている。

提供メニューは、医療栄養学科で研究しているコラーゲンやユズの他、梅凜カフェにちなんで必ず１品は梅を活かした料理やスイーツを入れている。また、これら食材の栄養素や機能性を伝える資料を通してお客様の健康に役立つことも視野に入れている。これまでに「コラーゲン」や「秋の旬」、「魚」をテーマとして、その内容に沿った食育用リーフレットも作成した。

図３. これまでに提供した
メニュー写真の一部

これまでに参加した学生からは、「接客でお客様の意見を直接聞くことができ、料理をほめてくださった方がたくさんいて嬉しかった」、「最初は接客やレジなどわからないことが多く対応に困ったが、少しずつ慣れてきている」など意見が出ており、カフェの企画運営を実践することで学年を超えて教え合い、能動的に給食経営管理について学ぶアクティブラーニングとなり、また地域の健康増進の一助にもなると考えられる。今後も継続してこのワンデイカフェに取り組んでいきたい。

本取組にあたり、シェアキッチンの提供および多大なご助言、ご協力いただいた山口由美氏に感謝の意を表します。

【地域活動ノート】

# 小川町におけるメディアミックスによる観光プロモーションの取り組み*

小泉亮汰**・遠藤柊一***

## 活動の概要

城西大学現代政策学部庭田政策ゼミナールⅠ（３年生）では、グループワークによる大学周辺の観光プロモーションを通じて、地域の活性化を目指している。その中で、私たちのグループは埼玉県小川町の観光プロモーションをメディアミックスで行っている。私たちは、小川町を舞台としたドラマ、小説、そして撮影時のエピソードを収録したオーディオコメンタリーを同時に展開することで幅広い層に小川町の魅力を訴求することを意図している。

キーワード：小川町、観光プロモーション、メディアミックス

## 【埼玉県小川町で観光プロモーションを行う意義】

近年、新型コロナウィルス感染症拡大により観光の在り方が変わってきており、長距離移動を避け、人との接触回数が少なくなるような感染リスクの低い観光が求められている。このような趨勢の中で、地元観光[1]が注目されている。地元観光とは、自宅から１～２時間圏内にある近隣の宿泊観光や日帰り観光のことをいう。

このプロジェクトも埼玉県小川町の地元観光を推進したいという思いから始まった。小川町は綺麗な川や緑あふれる山々など豊かな自然に恵まれ、酒蔵や和紙作りなどの伝統文化が歴史的な町並みに根付いている。そして小川町は都心からのアクセスが良く、電車だと１時間程度で行くことができる。私たちは、この地域の魅力と立地を活かし、都会での生活に息苦しさや疲れを感じている人に対して、小川町の自然と伝統文化でリフレッシュしてもらうということをテーマに、小川町の地元観光の推進を目指している。

## 【メディアミックスにより期待される効果】

メディアミックスとは、複数のメディアを組み合わせて、それぞれの相乗効果を狙う広告戦略をいう。私たちは、より幅広い層に小川町の観光的魅力を知ってもらえるよう、この手法を観光プロモーションに取り入れている。具体的には、小川町を舞台にしたオリジナルドラマやオリジナル小説、オーディオコメンタリー（ラジオ動画）の作成を行っている。こうしたそれぞれのメディアが小川町の観光的魅力を知るきっかけとなり、また、各メディアの内容はそれぞれのメディ

---

＊　本活動および本稿の執筆に際しては、ゼミナールの担当教員である庭田文近先生（城西大学現代政策学部教授）にご指導いただいた。

＊＊　城西大学現代政策学部３年生・庭田政策ゼミナールⅠ　プロジェクトリーダー

＊＊＊　城西大学現代政策学部３年生・庭田政策ゼミナールⅠ　ゼミ長

1　このことを（株）星野リゾートではマイクロツーリズムと称している。

アとストーリーがリンクしている。これにより、視聴者は、沢山用意されている中の１つの入り口に興味を持つと、小川町の魅力を様々な視点から知れるようになっている。

オリジナルドラマは、小川町の魅力を紹介しながら、物語が進んでいく内容となっている。オリジナル小説は、普段動画を見ない人に向けて、オリジナルドラマを小説化した内容となっている。オーディオコメンタリーは、私たちがドラマの撮影で小川町に行って感じた魅力を、日常会話のようにゆったりとした雰囲気で大学生同士が会話をする内容となっており、ラジオ感覚で聴くことも出来る動画になっている。また、これらの作品・メディアは、YouTubeとTwitterで発信することで、幅広い世代に向けたプロモーションとなるようにしている。

## 【活動記録】

| 日　付 | 活　　動 | 概　　要 |
|---|---|---|
| ７月20日 | フィールドワーク | ・小川町観光案内所、小川町駅前商店街、晴雲酒造、小川町役場の訪問<br>・観光プロモーション作品のコンセプト固め |
| ７月～９月 | グループディスカッション | 観光資源のピックアップ、脚本制作 |
| ９月７日 | 第１回撮影 | 小川町駅前 |
| 10月１日 | 第２回撮影 | 仙元山見晴らしの丘 |
| 12月３日 | 第３回撮影 | おからドーナツ、道の駅おがわまち |
| 10月～12月 | 編集作業（第１話） | 動画編集・レコーディング |
| 11月 | オーディオコメンタリー制作(第１話) | ドラマ出演者の座談会収録 |
| 12月 | 小説執筆（第１話） | ドラマ第１話に基づいた物語 |
| 11月～12月 | ゼミ内カンファレンス | 作品の試写・批評・修正 |
| 11月３日 | 動画公開 | YouTube城西大学現代政策学部庭田文近研究室チャンネル |
| 11月４日 | 小説公開 | Twitter庭田文近研究室(城西大学現代政策学部) |
| 12月５日 | オーディオコメンタリー公開 | YouTube城西大学現代政策学部庭田文近研究室チャンネル |
| 以下、第２話の制作 | | |

## 【地域活動を通して得られたキャリア形成への効果】

私たちは、本プロジェクトを通して、企画の立案から実行・検証に至るプロセスを経て、経済産業省が提唱する社会人基礎力のうち、とくに「課題発見力」･「計画力」･「実行力」が身に着いたと自負している。

「課題発見力」については、教室内での資料解釈・文献読解だけではなく、フィールドワークや現地の人からのヒアリングを通して、小川町の観光資源の発見およびプロモーションの課題を抽出することができた。

「計画力」については、本プロジェクトが４年次まで続く長期のものであり、最終的なゴールの設定、ゼミ生および撮影先とのスケジュールの調整を通して、観光プロモーションの課題の解決を考慮し、自分たちの作品を計画的に制作・公開するノウハウが得られた。

「実行力」については、何度も現地を訪れ、撮影・編集し、ゼミ生とのカンファレンスを経てより良い作品になるようなプロセスを経ながらも、公開目標日を設定し確実に制作を進めていくための力を得ることが出来た。

【地域活動ノート】

# 折り紙を活用した食育推進プログラムに参加して

鶴岡茉里菜*・黒須美月*・依田栞奈*・小池大河*・小山昂輝*・牧野彩香*
山田沙奈恵**・深谷睦**・山王丸靖子***

## 活動の概要

2022年10月８日、９日にさいたま市内の商業施設で開催された健康イベントに、城西大学として参加体験型の食育推進プログラム「食育折り紙体験教室」を出展した。今回は、その一員として折り紙教室の準備、実施に関わった。体験教室では、さつまいも、しいたけ、かぶの３種類の折り紙を作成した。折り紙と同じ食材を用いたレシピを配布し食に興味を持つための取組を行った。２日間で合計約150人が参加し、参加者からは「楽しかった」「レシピの料理を作りたい」などの好意的な感想をもらった。

キーワード：食育折り紙、参加体験型、食育推進プログラム

今回、参加した参加体験型の食育推進プログラム「食育折り紙体験教室」は、未就学児から小学生の子ども達とその保護者を主たる対象として、秋の食材を親子で一緒に折り紙を折って楽しむための教室である。この教室の実施目的は、子供たちが食べ物を折り紙で折るという体験を通して、食べ物に興味を持ち、成長してからも栄養や健康に関心が持てるようになることである。日常的に食卓に上る食材を、折り紙で作成することで食べ物や料理の話をして、食に興味や関心を持つきっかけづくりになることを期待した。

体験教室を企画・実施するために、準備段階で最初に取り組んだのは、当日作成する折り紙の選定であった。当日体験してもらう折り紙の種類は、小学校低学年以下でも取組める難易度の低い、さつまいも、しいたけ、かぶの３種類を選定した。これらについては、折り紙の色が野菜のイメージと合っているか、折り紙の大きさは対象者に合っているか、折り紙の作成に掛かる時間などについて検討した。特にさつまいもの折り紙の色は、想定外に選定が難しく、数種類の色を購入して試作を重ねた。なお、作成した折り紙作品を、持ち帰れるようにするため、「よくできました」とスタンプを押した台紙を準備した。また、りんご、かき、ほうれん草などの様々な折り紙を折り、それと同時に切り絵も作成した。これらは、通行する人たちの目を引くように、大型パネルに張り付けて体験教室の机の前に飾った。

当日は、作成する折り紙を使った料理（レシピ）も配布した。レシピは、さつまいものカップケーキ、しいたけのチーズ焼き、かぶと豚肉の炒め物の３種類である。これらは、体験教室に参加した子供たちが保護者と自宅で作れるよう、わかりやすく比較的簡単な料理である。３種類の料理は、研究室で実際に試作と写真撮影を行い、配布するレシピに掲載した。レシピの裏側には、それぞれの食材についての由来や栄養価などの説明文を加え、読むだけでも楽しめるよう内容を工夫して掲載した。折り紙とともにレシピと食材

＊　城西大学薬学部医療栄養学科　３年
＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科　助手
＊＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科　准教授

に関する説明を加えることで、参加者が野菜の情報に触れる機会が増えると、食に対する関心が高まると考えた。

体験教室の当日は、開店１時間前に従業員入り口から店内に入場し、本館３階のブースに移動し準備を始めた。開店時間までは緊張していたが、教室開始後にはその緊張感は徐々に消え、笑顔が出せるようになった。初日の一番初めに体験教室に来てくれたのは、１歳くらいの男の子とその父親だった。この時の事はとても印象深く記憶に残っている。男の子は幼く、折り紙を折ることは難しかったが、その小さい手に父親が手を添え、なんとかさつまいもを折ることが出来た。完成したさつまいもの折り紙は、その男の子にとって、生まれて初めての体験だったかもしれない。そして、折り紙を折ったことで、将来食べ物に興味が湧くきっかけとなったかもしれない。このように参加者が、折り紙という媒体を通して食と触れ合い、楽しんでいる様子を見ることができ、体験教室の存在意義を大きく感じた。

２日間の体験教室には、延べ150人以上の方々に参加していただき大成功であったと思う。多くの参加者から、たくさんの笑顔を見せていただくことができた。事前準備は大変だったが、入念な準備が成功につながったと考えている。体験教室の前日に、研究室で最後の準備を終えた時、「明日はたくさんの人が来てくれるだろうか」と不安と期待でそれまでにはない気持ちを感じた。しかし、そのような不安はすべて払拭され、食育の可能性の広さを強く感じさせてくれる素晴らしい２日間となった。コロナ禍でこれまで食育に関する活動ができなかった分、私自身もとても楽しむことができた。貴重な体験が出来て本当に良かったと思っている。そして、これからもたくさんの経験と学びを重ね、食の専門家・管理栄養士として人々が笑顔になるために役立ちたいと思っている。

【地域活動ノート】

# 第16回薬局管理栄養士研究会の活動報告

## ――薬局管理栄養士の真価～どのように価値創出すべきか――

藤田智子*・小口淳美*・内山貴雄*・川戸麻紀*・奥嵜沙恵*・宮代由佳*・柳岡祐治*
堀由美子**・君羅好史**・松本明世**・真野博**・清水純**・内田博之**

## 活動の概要

「薬局管理栄養士研究会」は、セルフメディケーションの最前線である保険薬局やドラッグストアに勤務する管理栄養士・栄養士が、情報交換と相互の連携を図ることを目的とし、城西大学薬学部医療栄養学科および城西大学薬学協力会の後援により2006年に発足した。城西大学・城西国際大学東京紀尾井町キャンパスに於いて毎年１回の開催を通例とし、2021年には16回目を迎えた。第16回薬局管理栄養士研究会は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を考慮し、前年同様に集合型開催を見送り、城西大学坂戸キャンパスを配信会場としてオンライン（Zoom）にて開催したので報告する。

キーワード：薬局管理栄養士研究会、管理栄養士、保険薬局、ドラッグストア

第16回薬局管理栄養士研究会は、2021年11月27日（土）14時～17時、「薬局管理栄養士の真価～どのように価値創出すべきか～」を開催テーマとし、情報提供、口頭発表およびグループディスカッションをオンラインで開催した。２回目のオンライン研究会となったが、全国から173名の参加者が集まり、盛会のうちに終えることができた。

プログラムは、本研究会会長小口淳美氏（株式会社フォーラル）より、薬局管理栄養士自らが地域社会において価値創出する必要性などを含めた開会挨拶に始まり、価値創出の一つのあり方として、株式会社スギ薬局菅原正勝様より、特定保健指導の取り組みについて、導入の流れから実施体制などの情報が提供された。口頭発表（７演題）では、それぞれの薬局、ドラッグストア、管理栄養士養成校で行われた事業や取組みが報告され、続いて行われたグループディスカッションでも、口頭発表の内容をテーマに加え、活発な意見交換が行われた。

第16回は、前年に引き続きオンライン開催であったが、全国各地から薬局管理栄養士・関係者にご参加とご協力をいただき、実施することができた。今後も薬局・ドラッグストアで活躍する管理栄養士を中心に、薬剤師や関連職種、薬局管理栄養士を目指す学生など、様々な方との情報交換や情報収集、互いの交流の場として、活発な研究会になることを願っている。

＊　薬局管理栄養士研究会世話人
＊＊　城西大学薬学部医療栄養学科

第16回薬局管理栄養士研究会の情報提供・口頭発表の内容、アンケート結果は以下のとおりである。

**＜情報提供＞**

特定保健指導の取り組み；株式会社スギ薬局 ウェルネス統括部 統括部長 菅原 正勝氏

**＜口頭発表＞**

演題１　薬局管理栄養士の直接的利益の創出～有料栄養相談による現状と課題；株式会社パル・オネスト

演題２　コロナ禍における管理栄養士養成校のICTを活用したメニュー開発の取組；城西大学医療栄養学科

演題３　薬局管理栄養士の認知度・需要のアンケート調査の報告；認定栄養ケア・ステーション たから薬局東松山店

演題４　薬剤師と管理栄養士が連携したTRへの取り組み状況と今後の課題；株式会社フォーラル

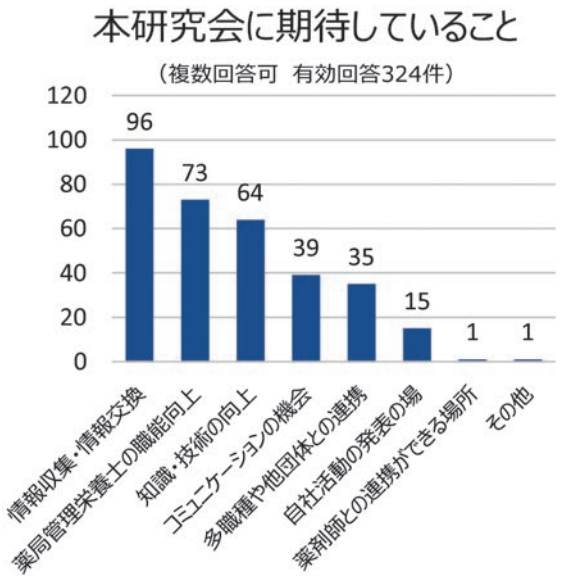
演題５　食生活チェックシートの活用と管理栄養士からの継続的なアプローチ；株式会社アップルケアネット

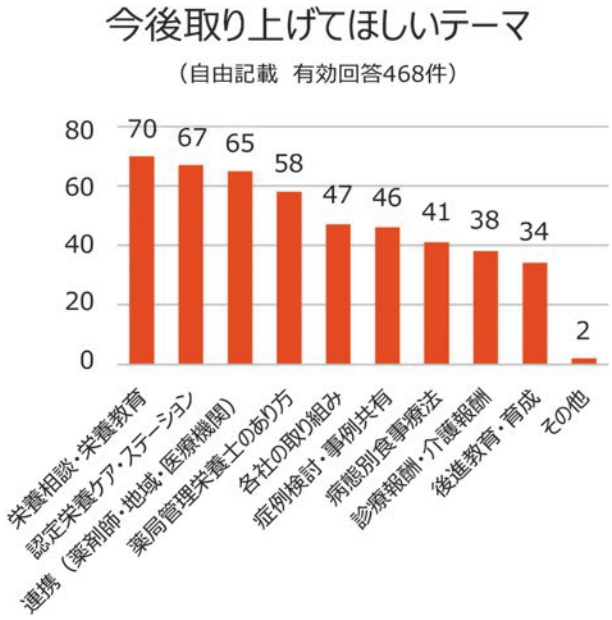
演題６　在宅版　NST!! MNST（Manmaru Nutrition Support Team）；株式会社　hitotofrom まんまる薬局

演題７　重症化予防の取り組みについて；株式会社スギ薬局

**＜アンケート結果（一部抜粋）＞**

参加者が興味関心のあるテーマは、栄養相談・栄養教育、認定栄養ケア・ステーション、多職種連携であり、情報収集・情報交換を期待して参加した方が多かった。今回は、オンラインでの開催であったため、コミュニケーションへの期待は少なかったと推察される。なお、本アンケート調査は、城西大学「人を対象とする生命科学・医学系研究倫理審査委員会」の承認を受けて実施した（許可番号：2021－08）。




薬局管理栄養士が年々増加する中、当研究会が薬局管理栄養士の生涯学習の場として機能するために、専門的知識や技術情報を提供し、参加者同士の意見交換の場を設け、新たな動機づけになるよう志向している。引き続き、アンケート調査による参加者の意見や希望を収集し、現場に必要とされる情報発信に努めていく。

【地域活動ノート】

# 城西大学ローターアクトクラブの取り組み*

## ――西坂戸を中心とした活動の報告――

田口幸多**

## 活動の概要

城西大学ローターアクトクラブ（以下、城西大学RAC）は、坂戸ロータリークラブの支援のもと、城西大学の公認サークルとして埼玉県坂戸市を拠点とした地域活動を行っている。主に、子ども食堂における交流企画やハロウィン・クリスマスイベントといった季節イベント、他のクラブとの交流といった活動を行っており、クラブのメンバーで協働しながら少しずつ活動の幅を広げている。こうした地域に向けた活動を通して、郷土愛を育むと共に、学生主体で組織・運営・計画・課題解決などを行い課題解決能力や社会人基礎力を育んできた。

キーワード：ローターアクトクラブ、西坂戸、子ども食堂、地域交流、ボランティア

## １．子ども食堂「おこちゃマイル」への参加

城西大学に隣接する埼玉県坂戸市西坂戸地区に、「おこちゃマイル」という子ども食堂がある。「おこちゃマイル」は、子どもの居場所づくりを目的として毎月第４土曜日に運営されており、我々城西大学RACの学生は、食事を終えた子どもたちとの交流企画を実施している。企画の内容は、「子どもたちの興味・関心を引き出し、楽しんでもらえる」ということを意識して月替わりで考えており、企画の準備や当日の運営、宣伝のためのポスターづくりなどを行っている。以下では、2022年度に実施してきた企画の中からいくつか紹介しようと思う。

**○美術系の企画（マーブリング、ぽんぽん版画）**

水面にインクを垂らし、その水面に浮かんだ模様を紙に写し取る「マーブリング」でうちわやしおりを作ったり、紙の半分を切りとって上からぽんぽん絵の具をつける「ぽんぽん版画」を実施したりした。

**○化学系の企画（クロマトグラフィー、スライム作り、スーパーボール作り）**

紙にインクを付けたあとに水につけてインクを色素分離させる「クロマトグラフィー」や、スライム作り、スーパーボール作りを実施した。

＊　本稿の執筆にあたって、城西大学ローターアクトクラブ顧問の庭田文近先生（現代政策学部教授）にご指導をいただいた。

＊＊　城西大学ローターアクトクラブ会長、城西大学理学部数学科３年生

**○財務省関東財務局と連携した財政教育プログラム**

関東財務局の方々を招いて、子どもたちへ向けた税金の講座や決められた予算内で公園を作るというアクティビティを実施した。税金について楽しみながら学びつつ、子どもらしい自由な発想で公園を作り、とても有意義な時間となった。

## ２．季節のイベント

１で紹介した子ども食堂の企画の延長として、10月にハロウィンイベント、12月にクリスマスイベントを実施した。

ハロウィンイベントでは、西坂戸商店街に活動の規模を広げて、城西大学RACの学生が仮装をして散らばり、スタンプラリーを実施したり、城西大学経営学部の石井ゼミにご協力をいただき、ヒーローショーの公演をしたりした。今年度で２年目の開催となるハロウィンイベントであったが、昨年度よりも多い約200名の来場者が集まり、おおいに盛り上がった。子どもたちも、友達と回って楽しみながら、順番を守ることや道路への飛び出し注意など、様々なマナーを学ぶ機会にもなった。

クリスマスイベントでは、事前に用意したお菓子などの食材を使ったパフェ作りや、たくさんの景品を用意したビンゴ大会を実施した。子どもたちそれぞれ、素敵なパフェを完成させたり、ビンゴでもたくさんの子どもたちが参加して盛り上がったりと、とても楽しいイベントとなった。

## ３．他のクラブとの交流

ローターアクトクラブは城西大学以外にもあり、今年度はそのような他のクラブとの交流活動も活発に行っていった。他クラブと交流していきながら、新しい仲間を増やしたり、どのような活動を行っているのかを聞いたりして、自分たちの活動の参考にできるような様々な経験をすることができた。特に、千葉科学大学ローターアクトクラブとは、同じ大学基盤のクラブとして親交を深めている。また、現在、埼玉西北地区の代表として、４月に開催予定の関東地区のローターアクトの会員などが集まるイベントの会議にも出席しており、より一層交流を深めていけるようにしていきたいと考えている。

## ４．最後に

ここまで、2022年度の城西大学RACの取り組みを紹介してきたが、これらは西坂戸地区の活動が中心となっている。今後は、現在の活動をベースとしつつ、より多方面に活動の幅を広げていき、より活発な活動となるよう次世代へと繋げていきたい。そして、学生にとっても、地域にとっても大切な経験となるような活動を続けていきたい。

【講演録】

# 公民館事業「かるかや大学・浅羽野」での講演から思うこと

## ――地域との繋がりの大切さ――

沼尻幸彦*

キーワード：公民館事業、地域連携、高齢者大学、薬と食品の相互作用、健康寿命

## １．はじめに

これまで、大学近隣の自治体である坂戸市や毛呂山町からの依頼を受け、公民館事業において薬に関する講演会を幾度となくさせていただいておりました。今般、坂戸市立浅羽野公民館の「令和４年度　かるかや大学・浅羽野」において、教養講座【薬と食品の相互作用】という演題で講演を行いましたので、その報告と公民館事業での講演から思うことをお話しさせていただきたいと思います。

## ２．「令和４年度　かるかや大学・浅羽野」について

かるかや大学・浅羽野は、坂戸市立浅羽野公民館事業の教室・講座のひとつであり、市内在住の60歳以上の方を対象とし、「自らの教養を高めるとともに仲間づくりや、健康管理に努める。」ことを目的とした高齢者大学です。講座は、開講式に始まり、全８回あり、軽運動を含む健康講座、人権講座、市外研修（バス旅行）、教養講座が行われ、閉講式＆懇親会で終了となります。

## ３．教養講座【薬と食品の相互作用】の概要について

当初、「薬と食品の相互作用」について講演を依頼されましたが、「薬と食品の相互作用」は、事例が極めて多く、それらの中には、相互作用のメカニズムがはっきりとしないものもあり、また、60歳以上の一般の方々を対象とした教養講座であったので、講演の前半では、「一般的な薬の話」、後半で「代表的な薬と食品の相互作用」について講演を行うこととしました。講演は、令和４年７月20日（水）13：30～15：30、坂戸市立浅羽野公民館に於いて、前半と後半との間に休憩を挟んで行いました。講演に使用した総スライド枚数は、64枚でした。

図１に講演で使用した一部のスライドを示し、その内容についての概要を説明します。講演前半の「一般的な薬の話」としては：言葉としての「くすり」及び「薬」が意味するところ、薬事法（お薬を規制する法律）の改正について、医薬品医療機器等法により規定された医薬品（市販薬）の分類について、市販薬（一般用医薬品）と病院薬（医療用医薬品）について、一般の家庭にある救急箱に常備されている医薬品（一般用医薬品）を例として（スライド１：それぞれの医薬品について説明

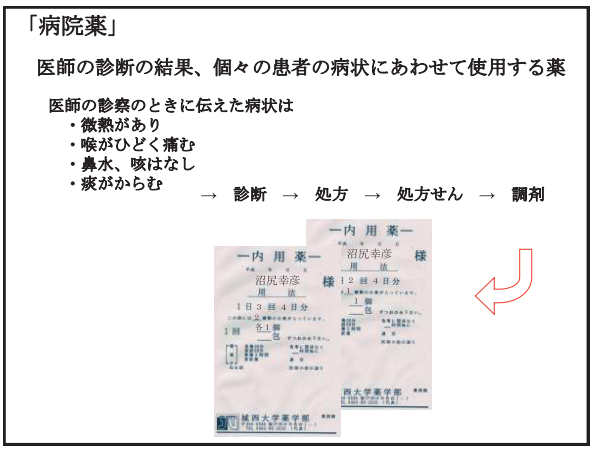
＊　城西大学薬学部薬学科教授

しました。)、痛み止め（解熱鎮痛薬）の説明例（スライド２：その他の医薬品についても添付文書をもとに説明しました。)、医薬部外品について、薬害（サリドマイド事件、風邪薬副作用）について（極めてまれではあるが、一般用医薬品についても重大な副作用があることを説明しました。)、主作用、副作用の考え方について、お薬の「見守り」と「見直し」について（お薬の安全性確保の仕組み)、「病院薬（医療用医薬品)」について（スライド３：どのようなものなのか説明しました。)、どんなお薬が処方されたか？（スライド４：個々の患者の病状に合わせた薬が処方される旨を説明しました。)、「お薬の飲み方について」簡単に説明しました。講演後半の「代表的な薬と食品の相互作用」としては：（スライド５：代表的な例をいくつか示して解説しました。)、薬とお茶の相互作用（著者が行った研究事例[2] をもとに解説しました。)、受講者からの「薬と食品の相互作用」に関しての質問回答（スライド６：以前、坂戸市から依頼を受けた公民館事業で講演を行ったときに、受講者から寄せられた質問を例として説明をしました。)

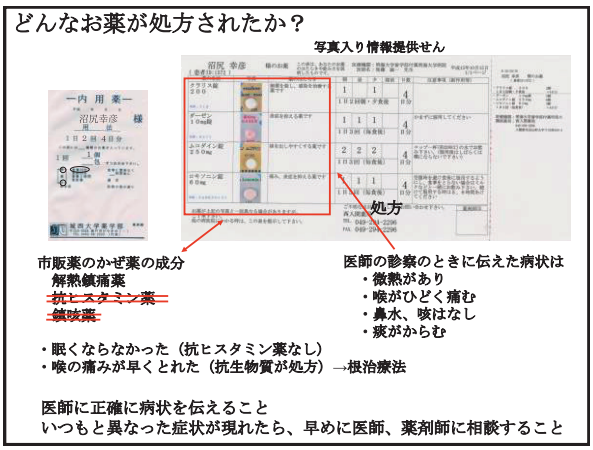
図１　講演で使用したスライド（抜粋）

1

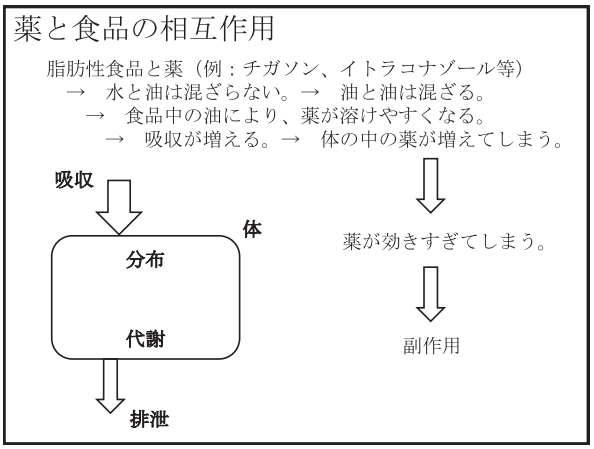
2



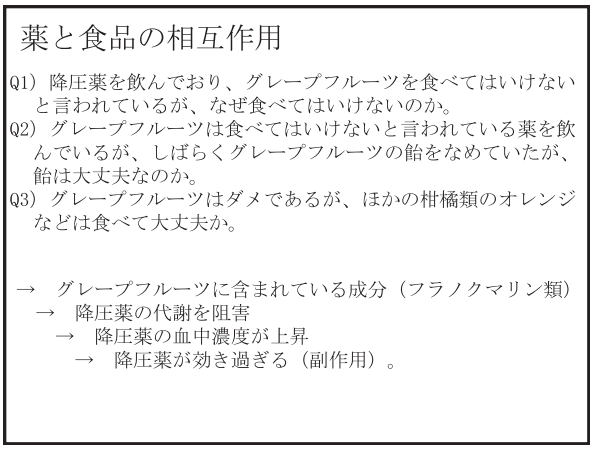

3




4




5




6

## ４．公民館事業「かるかや大学・浅羽野」での講演から思うこと

先にもお話したように「かるかや大学・浅羽野」は、市内在住の60歳以上の方を対象とし、「自らの教養を高めるとともに仲間づくりや、健康管理に努める。」ことを目的とした高齢者大学です。今般の講演では、一般の方々が対象でしたので、お薬のお話をするのに解かり易い言葉を使うこと、長時間に亘る講演であったので休憩を挟むこと、また、ところどころに冗談を挟み「笑い」を誘うことにも心がけました。受講生の方々には、熱心に聴講いただいたとともに、私の拙い冗談には、本当に良く笑って下さいました。皆さん本当に元気な受講生であり、お年を召されていても、熱心に学ぶ姿勢に感動し、かえってこちらが元気をいただいたようでした。

今般、大学の一教員として、また、薬の専門家である薬剤師として、一般の受講生に薬についてのお話をさせていただき、受講生のお薬についての理解が少しでも深まったことに微力ながら貢献でき、少しばかりの達成感を感じております。今回の講演は、大学近隣の坂戸市や毛呂山町からの依頼を受けて行いましたが、受講生に対して教養講座で、お薬についての理解を深めていただいたことのみならず、お年を召された高齢者の方々が、高齢者大学に於いて元気に学ぶ機会のお手伝いにも、僅かながら貢献できたのではないかと感じております。

これらのことから、高齢社会である日本で、ますます増えていくお年を召された方々が、いつまでも学ぶ機会を失わずに、かるかや大学・浅羽野の目的にもあるように「自らの教養を高めるとともに仲間づくりや、健康管理に努める。」ことができるよう、地域に開かれた大学として、本学が何かしらの貢献ができないでしょうか。ひとつの案としては、地域との繋がりを大切にし、公民館事業のひとつである高齢者大学への協力のみならず、お年を召された方々が、生きがいを感じて健康に生活できるような新たな「仕組み」を提案していくことが考えられると思います。このような取り組みを行うことによって、お年を召された方々が、寝たきりにならずに、日々、元気に生活できる健康寿命を延ばすことに繋がり、介護費や医療費の削減も期待でき、今後の日本社会の安定な発展に貢献できるのではないかと思いました。

## 参考文献

１）大正製薬ナロンエース　添付文書
２）沼尻幸彦・石川麻友美・秋山（山王丸）靖子・田島敬一・新津勝（2014）「お茶を摂取しているワルファリンカリウム服用患者への服薬指導について」『薬局薬学』６（１）, 93－96.

【講演録】

# 英国・アイルランド文学とパンデミック

## ――ペストとスペイン風邪を中心に――

伊東裕起*

キーワード：英文学、アイルランド文学、ペスト、スペイン風邪、公開講座

## １．はじめに

人間が逃れられない宿命の「四苦」（生病老死）の一つに数えられるように、人間は病から逃れることはできません。しかし、人間は病を、特に疫病（感染症・伝染病）を忘れてしまいやすいという指摘があります。近代日本における「結核」などのように病がロマン化される場合もありますが、多くは忘れ去られてしまう傾向にあります。WHOの推計で死者4000万人以上の犠牲者を出した「スペイン風邪」（1918年インフルエンザ）を世界は奇妙にも忘れていました。日本の内務省の公式統計でも、この病は（内地だけで）38万8727人の命を奪った（現在の人口に換算すると、100万人前後が死亡したことになる）のですが、日本においてもその疫病の記憶は薄いでしょう。また、14世紀の欧州で7500万人～２億人の命を奪い、「疫病の王様」とされるペストさえも忘れられていたという事実をご存じでしょうか。ペストに「黒死病」の名がついたのは18世紀であり、本格的に研究が始まったのはなんと19世紀コレラの流行の際なのです。また、幕末の日本で猛威を振るい、江戸だけで約３万人死亡し、その後の攘夷運動にも影響を与えたコレラの記憶も薄れています。その記憶はアマビエを含む妖怪の流行や疫病除けとしての三峯神社信仰に名残を留めますが、しかしコレラそのものの記憶は薄れていると言えるでしょう。

では、なぜ人は病を、特に疫病を忘れるのでしょうか。自らがスペイン風邪（本講演では歴史用語としてこの語を用います）に罹患し、その後も後遺症に苦しんだヴァージニア・ウルフは、そのエッセイ「病むことについて」で、病を中心的なテーマとして扱っている文学が少ないという問題を論じています。彼女は言います。「病気が愛や戦いや嫉妬とともに、文学の主要テーマの一つにならないのは、たしかに奇妙なことに思われる[1]」。確かにウルフの言うように、病、特に疫病を扱った作品は多くありません。しかし、文学だからこそ保ちえた疫病の記憶があり、文学だからこそ伝えることができるものがあるのではないでしょうか。直接的に病を扱っていなくても、その作品の背景に病の記憶は眠ってはいないでしょうか。今回の講演では、ペストおよびスペイン風邪に焦点を当て、英国文学における病の記憶を探っていきます。取り上げる作品は講演の時間（と紙面）の都合上、ペストに関連してウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』（初演1595年前後）、スペイン風邪に関連してW. B. イェイツ「再臨」（執筆1919年、発表1920年）、その百年後に執筆・発表されたエ

---

＊　城西大学語学教育センター助教

1　ヴァージニア・ウルフ著，川本静子編訳（2020）『病むことについて（新装版）』みすず書房. 73－4.

マ・ドナヒュー『星のせいにして』（執筆2019年、発表2020年、翻訳2021年）の３作品となります。

## ２．ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』

『ロミオとジュリエット』はウィリアム・シェイクスピアによって書かれ、1595年ごろ初演された劇であり、世界で最も有名なラブストーリーのひとつとも称されるものです。対立する２つの家の男女が恋に落ち、悲劇的な最期を遂げる物語として知られますが、実はこの作品の背景にはペストの記憶が存在しているのです。

ペストとはペスト菌によって感染する病であり、主にネズミノミによって媒介されます。また、ペスト菌に感染した動物の体液や患者からの飛沫によっても感染します。大きく分けて「腺ペスト」（ノミに刺された場所に関係したリンパ節にペスト菌が感染したもの。リンパ節が大きく腫れあがり、高熱や皮下出血で黒ずむ)、「敗血症型ペスト」（傷口から直接ペスト菌が入った場合。ショック症状としてリンパ節の症状なしで全身が黒ずむ)、「肺ペスト」（肺に直接ペスト菌が入った場合であり、重篤な肺炎となる）の３つに分けられますが、かつては腺ペストで致死率50～60％、肺ペストで致死率90％以上という恐ろしい病でした。14世紀の欧州でのパンデミックは7500万人～２億人の命を奪い、後に「黒死病」と呼ばれました。現在でも英語で “the plague”「あの疫病」と言えばペストを指す「疫病の王様」です。

ウィリアム・シェイクスピアが生きた時代（1564～1616年）は、ペストの流行が３度繰り返された時代でもありました（1563～64年、1592～93年、1603～11年)。彼が生まれた1564年には故郷ストラトフォード・アポン・エイボンで町民約2000人のうち237人死亡したとされます。また、その時代は演劇が人気であると同時に、激しくバッシングされた時代でもあります。当時は病と宗教的罪が結びついて理解されていて、演劇は罪と堕落の原因であると同時に疫病の原因であると見做されていました。ロンドンにおいて週に死者30人以上が出た場合は公演禁止とされ、劇作家と劇団の苦難の時代でもありました。シェイクスピアはこのような時代に活躍した劇作家なのです。

さて、ここで『ロミオとジュリエット』のおおまかなあらすじを確認しておきましょう。イタリアのヴェローナという街にモンタギュー家とキャピュレット家という対立する二つの家がありました。モンタギュー家の一人息子ロミオは友人とキャピュレット家の仮面舞踏会に出席し、そこでモンタギュー家の一人娘ジュリエットと出会います。二人は熱烈な恋に落ちますが、二人の家は対立している間柄です。修道士ロレンスは家同士の和解のため、二人を秘密裏に結婚させます。しかしロミオの親友マキューシオがキャピュレット家の人間に殺され、ロミオが仇を討ちます。ロミオは殺人罪により追放刑となり、ジュリエットは親戚と結婚させられることになってしまいます。ロミオ以外と結婚したくないジュリエットに、修道士ロレンスは仮死状態になる薬を使うことを提案します。これで親戚を欺けると彼女たちは思いましたが、とある理由によって連絡がうまくいかず、ジュリエットが死んだと思ったロミオは彼女の傍で自殺してしまいます。ジュリエットは薬が切れて目覚めますが、ロミオの後を追って自ら命を絶ちます。この劇はこのような流れの物語ですが、なぜ連絡がうまくいかなかったのでしょうか。

ロレンスの手紙がロミオに届かなかった原因、悲劇の直接的なきっかけは、連絡役の修道士がペス

トの感染疑いのために隔離されたからです。松岡和子の訳で、５幕２場を引用しましょう。

**ジョン**　実は、同門の修道僧を探し
　道連れになってもらおうといたしまして。
　ちょうど町の病人を見舞っているところを
　尋ね当てたのですが、町の検疫官に
　我々二人が伝染病患者の出た家にいたとの疑いをかけられ
　戸には封印をされ、一歩も外に出られなくなりました。
　そんな訳で足止めを食ってマントヴァへは行かずじまい。
**ロレンス**　では、私の手紙は誰がロミオに？
**ジョン**　届けることができずに――まだここに――
　そのうえ、こちらへお返ししようにも
　みな感染を怖がって使いの者も見つかりませんで。[2]

これが悲劇のひとつの原因です。もしペストのパンデミックがなければ連絡役は隔離されず、手紙はロミオのもとに届き、二人が命を落とすことはなかったでしょう。この戯曲におけるペストは舞台装置としての側面が強いのですが、それでもこの設定が観客に自然に受け入れられるほど、ペストは彼らにとって身近なものだったのでしょう。

さて、このシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』には、いわゆる元ネタが存在します。それは、『ロミウスとジュリエット』（1562年初版）という、アーサー・ブルック作の物語詩です。これはイタリアの物語の翻案であり、さらに原案は遡れるのですが、このバージョンですでにペストについての言及があります。ブルック版でも、やはりペストの隔離で手紙が届かず、二人の恋人は死ぬのです。そうすると、シェイクスピアのオリジナリティはどこにあるのでしょうか。それは、ペストの恐怖が実際の病にあったのか、病の疑いにあったのかという違いです。元ネタのブルック版では、修道士が実際にペスト患者の家に行ったことによって隔離されるのですが、シェイクスピア版では、ペスト患者ではなかったにも関わらず、病人を見舞ったらペスト患者のもとに行ったと疑われて隔離されるのです。この、感染「疑い」の持つ力、恐怖が人を動かす力に対するまなざしは、さすがシェイクスピアといったところです。

この戯曲に登場する次のペスト表象は、ロミオの親友マキューシオの死に際の言葉です。マキューシオはシェイクスピアオリジナルのキャラクターであり、彼の独創性が光る部分でもあります。マキューシオは殺される際、その死に際の言葉で彼はモンタギュー家とキャピュレット家の双方を呪います。その言葉を引用しましょう。

**マキューシオ**　やられた。
　どっちの家もくたばりやがれ！もうだめだ。

2　ウィリアム・シェイクスピア著，松岡和子訳（1996）『ロミオとジュリエット（ちくま文庫）』筑摩書房. 202.

やつは逃げたのか、無傷でか？

**ベンヴォーリオ**　おい、やられたのか？

**マキューシオ**　うん、ああ、かすり傷だ、かすり傷、でもこたえる。
おい、医者を呼んでくれ。

**ロミオ**　しっかりしろ、大した傷じゃない。

**マキューシオ**　まあな、井戸ほど深くはない、教会の入り口ほど広くもない。でもこたえる、効くよ。明日、俺に会いにきてみろ、はかなく墓に納まってるよ。一巻の終わりだ。どっちの家もくたばりやがれ！畜生、犬、猫、ネズミがひっかいて人間さまを死に追いやるとはな！ほら吹き、ごろつき、悪党め、一、二の三 と教科書どおりの剣法できやがる。くそ、なんだって割って入ったんだよ？　お前の腕の下から刺されたんだぞ。

**ロミオ**　為を思ってやったんだ。[3]

この「どっちの家もくたばりやがれ！」という言葉は、原文では“A plague a both houses![4]”(「両家にペストを！」）となっています。この場面で彼はこの表現を 3 回言うのです。そしてこの呪いが成就するかのように、ロミオとジュリエットは命を落とすのです。

また「どっちの家もくたばりやがれ！畜生、犬、猫、ネズミがひっかいて人間さまを死に追いやるとはな！」の部分の原文は次のようになっています。“A plague a both your houses! Zounds, a dog, a rat, a mouse, a cat, to scratch a man to death![5]”この部分には、ペスト菌を保有した動物による傷からの感染のイメージがあります。ここは剣で刺されたときの苦しみの言葉なのですが、その傷の痛みとペストのイメージが交差しているのです。

さて、引用した原文はシェイクスピア自身が手を入れたとされる第二版のテクストに基づくものなのですが、どうやら初演では違う言葉で演じられたらしいことがわかっています。海賊版として出版され、初演の姿を残す初版では、“A pox of your houses”でした。つまり、初演では“plague”(ペスト）を避けて“pox”(天然痘または梅毒）の語が使われたらしいのです。「天然痘」も「梅毒」も凶悪な病ですが、当時、性感染症としての梅毒は揶揄としても用いられたものでした。シェイクスピア自身の意図が反映されているとされる第二版では“plague”の語となっているので、彼は「ペスト」を使いたかったのだと思われます。個人的な解釈としては、その方がリアリティがあると同時に「呪い」のイメージも強いため、彼はそうしたかったのではないでしょうか。しかし、そのリアリティゆえ、初演ではその病の名前を呪いとして使うことはできなかったのだと思われます。

いずれにせよ、もしペストのパンデミックがなければ、ロミオとジュリエットは死ななかったかもしれません。そう考えると、彼らもペスト関連死と言えるのではないでしょうか。またマキューシオの呪いも、ただの慣用句ではなく重みのあるものです。そこに、人間を超えた力による破滅の力としての疫病のリアリティがあったのです。

---

3　*Ibid*., 113.

4　ウィリアム・シェイクスピア著，安西徹雄，石井正之助編，岩崎宗治編注（1988）『ロミオとジュリエット』大修館書店. 170.

5　*Ibid*.

## ３．スペイン風邪について

さて、続いてスペイン風邪に話を移しましょう。スペイン風邪とはどんな病であったのでしょうか。スペイン発祥でもなく、「風邪」でもないこの病は現在、「1918年インフルエンザ」などと呼ばれています。しかし今回の講座では、あくまで歴史的用語として「スペイン風邪」の呼称を用いることをご了承お願いします。

スペイン風邪はＡ型インフルエンザ（H1N1亜型）の一種によるパンデミックでした。第一次大戦中に流行開始したこの感染症の第一報告はアメリカだったのですが、戦時中のため検閲され、当時その情報は表に出ることはありませんでした。皮肉なことに中立国だったスペインが情報を出していたため、この病は「スペイン風邪」の名で呼ばれることになったのです。当時の世界人口（18億～19億）の３割近くが感染したこの病は一般的なインフルエンザと違い、働き盛りの25歳～35歳の死亡率が高いものでした。全世界で５億人感染、死亡者数は4,000万（WHO）～１億人以上とも言われています。日本の内務省統計で感染2380万4673人、38万8727人死亡、速水融の統計では内地45.3万人死亡とされています。繰り返しますが、現在の人口に換算すると日本でも100万人前後が死亡したことになります。

現在でこそスペイン風邪の原因がＡ型インフルエンザであったことがわかっていますが、当時は原因が分かっていませんでした。インフルエンザのウイルスの発見が1933年であり、当時は謎の病だったのです。第一次大戦で戦場に放置された死者の遺体から発生した病や生物兵器説などが当時囁かれていたのです。

「インフルエンザ」の症状を起こす病原体として、当時分かっていたものは19世紀末にリヒャルト・ファイファー（および北里柴三郎）が発見した「インフルエンザ桿菌」（通称「ファイファー桿菌」）だけでした。これは現在HIBと呼ばれているもので、通常のウイルス性のインフルエンザとは別の病です。当時ウイルスが発見されていなかったため、当時の医学者はこのHIBのワクチンを作るのが精いっぱいでした。病気の原因が異なっていたためか、当時の「スペイン風邪ワクチン」は効かなかったようです。

スペイン風邪を治すために多くの人々が用いたものにキニーネ（マラリアの特効薬）がありましたが、効果があったかは不明です。アイルランドの場合、薬として最も用いられたものはウイスキーでした。また社会不安の世の常か、当時も多くの怪しげな薬や民間療法、加持祈祷が流行したのでした。

スペイン風邪の流行は新型コロナウイルスと違い、短いものでした。英国やアイルランドの場合第一波は1918年夏（感染力・高、死亡率・低）、第二波は1918年秋～冬（感染力・低、死亡率・高）であり、第三波を1919年春に迎えて収束しました。日本の場合は「前流行」として1918年に第一波を迎え、「後流行」として1920年に第二波を迎えました。このスペイン風邪により、いわゆるパンデミックの風景が誕生しました。マスク、手洗い、消毒の推奨、人混みの回避や風邪様症状時の外出自粛、学校の休校、興行の中止、ワクチンの是非についての論争などです。

この病に多くの有名人が感染しました。日本首相である原敬、スペイン国王アルフォンソ13世、イギリス首相ロイド・ジョージ、アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソン、アメリカ海軍次官（後大

統領）フランクリン・ルーズヴェルトなどを始め、ウォルト・ディズニーやマハトマ・ガンディー、フランツ・カフカなどが感染しました。エドヴァルド・ムンクは「スペイン風邪に罹患した自画像」を残しましたし、ギヨーム・アポリネールは一家揃って命を落としました。その他イギリスの作家ではT. S. エリオット、ヴァージニア・ウルフ、D. H. ロレンスは感染後に後遺症に苦しみ、コナン・ドイルは息子と弟を失い、心霊主義への傾向を強めました。

その他にも芥川龍之介や斎藤茂吉、与謝野晶子、などなど…このような著名人の感染者リストは挙げればきりがありませんが、注目すべきなのは後遺症を訴える記述が多いことです。先に挙げたウルフの代表作『ダロウェイ夫人』の主人公も、スペイン風邪の後遺症に苦しむ女性です。また同時期に「嗜眠性脳炎（エコノモ脳炎）」という奇妙な病が流行し、後遺症の一種として扱われたりもしましたが、関連性は不明です。そのような後遺症は第一世界大戦の戦争神経症（シェルショック）と同じくらい社会に影響を与えたはずですが、しかしそれでも世界はこの病を忘れていました。人類は病を忘れやすいものとはいえ、なぜこのような状況になってしまっているのでしょうか。

なぜスペイン風邪が忘れられていたか、このことを最初に問い直したのがアルフレッド・W・クロスビーです。彼はアメリカの事例を分析しましたが、その結論は以下です。１つ目の理由は、人々の関心が第一次大戦の方に向いていたことです。この病は戦争より多くの死者を出しましたが、戦争の一部として扱われていたのです。２つ目の理由は、多くの人が感染した一方で、死亡率が高かったわけではないということです。結果として多くの命を奪ったのですが、皆が亡くなったわけではありません。そのため、罹っても治る病であるという体験を多くの人が共有することになってしまったのです。また症状が風邪と似ている部分があったため、風邪ではないが「風邪」扱いされてしまったことも大きいと言えるでしょう。これは新型コロナウイルス感染症とも共通している要素です。３つ目の理由は、流行が約１～２年と短期間で終わったことです。４つ目の理由としてクロスビーは著名人の命を奪わなかったことを挙げていますが、これはそうとも言えないのではないかと思われます。

では日本の場合はどうでしょうか。速水融はクロスビーの挙げた理由に加えて、次の理由を挙げています。１つ目は大正時代中期という日本史上の転換期であったことです。当時は大正デモクラシーおよび急速な工業化の時代であり。国際的に見れば当時の日本は戦勝国かつ列強の一員となるなど、世の中が急速に変わりつつある時でした。２つ目の理由は、この病の流行後まもなく関東大震災が東京を襲い、その後も昭和期の戦争の時代が続いたことが挙げられています。

一方、これから見ていくアイルランドの場合はどうでしょうか。イダ・ミルンの分析では、クロスビーの挙げた理由に加えて、アイルランドの独立期の激動の時代であったことが一番の理由として挙げられています。第一次大戦終結直前からこの病は流行したのですが、パンデミック中の1919年に独立戦争が勃発、南はアイルランド自由国として独立しましたが、北アイルランドは英国の一部として留まり、南では内戦が勃発します。そのような混乱した時代において、病は記憶されづらかったということです。２番目の理由は、貧困国であったアイルランドでは、もともと病気による死亡率が高かったことです。病に罹りやすく、罹れば命を落とすのが日常だった当時のアイルランドにおいて、新たな病がそこに加わったとしても、それは記憶されづらかったのでしょう。そして３つ目の理由が、アイルランドにおいて第一次世界大戦について論じることがタブー視されていたためです。当時

英国領だったアイルランドでは英国軍に従軍する若者は多く、必ずしも否定的に見られていたわけではありませんでした。しかしアイルランド自由国の独立後は、英国軍に従軍したことは裏切り行為として否定的に見られるようになりました。デクラン・カイバードによれば、15万人のアイルランド人英国兵の記録が消されていたということです。また近年まで第一次大戦の戦没者の慰霊を行うのは難しかったのです。第一次大戦の死者がそのように忘却されるのなら、そこに含まれることもあるスペイン風邪の死者を忘却するのも不思議なことではないでしょう。

このようなスペイン風邪の忘却の指摘は、文学研究にも新たな視座をもたらしています。第一次大戦後に起こった前衛文学運動をモダニズム文学と言い、既存の価値観が破壊された時代に新たな表現を模索しました。このモダニズム文学とスペイン風邪の関係を2019年にエリザベス・アウトカが指摘したのです。モダニズム文学の独自要素のすべてがスペイン風邪のせいだと言い切るのは乱暴ですが、第一次大戦の影響は論じながらそれ以上の死者を出した疫病に触れないのは確かに不十分だったのは確かでしょう。本講演では、モダニズム文学の代表作の１つでもあるW. B. イェイツの詩「再臨」と、それが構想された時期、スペイン風邪パンデミック下のダブリンを舞台にした現代小説、エマ・ドナヒュー『星のせいにして』を見ていくことにします。

## ４．W. B. イェイツ「再臨」

W. B. イェイツは1923年にノーベル文学賞を受賞したアイルランドの詩人、劇作家であり、アイルランドの文化的独立を目指した「アイルランド文芸復興運動」のリーダーです。アイルランド自由国独立後は上院議員も務め、「20世紀における英語圏の最大の詩人のひとり」（T. S. エリオット）、「イェイツが国を発明し、それをアイルランドと呼んだ」（デニス・ドナヒュー）などと讃えられる人物です。なお、そのイェイツが死ぬ間際のイェイツが校正した最終版の詩集*The Poems of W. B. Yeats*（サイン入り350部限定出版）が城西大学水田記念図書館に所蔵されています。これは大変貴重なもので、日本の大学では城西大学と実践女子大学の２校しか所蔵していません（しかも城西大学のものは非売品ナンバー（366）です）。本講演では貴重なこの詩集を用いて朗読をさせていただきます（注：貴重書なので、図書館でも通常は貸出できません）。

今回扱うイェイツの詩は「再臨」というものです。「再臨」とは『ヨハネの黙示録』などに記されたキリスト教の信仰です。この世の終わりにキリストが天から再臨し、この世を消し去り、生者と死者を裁く、というものです。その再臨の兆しとして、戦争や疫病、天災など、いわゆる黙示録の災いが起こる、とされています。イェイツの「再臨」とは、キリストではなく反キリストたる荒々しい野獣が生まれるということ、現在の文明とは逆の文明が生まれるということです。キリスト教における「再臨」が天からのもの、地上を超越したものであるのに対して、イェイツの「再臨」は天から来るのではなく「生まれる」というものです。その反キリストがどうやらキリストが生まれたベツレヘムで生まれるように思われるというその書きぶりは、当時の不安に満ちた世相を反映していると解釈されてきました。特に多いのが、ファシズムの誕生の予感であるという解釈です。

さて、同時期のヨーロッパに目を向けてみましょう。1917年に始まったロシア革命は世界初の共産主義国家を建国し、1918年のドイツ革命は第一次大戦の終結を早めました。その後1919年にはド

イツで共産主義者のスパルタクス団が蜂起し、1922年にはロシア内戦が勃発、日本もシベリア出兵を行いました。同年にはイタリアでムッソリーニがローマ進軍を行いファシスト党の政権を樹立、翌年にはドイツでヒトラーがミュンヘン一揆を起こします。共産主義かファシズムか、二極化しつつ混迷を深めゆく世界でした。この詩はそのような社会不安を捉えたものとされてきたのです。水田記念図書館所蔵の1949年版イェイツ詩集で朗読し、その後高松雄一の訳で引用してみましょう（和訳のみ掲載します）。

しだいに広がりゆく渦に乗って鷹は
旋回を繰り返す。鷹匠の声はもう届かない。
すべてが解体し、中心は自らを保つことができず、
まったくの無秩序が解き放たれて世界を襲う。
血に混濁した潮が解き放たれ、いたるところで
無垢の典礼が水に呑まれる。
最良の者たちがあらゆる信念を見失い、最悪の者らは
強烈な情熱に満ち満ちている。

たしかに何かの啓示が迫っている。
たしかに《再臨》が近づいている。
《再臨》！ その言葉が口を洩れるや
《世界霊魂》から出現した巨大な像が
私の視界を掻き乱す。どこか沙漠の砂の中で
ライオンの胴体と、人間の頭と、
空ろな、太陽のように無慈悲な目をしたものが
のっそりと太腿を動かしている。まわりに
怒り狂う沙漠の鳥どもの影がよろめく
ふたたび暗黒がすべてを閉す。だが、今、私は知った、
二千年つづいた石の眠りが
揺り籠にゆすられて眠りを乱され、悪夢にうなされたのを。
やっとおのれの生れるべき時が来て、ベツレヘムへ向い。
のっそりと歩みはじめたのはどんな野獣だ？[6]

イェイツの個人神話ではこの世のすべてを二重らせん「ガイアー」で表現するのですが、この詩では「始原性のガイアー」（民主主義的・キリスト教）が衰え、「対抗性のガイアー」（貴族主義的・ギリシア的）が力を増す時代、反キリストとしての荒々しい獣が、知性の象徴たるスフィンクスの装いで現れようとしています。これは大衆的でない、キリスト教的でない、古代ギリシアやローマのよう

6　ウィリアム・バトラー・イェイツ著，高松雄一訳（2009）『対訳イェイツ詩集（岩波文庫）』岩波書店. 148－49.

な偉人の知性で導かれる文明の到来を象徴しています。悪魔的・野獣的ともいえる「超人」が暴力も用いながらも強力に国をまとめ導いていくというヴィジョン、それは実際、ファシズムとして具現化されていくことになったのでした。

草稿などを見ても、おそらくそれは正しい解釈だと思われます。しかし、時代背景と照らし合わせてこの詩を解釈するとしても、世界的な大事件が見落とされている、そういった指摘が2019年にアウトカによってなされました。つまり、スペイン風邪の影響です。パトリシア・マーシュの推計によれば、スペイン風邪はアイルランドで32917人の死者（当時人口約400万人）を出しました。これは独立戦争と内戦の死者を合わせたものよりずっと多いものです。貧富を問わずウイルスは襲いましたが、特に劣悪なスラムや繊維工場などで感染拡大しました。第一次大戦の戦勝パレードや、工場と村を往復する繊維産業がその感染を広げました。さて、この詩にスペイン風邪の影響があったというのなら、作者イェイツとスペイン風邪はどのような関係にあったのでしょうか。

イェイツ自身はスペイン風邪に罹患しませんでした。しかし、彼はアベイ座という劇場の経営者の一人でした。今回の新型コロナウイルス感染症のように、スペイン風邪のパンデミックは劇場ビジネスを襲いました。ダブリン市は劇場の閉鎖を要請したのですが、同市の劇場は一日２回消毒を行うことと、子どもの入場を規制することにより、上演を継続したようです。アベイ座の具体的な対応について資料がないか調査中なのですが、独立戦争や内戦時でも上演を継続した劇場ですので、おそらく同様の対応だったと思われます。だとしても、経済的にも精神的にもこたえるものだったでしょう。

また1918年11月、父ジョン（当時79歳）がニューヨークで危篤と電報が入ります。彼の妹がニューヨークへ向かいました。病院嫌いのジョンは入院を拒否し、やむなく個人看護師をつけて対応したそうです。直後妻ジョージ（当時27歳：妊娠中）が感染し危篤となります。これはかなり危機的状況となり、その状態は一か月以上続きました。こちらも個人看護師をつけ、24時間個人看護を行うことになりました。先に触れましたように、スペイン風邪の特徴は25歳〜35歳の致死率が高いというものです。加えて妊婦の場合、合併症の発生率が約50％増すというデータもあります。父も妻も最終的には命を取り留めたものの、イェイツは恐ろしい思いを味わったことでしょう。

そしてそんな中、かつての想い人が来訪するという一幕もありました。1918年、英国治安当局はドイツと陰謀を企てたという疑惑（捏造だったことが明らかになっています）でアイルランド独立運動家150名を逮捕しました。そこにイェイツのかつての想い人であるモード・ゴンもいました。彼女は逮捕・拘留され、アイルランド上陸禁止命令が出されます。しかし彼女は脱走し、赤十字の看護婦（歴史用語として「看護婦」の訳を用います）に変装してアイルランドに上陸、イェイツの家（もとはモードの家でした）に助けを求めました。かつての想い人の来訪ゆえ、彼女の頼みに弱かったかつてのイェイツなら扉を開けたかもしれません。しかし今は妻が危機的状況にあり、もしモードを家に入れれば警官が来るかもしれません。そのため彼は拒否し、扉を挟んで口論になりました。このエピソードゆえ、彼は後に民族主義者から愛国的でないと批判されることにもなりました。（一方、モードも肺炎の症状があったとのことなので、彼女もひょっとしたらスペイン風邪に感染していたかもしれません。）

さて、詩「再臨」には「血潮」と「おぼれ死ぬ」というイメージがあります。印象的なイメージなのですが、ここにスペイン風邪の記憶があるとアウトカは指摘しました。スペイン風邪で多い症状は

肺からの出血でした。それはなんと、吐血で窒息するほどだったのです。スミソニアン博物館には、穴だらけになったスペイン風邪の犠牲者の肺が残されています。またこの詩では差し迫る出産とその不安のイメージが描かれています。そう考えると、妻の感染と出産の経験が創作の裏にあるのではないか、と推測することも可能です。この詩は『マイケル・ロバーツと踊り子たち』という詩集に収録されています。イェイツの作品において、詩集の中の配列というのは非常に重要なのですが、この詩は（“That crafty demon and that loud beast / That plague me day and night[7]”）という、病のイメージがある詩行から始まる詩「悪魔と獣」の後に続き、暴風が吹き荒れる中で娘の将来に思いを馳せる詩「我が娘への祈り」の前に置かれています。このことから考えても、この詩「再臨」の背景に病と出産のイメージがあるというのは的外れではないと思われます。

さてここで「予言獣」に目を向けてみましょう。日本では件（くだん）、アマビエ、神社姫などが知られています。これらは疫病や戦乱を予言して死にますが、姿を描き持てば助かるといいます。これら「予言獣」は、意識的に民衆が噂を広める道具として、社会不安で儲ける道具として使われたこともありますが、声にならない不安の具現化として現れたという側面も否定できないでしょう。それら日本の「予言獣」だけでなく、イェイツの「再臨」の獣も、啓示を告げる異形の存在です。それは病を目の当たりにした人間の想像力が産み出したもの、病の記憶を伝えるものかもしれません。

## 5．エマ・ドナヒュー『星のせいにして』

それでは最後に、「再臨」のちょうど百年後に書かれ、出版された現代小説を見てみましょう。1918年のアイルランドにおけるスペイン風邪パンデミックを舞台背景とした小説、『星のせいにして』（原題：*The Pull of the Stars*）です。作者はエマ・ドナヒュー、アイルランド文学者デニス・ドナヒューの娘で学者・作家です。アイルランド生まれアイルランド育ちですが、現在はカナダで同性のパートナーと暮らしています。この本の日本語版の宣伝文を見てみましょう。「スペイン風邪が猛威を振るう、1918年、ダブリン。小さな産婦人科病室で、彼女たちは“生命”のために闘い続けた」「匂い、汚れ、暴力、差別、繰り返される死の感触。この小説は、今を生きる私たち看護師そのものだ」。さて、この本はどんな話なのでしょうか。

舞台は1918年10月31日～11月２日の３日間、第一次大戦中、のスペイン風邪パンデミックの最中のダブリンにある病院の＜産科／発熱＞病棟です。戦争で物資がない、人員もいない、治療法もないという極限状態の話です。その極限状態の中、様々な矛盾が露わになり、様々な差別（女性、未婚／非婚、孤児、など）が複合的に折り重なる様が描き出されます。また極限状態における女性たちの絆も描かれます。

主な登場人物を紹介しましょう。主人公はジュリア・パワーズという29歳（作中で30歳の誕生日を迎える）職業看護婦（歴史用語として、訳書も「看護婦」「職業看護婦」を用いています。戦争中はVADと呼ばれるボランティア看護婦も多くいました）です。戦争から帰って来た弟ティムと二人

7　Yeats, William Butler (1966). Peter Allt and Russell K. Alspach. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. New York: Macmillan. 399.

暮らしで、その弟ティムは戦争神経症で声が出せない状態にあります。病院自体には看護婦長や他の看護婦、シスターなどもいたのですが、スペイン風邪や戦争のために彼女一人が＜産科／発熱＞病棟を任されることになりました。孤軍奮闘する彼女のもとに教会から一人の助手が送られてきました。その女性はブライディ・スウィーニー。青白い、そばかす顔の赤毛の彼女は22歳「くらい」ですが、孤児なので正確な年齢が分かりません。幼い頃から教会の施設で虐待され続けてきた女性で、現在もその軛から逃れることができずにいました。そこに加わった力強い味方がキャスリーン・リン医師です。この小説において、彼女のみ実在の人物です。史実としてアイルランド国内で医学教育を終えた最初の女性医師で女性参政権運動家、アイルランド独立運動家です。独立のための1916年復活祭蜂起で医官・大尉を務めただけでなく、スペイン風邪の治療活動に関わり、翌年にアイルランド初の小児科およびインフルエンザ病院を開設したことでも有名な人物です。また女性パートナーであるマグダレーン・フレンチ＝アレンと共に暮らしたレズビアンとしても知られています。この３人を中心として物語は進みます。

この小説の章立ては、「赤」「茶」「青」「黒」となっています。これはスペイン風邪の症状の悪化の様子として知られていたスケールです。つまり、物語の最後に「黒」の悲劇が待っていることを暗示してもいるのです。

主な患者たちは次の４人です。＜産科／発熱＞病棟なので、全員スペイン風邪に罹患して重症となっている妊婦たちです。まずはデリア・ギャレット。彼女は裕福なプロテスタントです。続いてイタ・ヌーナン33歳。７人の子供の母（11回出産、７人存命）です。片足が不自由で、TNT火薬工場で働いています。夫はロックアウトで無職となり、軍隊に志願するも断られ、街で手回しオルガンを演奏している人物です。せん妄が激しく、ジュリアは対応に苦労します。そしてメアリー・オーラヒリー17歳。性に関する知識に乏しい人物です。そして最後がオナー・ホワイト29歳。信心深いカトリックの禁酒主義者です。

ジュリアは物語の開始前にも何人も何人も患者たちを看取ってきました。そして患者が命を落とすごとに、身に着けている懐中時計に傷をつけていきます。母親が亡くなったら丸い満月、赤ちゃんが亡くなったら三日月。「死んで生まれてきた子たちの分」は「流産の子たちも、もし日数が進んでいて、男の子か女の子か分かる時は[8]」、線を刻んでいくのです。

とある患者が亡くなった際、彼女は次のように考えました。長い引用となりますが、患者たちがどんな環境に置かれていたか、象徴的な箇所ですので、引用させてください。またこの小説では引用符がありません。

> 規定の小さな文字で両側びっしり埋められている彼女の記録の終わりを、もしも私が書くことができたなら、骨の髄まで疲労、と書いただろう。二十四歳にして五児の母親。何世代にも渡り飢餓に苦しんだ先祖を持つ痩せっぽちの娘。紙のように白い肌、充血した赤い瞳、ぺったんこの胸、ずきずきする古傷、小枝みたいな手足に、蔓のように絡みつく青い血管。アイリーン・ディヴァイン［注：冒頭部で亡くなる患者］は物心ついた時からずっと崖っぷ

8　エマ・ドナヒュー著，吉田育未訳（2021）『星のせいにして』河出書房新社. 296.

ちを歩いてきた。インフルエンザは彼女をちょいと指先で押しただけ。

いつだって休むことなく、なんとか切り詰めてダブリンの母親たちは旦那や子どものために食べ物を用意し、自分たちは食べ残しをかき集め、大量の水で薄めた紅茶をがぶ飲みして生き延びている。彼女たちがどうにか暮らすスラムは、私から見たら脈拍や呼吸数と同じくらいカルテに記入するべきものなのに、書いていいのは医学的観察の記録だけ。だから〈貧困〉と書く代わりに、〈栄養失調〉と〈衰弱〉と記す。〈妊娠回数過多〉を示すための暗号は次の通り。〈鉄分不足〉、〈動悸〉、〈背中の痛み〉、〈骨粗しょう症〉、〈失禁〉、〈静脈瘤〉、〈うつ〉、〈瘻孔〉、〈子宮頸管裂傷〉、〈子宮脱〉。[9]

ここには幾世代にもわたる社会的弱者の姿と、その弱者への最後の一押しとしての感染症があります。スペイン風邪がなくても彼女たちの命は長くはなかったかもしれません。ですが、ぎりぎりで生きている彼女たちの命を奪ったのは、やはり感染症だったのです。

そして別の貧しい患者であるイタ・ヌーナンは出産中に子どもともに死亡します。このように病は社会的弱者を追い詰めがちですが、そうでなくても病は容赦してくれません。裕福なプロテスタントの患者デリア・ギャレットの出産は死産となります。禁酒主義者のオナー・ホワイトは出産中に危険な状態となり、主人公ジュリアが緊急輸血をします。その結果、男児（口唇裂傷あり）を出産しますが、間もなく死亡します。また性的知識のない17歳のメアリー・オーラヒリーは女児を出産します。４人の妊婦のうち、母子ともに無事なのは彼女だけでした。

そこはまさに戦場でした。命が失われる戦場ではあるものの、命が産み出される戦場でもありました。第一次大戦の最中で物資も人員もなく、治療法も薬もない極限状態の中で、彼女たちの絆は深まっていきます。ジュリアとブライディはお互いに恋心を抱くようになり、夜中に病院の屋上で星を見ながら語り合い、キスをします。星空の下のロマンチックな空気の中、語り合ったことのひとつは、インフルエンザという語の語源についてでした。

見上げるとおおぐま座が目に入った。彼女に教える。

イタリアではね、病気は全部、星たちから受ける影響のせいだと思われていた――だから、インフルエンザって呼ばれてるんだって。[10]

タイトルはここから来ています。原題*The Pull of the Stars*（星がひっぱること）を『星のせいにして』と訳したのは名訳だと思います。

そして病にかかった人を非国民のように非難する広告について、ジュリアは次のように心の中でつぶやきます。

ばい菌のせいにして、埋葬されない死体のせいにして、戦争の土煙のせいにでも、気まぐれ

9　*Ibid*., 32.

10　*Ibid*., 294.

> な天気や風向きのせいにでも、万能な神のせいにでもすればいい。そうだ、星々を責めればいい。だけど、死んだ人たちを責めるのはやめて。だって、望んでそうなった人なんて、いないんだから。[11]

病になったことを自己責任にはしたくない。だからその他のものにしてしまえばいい、とジュリアは思います。自己責任論の回避として「星のせいに」してしまおう、と。しかし、もし病やその他の不幸を星のせいにするのなら、それは運命論に陥ってしまうことにもなります。

> 私たちが生まれたその日に、それぞれの将来がもう決められているなんて、私は今まで信じたことがない。星々が何かを教えてくれるならば、その点々は私たちがつなぎ、私たちが生きることで、運命が描き出されていく。
>
> でも、ギャレット夫人の赤ちゃんは、死んだまま生まれ、他にもたくさんの命の物語が、始まる前に終わってしまった。そして、生まれてきても、長い悪夢の中に生きる人もいる。ブライディやホワイト夫人の赤ちゃんのように――そんなこと、誰が命令できるのだろう。命令せずとも、そんな物語を許してしまえるのは誰？[12]

それは神様のような星の導きでしょうか。勝手に人間の運命を操り、生き死にを定めることが神様の御業でしょうか。神がいるというのなら、なぜそのような不平等があるのでしょうか？ジュリアはカトリック教徒ですが、そのようなことを思います。

そのような疑問を抱きながらも、やはり人間にどうしようもできないことは、やはりあるのでした。原因が当時まだ分からず、特効薬もなかったスペイン風邪もその一つでした。そのような場合は、「星のせいにして」やれることをやるしかないのかもしれません。

さて、先に触れたようにこの小説の章はスペイン風邪の進行度合いを表す顔色「赤」「茶」「青」「黒」となっています。星空の下のジュリアとブライディのロマンチックな会話の後、物語は暗い結末へ向かって行くのです。ジュリアが輸血をした患者オナー・ホワイトの容体が悪化し、急死します。そして子どもの命も長くないかもしれません。そこでジュリアは緊急洗礼を行うことを決意します。カトリックの信仰において、洗礼を受けずに亡くなることは恐ろしいことでした。そこで、亡くなる前にせめても、ということで、司祭でない信徒が緊急洗礼を行うことは、嬰児の死亡率が高かったアイルランドでは珍しくありませんでした。

ジュリアが輸血した母親から生まれた子です。ジュリアと、その恋人であるブライディが共に名親として、その子に緊急洗礼を行います。口唇裂傷を意味するアイルランド語（ゲール語）を基にして、聖書よりバルナバス（慰めの子、の意）と名付けます。その儀式はまるで、新たな家族を作り出す儀式のようでした。

直後、ブライディが急に倒れます。彼女は病室でスペイン風邪に感染していたのでした。スペイン

---

11　*Ibid*., 317-18.

12　*Ibid*., 301.

風邪に一度罹患して快癒し、免疫を持っていることを条件として病棟でノーマスクでいたのですが、彼女は嘘をついて働いていたのでした。その理由は、「ジュリアを助けたかったから」、だったのです。他の誰でもない、ジュリアを。その想いが彼女の命を奪うことになってしまったのです。ブライディはジュリアの腕の中で息を引き取りました。

また悪いことに、リン医師が反逆者として逮捕されます。これは実はおおよそ史実通りとなります。史実では、反逆者だとしてもスペイン風邪の治療のために必要だということでダブリン市が介入して釈放され、新たな病院を開設することになるのですが、そこまではこの小説では描かれません。

ジュリアは、ブライディの亡骸に多くの虐待の傷を見つけました。彼女は教会でひどい虐待を受けてきたのです。その一部は星空の下でジュリアに語られましたが、実際はもっとひどいものでした。（このあたりは、アイルランドのカトリック教会で1990年代以降明らかになったマグダレン修道院／洗濯所や性的虐待のことなどが筆者の心にあったのではないかと思われます。）そこで彼女の心によぎったのは、生まれたばかりのバルナバスのことでした。親を失った彼はブライディのように教会の孤児院で育てられることになるでしょう。しかし、そうなると同じように虐待されるかもしれないという不安がジュリアの胸によぎりました。そして彼女は大胆な決断をするのです。ジュリアはその子を自分の子として引き取り育てるというのです。輸血をした人物から生まれた子として、そして、最愛のブライディとの間の子として育てるという決意でした。病院側、および教会側は次のように警告します。喋れない弟との間の子、と呼ばれるかもしれないよ、というのです。ジュリアはそのような脅しを無視し、病院を辞め、その子を抱いて街の闇の中へ歩いていくのです。病院は、彼女が傷だらけになりながらも尽くしてきた場でした。しかし、彼女はそのような道を選んだのです。彼女とその幼子はその後どうやって生きていくのでしょうか。この小説の最終行は、次のようになっています。「そうして私は彼を抱えて、世界の終わりのような通りを進んでいく[13]（原文“So I carried him along through streets that looked like the end of the world[14] ”）」。闇の中を進んでいく、闇の中でも歩いていくのです。原文は“carried him along”。ここには確かに命の重みがあります。闇の中に消えていく、のでは決してないのでした。

## 6．まとめ

人は冒険を語りたがるものですが、病を語りたがらないものです。そのためか、病を中心的なテーマとした作品は多くはありません。しかし「生病老死」、病も人間の宿命、人間の一部とも言えるものです。人は病を忘れやすく、病についての記述は抜け落ちやすいものですが、記憶や記録から抜け落ちても、文学作品の表面に見えなくなっても、深層に残っていることもあるのです。また、後の時代の人がその声をくみ取り、新たな文学作品にすることもあるのです。文学だからこそ『ロミオとジュリエット』のように、病の直接の被害者ではない間接的な犠牲者を扱うことができます。また「再臨」のように、うまく言葉にできないイメージとして病の記憶を扱うことができます。『星のせいに

13　*Ibid*., 362.

14　Donoghue, Emma (2020). *The Pull of the Stars.* New York: Picador. 291.

して』のように、時代を隔てて病を取り上げ現代的なものとして扱うことができます。「見えないもの」を扱う文学だからこそ、記録に残らない感情や、記憶から抜け落ちたものを伝えることができ、また時代を超えて、テーマとして蘇らせることもできます。それが、病から逃れられない人間が手にした「文学」というものなのではないでしょうか。

（本稿は2022年度城西大学公開講座「ポストコロナ時代を生き抜くために」講演「英国・アイルランド文学とパンデミック：ペストとスペイン風邪を中心に」に加筆修正を行ったものである）

## 参考文献


Crosby, Alfred Alfred Worcester (2003). *America's Forgotten Pandemic: The Influenza of 1918*, Cambridge: Cambridge UP. アルフレッド・W・クロスビー著（西村秀一訳・解説）（2020）『史上最悪のインフルエンザ：忘れられたパンデミック（新装版）』みすず書房.

ダニエル・デフォー著（武田将明訳）（2017）『ペストの記憶（英国十八世紀文学叢書）』研究社.

Donoghue, Emma (2020). *The Pull of the Stars.* New York: Picador.

－－－. エマ・ドナヒュー（吉田育未訳）（2021）『星のせいにして』河出書房新社.

国立感染症研究所（2006）「インフルエンザ・パンデミックに関するQ＆A」国立感染症研究所.

国立感染症研究所（2019）「ペストとは」国立感染症研究所.

速水融（2006）『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ：人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店.

石塚久郎監修（2021）『疫病短編小説集』平凡社.

Marsh, Patricia (2021). *The Spanish Flu in Ireland: A Socio-Economic Shock to Ireland, 1918-1919.* New York: Palgrave.

道行千枝（2022）「シェイクスピアと疫病再考：『ロミオとジュリエット』と『アテネのタイモン』を比較して」『福岡女学院大学紀要人文学部編』32号. 1－28.

Milne, Ida (2018). *Stacking the Coffins: Influenza, War and Revolution in Ireland, 1918-19.* Manchester: Manchester UP.

永江朗編（2021）『文豪と感染症：100年前のスペイン風邪はどう書かれたのか』朝日新聞出版.

Outka, Elizabeth (2019). *Viral Modernism: The Influenza Pandemic and Interwar Literature.* New York: Columbia UP.

ウィリアム・シェイクスピア著（安西徹雄，石井正之助編，岩崎宗治編注）（1988）『ロミオとジュリエット』大修館書店.

－－－ 著（松岡和子訳）（1996）『ロミオとジュリエット（ちくま文庫）』筑摩書房.

Spinney, Laura (2017). *Pale Rider: The Spanish Flu of 1918 and How It Changed the World.* London: Vintage.

高橋敏（2020）『江戸のコレラ騒動（角川ソフィア文庫）』角川書店.

鶴田学（2022）「感染症の時代に読み直す『ロミオとジュリエット』」『英文学研究（支部統合号）』14. 231－239.

内海孝（2016）『感染症の近代史（日本史リブレット）』山川出版社.

ヴァージニア・ウルフ著（川本静子編訳）（2020）『病むことについて（新装版）』みすず書房.

ウィリアム・バトラー・イェイツ著（高松雄一訳）（2009）『対訳イェイツ詩集（岩波文庫）』岩波書店.

Yeats, William Butler (1949). *The Poems of W. B. Yeats.* 2vols. London: Macmillan.

--- (1966). Peter Allt and Russell K. Alspach. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats.* New York: Macmillan.

【講演録】

# 第41回（2022年度）城西大学公開講座

## ――新型コロナウィルスとは？――

森田勇人*

キーワード：ウィルス、免疫、抗体、ワクチン

## １．はじめに

今回、コロナウィルス（COVID-19）が流行し始めてからも３年目に入り、感染予防や拡大防止に努めるだけでなく、COVID-19との共存を考えなければ世界経済が成り立たなくなる状況となってきた。このような「With　corona」を実践する社会生活の在り方を模索するコロナ対策の新しいフェーズに入るに至り、１）個人レベルでのCOVID-19の感染予防、２）社会活動におけるCOVID-19の感染拡大防止という２つの面からCOVID-19についての知識を個人と社会が身に着けることが必須となってきている。今回の第41回（2022年度）城西大学公開講座の開催テーマである「ポストコロナ社会を生きぬくために」において、先にご講演をされた５人の先生方は、COVID-19存在下の社会において要求される生活支援体制（社会保障、AIによる新技術導入等）やこれまで人類がいくつかのパンデミックを克服してきた経験から学んだCOVID-19蔓延に対する対策についてご紹介された。そこで、今回私はCOVID-19そのものの分子生物学的特徴を掘り下げることで、これまで人類が経験してきたウィルスとの相違点の観点からCOVID-19に対する特効薬としてのワクチン製造の困難さと、その困難さを克服するための人類の新たな英知（mRNAワクチン）についてかみ砕いて紹介することとした。

## ２．講演内容

今回は以下の２つの観点から講演を行った。

１）　ウィルスとは何か？

２）　人間の免疫機構とウィルスとのかかわり

１）については、ウィルスは、宿主（感染先）がいないと増殖できない生物と物質との中間的な存在であり、タンパク質からなる外骨格の中にウィルスの遺伝子情報（DNAまたはRNA）が含まれた構造をとっていること、ウィルスの遺伝子情報は宿主に感染後、宿主の遺伝情報複製、遺伝子発現機構を利用して宿主内で複製、発現され、自己の増殖を図ること、自己の遺伝子情報がDNA上に保持されているかRNA上に保持されているかがウィルスの変異の速度に大きく関係があることなどを説明した。[1)]

＊　理学部化学科分子分光学研究室。教授

２）については、外界からの侵入物質としてのウィルスが人間の体の免疫機構でどのように認識され、排除されるかの流れを生まれながらに人間の体に備わっている「自然免疫」と後天的に記憶する「獲得免疫」の観点から説明した。

今回COVID-19の感染予防では、COVID-19の表在タンパク質であり、人の細胞への侵入に重要な働きをするスパイクタンパク質に対する中和抗体産生能力をいかに早く高め（mRNAワクチンは人間の体の中でスパイク蛋白質を生産させることで中和抗体産生能力を高めることを目指している）、その能力を長期間にわたって持続させるかが大きな課題となっている。

一方でCOVID-19はRNAウィルスであるため、その変異の速度がDNAをゲノムに用いる微生物の数千倍に達すると考えられており[2)]、それが昨今のデルタ株やオミクロン株などの変異株の短期間での出現（それぞれスパイクタンパク質の構造がオリジナル株から変化している）につながっている。

以上の説明を通し、COVID-19に対するワクチン製造がなぜ困難であるかの概要について、理解を深めることを目指した。

## ３．受講者からの質問

２．で報告した講演内容に対し、受講した方々からの複数の質問が出されたが、その内容をまとめると以下の２点となった。

１）核酸（DNAやRNA）とタンパク質との関係はどのようになっているのか？

２）感染の原因となっているタンパク質の構造がわかってきているのにどうして感染を防ぐ薬の設計がすぐにできないのか？

１）については、ウィルスは自分だけでは生きていくことができないということはわかったが、DNA、RNA、タンパク質などの言葉についてはほとんどわからなかったというご意見もある一方で、DNAを遺伝情報源として利用するウィルスとRNAを利用するウィルスとの違いについて質問される方もいらっしゃったことから、昨今情報番組などで生体（細胞）中での遺伝情報（DNAまたはRNA）からタンパク質が作り出されるシステムについての情報が頻繁に紹介されているものの、視聴者側の理解には大きな開きがあると感じた。

そこで、今後はこのようなバックグラウンドの開きを縮めるために、講演の話題内容の理解に必要な基本事項の説明を最初にまとめて話すだけでなく、話題を構成するセクション毎にも挿入するとともに基本事項の確認の際には話すペースを落とすなどの工夫を行う必要があると感じた。

２）については、やはり現場で分子設計を行っていないとつかみにくい時間的感覚が大きな要因となっているのではと感じた。特に、一部のウィルス感染を題材とした映画などで、原因ウィルスに対する抗体を持った感染源の動物を見つけ出したあと、その血清から大勢の感染者に対するワクチンが数日中に作られてハッピーエンドなどというストーリーを目にすることがあるが、これなどは実際にはほぼありえない状況である。現実には、抗体を持った動物が見つかり（私が見たことがある映画では原猿であったが）、そこから血清を分離できたとして、人体への投

与が可能な抗体製剤を作成するまでには最短でも数ヶ月はかかると考えられる。

実際にCOVID-19ウィルスの表面に存在し、人の細胞への侵入に重要な働きをするスパイクタンパク質はかつて流行したSARSウィルスのそれとは異なる立体構造をとることが明らかになっているが、その構造の差異の情報に基づきCOVID-19に選択的に作用する薬剤の分子設計は、現時点では計算予測のみではほぼ不可能で、いくつかの候補分子に対しての動物実験を通した薬効評価が不可欠である。さらに、設計した薬剤分子の安全性を担保するために複数のフェーズ試験をパスする必要があり、通常の開発スピードで進めば１つの薬が開発から承認までのプロセスは数年に及ぶことになる。その中にあって今回のCOVID-19に対する複数のワクチン開発から製造承認までの時間間隔は異例に早かったといえる。

このように、基礎研究成果が社会的利益として還元されるまでには多くの時間と労力が必要であることの理解を高めることも、今後このような公開講座の場をとおした社会的コンセンサス形成の上で必須であると感じた。

## ４．講演を終えて～今後の研究方針～

先の質問の項でも述べたように、感染や免疫の本質は、抗原分子と抗体分子との間の分子認識でありその認識機構を人為的に制御することができれば感染の制御は決して難しいことではない。ただ、多くの変異ウィルス間では抗原分子の全体像がほとんど似ていて、相互作用する部位の局所構造（抗原提示部位）が微妙だが決定的に異なることがその特異的反応性をもたらしている。つまり、その局所構造の違いを検出してそれを認識する手段の開発が今後のCOVID-19の特効薬開発のキーとなると考えられる。このような分子一つ一つの局所構造を制御する技術開発において私達化学系の分野の構造解析・分子設計の技術は大いに役立つことが期待されている。

本学ではその一環として2022年12月にクライオプローブを装備した600 MHz FT-NMRが機器分析センターに導入された。この装置は、医療用MRIの基礎研究用版ともいうべきもので、生体内の様々な分子の微細な構造を高感度に検出することができる。私自身、本学に2015年12月に赴任して以来、他大学との共同研究を通して、２つの異なるタンパク質について生体中のモデル系における立体構造を原子レベルで解き明かすことに成功した。今後、このような構造解析技術が本学の多くの研究室で利用されるようになり、COVID-19の感染、発症機構に関わる種々のタンパク質に関する多くの知見が得られれば、城西大学から新たなCOVID-19の新規特効薬を提案することができるようになることも決して夢ではない。

今回の公開講座を通して城西大学が地域、ひいては世界全体に貢献する新しい技術開発を目指していることの一端を本学周辺地域の皆様にご理解いただくことができたなら、講演者の一人としてこの上ない喜びである。

そして今後とも、自身の学術的興味のみにとらわれず、その先にある地域社会ひいては世界全体へ人材教育の観点からも貢献することを常に念頭に置きつつ、日々の研鑽を積んでいきたいと決意を新たにした。

## 参考文献

１）武村政春（2013）『新しいウィルス入門』，ブルーバックス（講談社）
２）佐藤裕徳，横山　勝（2005）「２．RNAウィルスと変異」『ウィルス』, 55（２）, 221－230.

# 2022年度　城西大学・城西短期大学の地域活動

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 埼玉県 | 埼玉県後期高齢者医療懇話会委員 | 伊関友伸（経営学部教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 全国健康保険協会埼玉支部健康づくり推進協議会委員 | 伊関友伸（経営学部教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県薬物乱用対策推進会議委員 | 井上裕（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県ジェネリック医薬品安心使用促進協議会委員 | 井上裕（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県スポーツ推進審議会委員 | 竹末愛瞳（経済学部勝浦ゼミナール４年生） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県教育委員会<br>埼玉県文化財保護審議会委員 | 谷口英嗣（理学部教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 公益財団法人いきいき埼玉 埼玉県シルバー人材センター連合事業推進計画（中・長期）検討委員会委員 | 塚本成美（経営学部教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県保健医療部<br>埼玉県脳卒中・心臓病その他の循環器病対策推進協議会 脳卒中部会委員 | 水野文夫（薬学部医療栄養学科特任准教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 埼玉県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会委員 | 水野文夫（薬学部医療栄養学科特任准教授） | 2022年度 | |
| 埼玉県 | 大学の開放授業講座 | 城西大学・城西短期大学キャリアサポートセンター | 2022年度 | 埼玉県内在住の55歳以上の方を対象に、生活の充実や社会参加のきっかけづくりとしていただくため、県と県内・近隣にキャンパスを構える大学が協力して授業科目の一部を開放し、一般の学生と一緒に学ぶ機会を提供する。 |
| 埼玉県 | 埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）代表校 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年度 | 「地元で生まれ、地元で育ち、地元で生きていく若い世代への支援」というビジョンのもと、「多様な高等教育」「生活しやすい地域づくり」「地域産業の活性化」を掲げ、自治体と地元企業とともに地域活性化を目指している。<br>城西大学は当プラットフォームの代表校を務めている。また、城西大学は教育連携委員会、城西短期大学はキャリア支援委員会に所属し、教育ならびにキャリア支援の観点から様々な事業を展開している。 |
| 埼玉県 | 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事 | 水田記念図書館 | 2022年度 | 県内の大学・短期大学図書館等が合同で研修会、図書館備品のコンソーシアム購入等を行っている。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 埼玉県 | 埼玉県博物館連絡協議会加盟館 | 水田美術館 | 2022年度 | 2012年度より加盟中の「埼玉県博物館連絡協議会」では、研修への参加や情報共有を行うなど、県内にある美術館・博物館と相互連携を図るようにしており、今年度については、所属する西部地域の催物案内への情報提供や、「埼玉県博物館連絡協議会加盟館園マップ」の校正作業に協力した。 |
| 埼玉県 | 埼玉県における「連携力の高い人材育成」を目指した職能団体と４大学の第８回、第９回意見交換会 | SAIPE委員会<br><br>古屋牧子（薬学部医療栄養学科准教授） | 2022年度 | 2018年度から県内職能団体の方々と埼玉県における「連携力の高い人材育成」を目指した意見交換会はSAIPEの取り組みについてご意見をいただいたり、緩和ケアIPW研修会のように、我々が実施してきたものを応用した形で現職者向けの研修としてお示ししたり、ご講演をお願いするなどを行ってきた。さらに、地域における連携の課題、連携ができる人材育成の課題などについて意見交換することを趣旨として昨年に続き今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、Zoom等オンラインツールを用いた遠隔で開催した。 |
| 埼玉県 | TJUP主催公開講座「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター<br><br>神崎直美（経済学部教授） | 2022年８月27日 | NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」には埼玉ゆかりの人物が多く登場する。そこで、埼玉県内の大学・短期大学が加盟しているTJUPの主催事業として、この時代の人物、歴史、文化など様々な視点からの公開講座を全11回にわたって開催した。<br>本学は、「武蔵武士比企氏と鎌倉」をテーマに経済学部の神崎直美教授が講演を行った。 |
| 埼玉県 | 彩の国連携力育成プロジェクト「IPW実習」 | SAIPE委員会<br><br>古屋牧子（薬学部医療栄養学科准教授）<br><br>薬学科学生、薬科学科学生、医療栄養学科学生 | 2022年８月29日～９月１日 | 彩の国連携力育成プロジェクトで実施運営している彩の国連携科目の一つとして、IPW実習を実施している。今年度は埼玉県内の16施設（病院、高齢者施設、障がい者施設等）へZoomを用いて利用者及び患者を対象に専門分野の異なる４大学の学生（埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学）が、オンラインにて対象者の支援計画を作成することで、チーム形成のプロセスや多職種による連携を学ぶ。オリエンテーション２日間、実習３日間、全体報告会が１日の、合計６日間の実習である。 |
| 埼玉県 | 第41回城西大学公開講座「ポストコロナ社会を生きぬくために」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター<br><br>于洋（現代政策学部教授）<br><br>田渕敬光（短期大学准教授）<br><br>伊東裕起（語学教育センター助教）<br><br>森田勇人（理学部化学科教授） | 2022年９月20日・10月６日・10月12日 | 本学の公開講座は、埼玉県の「埼玉まなびぃプロジェクト協賛事業」であり、教育研究の成果を広く地域に開放し、高度化、多様化する地域住民の学習意欲と地域社会のニーズに応えることを目的としている。<br>2022年度は、３回にわたって以下のテーマで開催された。<br>①　ポストコロナにおける地域介護人材について<br>・事例紹介：于洋（現代政策学部教授）、小石川高士（(株)リエイ人財開発部長）、小林毅（日本医療科学大学教授）、田渕敬光（短期大学准教授）<br>・全体討論<br>②　英国・アイルランド文学とパンデミック：ペストとスペイン風邪を中心に<br>・講演：伊東裕起（語学教育センター助教）<br>③　新型コロナウィルスとは？～彼を知り己を知れば百戦殆からず<br>・講演：森田勇人（理学部化学科教授） |
| 埼玉県 | 「地域防災政策ＩB」における埼玉県庁・埼玉県防災士会との連携授業 | 飯塚智規（現代政策学部准教授）<br><br>現代政策学部「地域防災政策ＩB」履修生 | 2022年10月27日～11月17日 | 現代政策学部の専門科目「地域防災政策ＩB」において、埼玉県危機管理課および埼玉県防災士会と協働の講義を３回実施した。その内容は、防災のイメージと判断力を高めるクロスロードゲームと、避難所運営訓練（HUG）である。25名の受講生が参加し、その様子はNHKニュースでも取り上げられた。 |
| 埼玉県 | TJUP教育連携委員会教育支援文化講座「☆和と洋の饗宴☆～和太鼓とヴァイオ | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年11月５日 | TJUP特定地域教育連携委員会との連携による教育支援企画講座として、TJUP特定地域内の中学生を主対象に本学清光ホールにて「音楽鑑賞」という学習機会を提供した。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| | リンが奏でる楽曲の調べ～」 | | | |
| 埼玉県 | 彩の国連携力育成プロジェクト　第５回「緩和ケアIPW（多職種連携）研修会」 | SAIPE委員会<br><br>堀井徳光（薬学部薬学科助教） | 2022年11月６日 | 緩和ケアにおいて“患者さんの生活の質”、“ケアの質”、“医療の質”を高めるためには多職種連携（専門職連携）が必要とされている。平成24年度から埼玉県内４大学（埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学）と埼玉県とが取り組んで来た「彩の国連携力育成プロジェクト」が開発した教育プログラムを用いて、埼玉県内の専門職の“連携力”の育成を目指して研修会を開催した。 |
| 埼玉県 | 彩の国連携力育成プロジェクト「IPW演習（緩和医療学）」 | SAIPE委員会<br><br>村田勇（薬学部薬学科助教）<br><br>薬学科学生、薬科学科学生、医療栄養学科学生 | 2022年12月２日 | 模擬患者を活用し、「がん終末期の患者の、身体的・精神的苦痛を和らげるにはどうしたらいいか」「患者の家族のフォローはどうすればいいのか」４大学から異なる分野（医学、理学療法、生活環境デザイン、薬学、医療栄養）の学生がオンラインにて集まり、連携してよりよいケアプランを考える。 |
| 埼玉県 | 図書館と県民のつどい埼玉2022「司書が魅せる！WEB展示」 | 水田記念図書館<br><br>図書館学生アドバイザー | 2022年12月10日～2023年１月31日 | 県内の市町村立図書館、県立図書館、高校図書館、大学図書館などが協力して開催するイベントである。本学はポスター「学生アドバイザー活動10年の軌跡」を展示した。 |
| 小鹿野町 | 学部横断型産官学連携教育プログラムによる地域食材を用いた食品の開発 | 田部渓哉（経営学部准教授）<br><br>経営学部田部ゼミナールⅠ<br><br>伊東順太（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>スポーツ栄養サークル【ANSER】 | 2022年度 | 学部横断型産官学連携教育プログラムにより埼玉県小鹿野町の特産品「秩父黄金かぼす」を使ったようかんを開発した。 |
| 小川町 | いやしの小川町子さん | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅠ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | 小川町を舞台とした創作小説「いやしの小川町子さん」とそれを映像化した連続ドラマ、現地撮影時に知った町の魅力を語り合う音声ファイルをそれぞれSNSで配信することで、小川町の観光の魅力を発信している。 |
| 小川町 | 道の駅おがわまちを拠点とした観光プロモーション活動 | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅡ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | 道の駅おがわまちを拠点としたドライブ観光をプロモーションする「私を小川町へ連れてって」を制作・配信した。 |
| 小川町 | 留学生による小川町内の日本文化研修 | 澤野勝巳（別科准教授）<br><br>別科日本文化専修課程 | 2022年11月19日 | 別科日本文化専修課程の学生（外国人留学生）が、小川町にある埼玉伝統工芸会館で紙漉き体験、晴雲酒造で施設見学、小川町観光協会で和服着付け体験、埼玉伝統工芸会館で伝統工芸品展示見学を行った。 |
| 小川町 | 短期大学「日本文化研修Ⅱ」(集中講義)における学外授業 | 村越純子（短期大学准教授）<br><br>短期大学日本文化研修Ⅱ | 2022年11月26日 | 短期大学の「日本文化研修Ⅱ」は本学を取り巻く地域の文化や歴史に触れることで日本文化の理解を深めることを目的としている。今年度から留学生だけでなく日本人学生も履修できるようになった。小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループとの連携により、今年度は埼玉伝統工芸会館で実施された小川和 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| | | | | 紙フェスティバルに参加した。また、午後には小川町観光協会の「おがわまちなか散歩ツアー」に参加して観光案内員とともに名所旧跡を巡った。 |
| 越生町 | 越生町まち・ひと・しごと創生有識者会議委員 | 真野博（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年度 | |
| 越生町 | 「梅凛カフェ」におけるワンデイカフェの運営 | 君羅好史（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>薬学部医療栄養学科 | 2022年４月１日～2023年３月31日 | 越生町山口農園内のシェアカフェ「梅凛カフェ」にて医療栄養学科の学生たちがワンデイカフェを運営した。 |
| 越生町 | 越生町ナイトツーリズムプロモーション | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅡ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | コロナ禍において三密を避けたマイクロツーリズムを念頭に、越生町におけるナイトツーリズムをプロモーションするために夜間撮影した画像にポエムを付した「越生夢幻」シリーズをSNSで配信した。 |
| 越生町 | うちわ工房における地場産業に対する理解の深化 | 田渕敬光（短期大学准教授）<br><br>短期大学田渕ゼミナール | 2022年７月１日 | 短期大学ビジネス総合学科田渕ゼミナールの活動として地域の地場産業に対する理解を深めるため、越生町のうちわ工房しまのにて、うちわの歴史を学ぶとともに実際にうちわを作る体験学習を実施した。 |
| 越生町 | ムサオゴ探究ゼミ城西大学発表会（武蔵越生高校） | 坂本武史（薬学部薬学科教授）<br><br>入試課 | 2023年１月19日 | 武蔵越生高校では、１、２年生の総合探究の時間に16ゼミ（１ゼミ20名）による探究活動を実施している。２年生３学期に全体発表会を開催し、その中から上位選抜６ゼミ（25名）が城西大学で発表した。 |
| 川越市 | 川越市男女共同参画審議会会長 | 大橋稔（語学教育センター教授） | 2022年度 | |
| 川越市 | 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越」の広報支援活動 | 村田勇（薬学部薬学科助教）<br><br>薬学部薬学科「コミュニケーション体験演習」 | 2022年９月17日 | リレー・フォー・ライフ・ジャパン川越の現地活動に参加し、がん啓発活動のためのSNS発信、ポスター作製および掲示などを行った。 |
| 川越市 | 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越」における４大学連携活動 | SAIPE委員会<br><br>岩田直洋（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>薬学部学生 | 2022年９月18日 | がん制圧に向けた世界共通のチャリティーイベントであるリレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越に４大学連携(IPE)の学生と共に参加した。新型コロナウイルスの影響で３年ぶりに現地での活動をした。内容として、RFL川越実行委員会の補助業務（受付など）を担当するとともに川越市内をウォーキングした。 |
| 川越市 | 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越」における栄養相談の実施 | 堀由美子（薬学部医療栄養学科准教授）<br><br>薬学部医療栄養学科 | 2022年９月18日 | リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越のイベント運営や参加者の栄養相談に対応した。また、チャリティに繋がるセルフウォークリレーに参加した。小江戸川越ハート♥ウォーク事業に関するコース・記念品デザイン、歩行時の消費エネルギー量と食品目安量表、啓発資料を作成・提供した。 |
| 川越市 | 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越」における | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年９月18日～10月17日 | がん患者支援を目的に、参加者各自が歩いた歩数に応じて協賛企業が日本対がん協会に寄付を行うというイベントにゼミ生37名が参加し、１月間で約711万歩を歩き、社会貢献すること |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| | セルフウォークリレーの参加 | 経済学部勝浦ゼミナール | | ができた。 |
| 川越市 | 「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2022川越」第36回「がんサロン川越」講師 | 堀由美子（薬学部医療栄養学科准教授） | 2022年11月12日 | がん患者・家族・遺族・支援者を対象に「からだの調子を整える～ビタミンDの栄養～」のテーマでミニセミナーを実施した。 |
| 川越市 | TJUP報告会「TJUPランド　学び☆働き☆育み☆ヤバみ～！」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター<br><br>矢島克彦（薬学部薬科学科助教）<br><br>薬学部薬科学科栄養生理学研究室<br><br>君羅好史（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>薬学部医療栄養学科食品機能学研究室 | 2022年12月26日 | 川越市を中心とするTJUP特定地域に在住・在勤・在学の方々に広報・広聴し、今後のTJUPの事業策定の一助とすることも目的とした報告会において、薬学部薬科学科栄養生理学研究室の矢島助教と学生３名が血管年齢チェックと太りにくいマフィンの配付を、薬学部医療栄養学科食品機能学研究室の君羅助教と大学院生２名が毛細血管チェックならびに食育かるた大会の運営を、地域連携センター事務室が本報告会の企画・運営を行った。 |
| 川越市<br>鶴ヶ島市<br>坂戸市<br>東松山市<br>嵐山町<br>滑川町<br>小川町<br>寄居町 | 東武鉄道東上線川越以北沿線の情報誌の作成 | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅠ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | 東上線霞ヶ関駅～寄居駅までの沿線について、その魅力を紹介するため、『ぴえん東上線　～各駅停車川越以北行き～』と題した若者の情感に訴える地域情報を掲載した記事を作成し、SNSを使って配信している。 |
| 川島町 | 川島町地域経営協議会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 川島町 | 「レインボーフェスティバル　世界が川島（ここ）に！」におけるローカルヒーローショー | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年10月１日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーとグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 川島町 | 「レインボーフェスティバル　世界が川島（ここ）に！」の開催 | 勝浦信幸（経済学部特任教授）<br><br>経済学部勝浦ゼミナール | 2022年10月１日 | 埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（レインボー協議会）との連携により、川島町カインズモールにてインターナショナルフェスティバルを開催した（来場者数5,300人）。勝浦ゼミ生たちは、企画運営全てに携わり、ポスター・チラシのデザイン、ラジオ出演などの広報活動、世界各国のグルメ出店者や音楽・ダンスの出演者との調整、保健所・消防など行政関係への申請から当日の進行などに至るまで幅広く活躍した。 |
| 越谷市 | 図書館学生アドバイザーと叡明高等学校生との協働展示 | 水田記念図書館<br><br>図書館学生アドバイザー | 2023年２月21日 | 図書館学生アドバイザーの活動経験を活かし、「SDGs」と「新入生へのおすすめ本」をテーマに高校生とのコラボレーションによる図書の展示とポップ作成を行った。ポップ作成作業では、PPTの使い方を教えたり、大学での学びについても話題になったりと楽しく交流することができた。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| さいたま市 | イオンモール浦和美園店で開催された健康イベントへの参画 | 石倉惠介（経営学部教授）<br><br>経営学部石倉ゼミナールⅠ・基礎ゼミナールⅡ | 2022年10月７日～10月８日 | 健康イベントにおいて、「ロコモを知ろう」と題し、ロコモティブシンドロームについての認知アンケート、簡易診断およびロコモ対策の運動を紹介した。 |
| さいたま市 | イオンモール浦和美園店における健康イベント「うららか広場」における出店 | 加藤勇太（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>公認サークルDHA | 2022年10月８日～10月９日 | イオンリテール株式会社と連携し、イオンモール浦和美園店における健康イベント「うららか広場」にブースを出店し、医療栄養学科の公認サークルDHAが考案した健康レシピを配布した。 |
| さいたま市 | イオンモール浦和美園店における健康イベント「うららか広場」における「食育折り紙教室」の実施 | 山王丸靖子（薬学部医療栄養学科准教授）<br><br>深谷睦（薬学部医療栄養学科助手）<br><br>山田沙苗（薬学部医療栄養学科助手） | 2022年10月８日～10月９日 | イオンリテール株式会社と連携し、イオンモール浦和美園店における健康イベント「うららか広場」のブースにおいて、「食育折り紙教室」「食育借りた大会」を実施した。栄養教育学研究室で作成したさつまいも、かぶ、しいたけの料理レシピを配布した。 |
| 坂戸市 | 坂戸市教育委員会<br>坂戸市文化財保護審議会委員 | 石井龍太（経営学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市食を通じた健康づくり応援店認定検討委員会委員 | 内田博之（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年度後期 | |
| 坂戸市 | 坂戸市高齢者福祉及び介護保険事業審議会委員 | 于洋（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市国民健康保険運営協議会委員 | 于洋（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市地域福祉計画審議会委員 | 于洋（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸地区衛生組合行政不服審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸地区衛生組合情報公開・個人情報保護審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市健康なまちづくり審議会委員（食育推進部会所属） | 山王丸靖子（薬学部医療栄養学科准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市空き家等対策協議会委員 | 志田崇（経営学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市教育委員会<br>社会教育委員 | 杉田義昭（薬学部薬科学科教授） | 2022年度 | |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 坂戸市 | 坂戸市廃棄物減量等推進審議会委員 | 杉田義昭（薬学部薬科学科教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市商工業ビジョン審議会委員 | 鈴木雅勝（経済学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市図書館協議会委員 | 関口千登世（水田記念図書館事務長） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市食を通じた健康づくり応援店認定検討委員会委員 | 関口祐介（薬学部医療栄養学科助教） | 2022年度前期 | |
| 坂戸市 | 坂戸市教育委員会委員 | 蓼沼康子（短期大学教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市男女共同参画審議会委員 | 蓼沼康子（短期大学教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市教育委員会坂戸市スポーツ推進審議会委員 | 千葉佳裕（経営学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市行政不服審査会委員 | 夏目秀視（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市情報公開・個人情報保護審査会委員長 | 夏目秀視（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市公の施設指定管理者選定委員会委員長 | 庭田文近（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市総合計画審議会委員長 | 庭田文近（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市地域公共交通活性化協議会委員長 | 庭田文近（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市特産品事業推進委員会委員 | 松本明世（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市健康なまちづくり審議会委員（健康増進部会所属） | 真殿仁美（現代政策学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市環境審議会委員 | 真野博（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市市民参加推進会議委員 | 柳澤智美（現代政策学部准教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市 | 坂戸市都市計画審議会委員 | 柳下正和（経営学部教授） | 2022年度 | |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 坂戸市 | 北坂戸にぎわいサロンの運営 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年度 | 学生と地域住民が一緒に学びあいながら、地域のにぎわいを創造することを目的に、東上線北坂戸駅東口にあるURの１階で、週４日のラーニングコモンズを開所している。 |
| 坂戸市 | 「北坂戸にぎわい通信」の執筆 | 真野博（薬学部医療栄養学科教授）<br><br>大学院薬学研究科医療栄養学専攻 | 2022年度 | 毎月１回、食品コラムと料理レシピの執筆を担当している。 |
| 坂戸市 | 高麗川多和目地区における環境保全活動 | 真野博（薬学部医療栄養学科教授）<br><br>高麗川かわガール | 2022年度 | 高麗川多和目地区の美化活動と環境調査を定期的に行っている。 |
| 坂戸市 | 坂戸市観光推進事業への参加・協力 | 水田美術館 | 2022年度 | 坂戸市主導で発足された観光資源団体に2019年１月より参加。今年度は同市が発行する『令和４年度版　観光ガイドマップ』作製に協力した。 |
| 坂戸市 | 東武東上線沿線サミット発行誌への掲載誌面校正への協力 | 水田美術館 | 2022年度 | 坂戸市が平成31年４月より参加している東武東上線沿線サミット（沿線自治体の交流・活性化・沿線の魅力をアピールすることを目的に平成25年７月発足）から発行されるガイド誌『Chittabi（チッタビ）』の令和５年度版校正に協力した。 |
| 坂戸市 | Amazon 坂戸 FC の食堂で提供する地元食材を使用したメニューを医療栄養学科の学生と大学院生が考案！ | 君羅好史（薬学部医療栄養学科助教）<br><br>薬学部医療栄養学科 | 2022年４月１日～７月31日 | 城西大学薬学部医療栄養学科で管理栄養士を目指す学生と管理栄養士資格を有する大学院生が Amazon とコラボし、地元食材を使用した美味しいレシピをアマゾン坂戸フルフィルメントセンター（FC）限定で提供した。 |
| 坂戸市 | 坂戸市ラーメンの町プロモーション | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅡ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | 坂戸市をラーメンの町としてプロモーションするために、坂戸のラーメン屋をめぐるショートドラマ「すすれ！ずるずる大学生」を制作・配信した。 |
| 坂戸市 | 坂戸市と城西大学との連携協力推進委員会 | 学長室学務課 | 2022年７月８日 | 坂戸市との連携協定に基づき、委員会を開催。前年度の事業報告・評価及び今年度の事業計画等の承認を行った。自らの課題の提示により、今後の連携事業に繋がる意見交換ができた。 |
| 坂戸市 | 坂戸西高等学校における埼玉県薬物乱用防止教室の講師 | 井上裕（薬学部薬学科教授） | 2022年７月14日 | |
| 坂戸市 | 坂戸市公民館事業「坂戸市健康講座」講師 | 平塚潤（経営学部准教授） | 2022年７月15日 | 「五輪の歴史とスポーツの力」をテーマに講演を行った。 |
| 坂戸市 | 坂戸七夕まつりにおけるローカルヒーローショーの実演 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年７月17日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーとグリーティング（練り歩き）を行った。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 坂戸市 | 坂戸市公民館事業「坂戸市健康講座」講師 | 沼尻幸彦（薬学部薬学科教授） | 2022年７月20日 | 「薬と食品の相互作用」をテーマに講演を行った。 |
| 坂戸市 | 留学生による坂戸市内の社会施設見学 | 澤野勝巳（別科准教授）<br><br>別科日本文化専修課程 | 2022年７月25日 | 別科日本文化専修課程の学生（外国人留学生）が坂戸ロータリークラブの協力を得て、坂戸西清掃センターと石井水処理センターの見学、さらに坂戸市役所で市長表敬訪問と市議会議場の見学を行った。また、坂戸ロータリークラブとの会食で交流を深めた。 |
| 坂戸市 | 化石割り体験ワークショップ | 水田美術館<br><br>宮田真也（理学部化学科助教） | 2022年７月30日 | 地域住民を対象に、学校法人城西大学水田記念博物館大石化石ギャラリー学芸員でもある宮田真也助教を講師として、前半に化石の基礎講座、後半に化石割り体験の内容で実施した。 |
| 坂戸市 | Happy-lucky-café | 柳澤智美（現代政策学部准教授） | 2022年８月１日～2023年１月20日 | 小学生の放課後の居場所つくりを行った。 |
| 坂戸市 | 西坂戸における地域活性化活動 | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部専門科目「地域イノベーション」 | 2022年９月１日～2023年２月28日 | 現代政策学部の専門科目「地域イノベーション」において、フィールドワークをもとに西坂戸の課題の洗い出しを行ったうえで、以下３つの地域活動プロジェクトチームを組み、自分たちで実行可能なプロジェクトの企画・計画・準備・実行・事後評価を行った。<br>①「おもいでかるた」：かるたづくりとゲームによる子供・大学生・高齢者の三世代交流を目指したイベントを行った。<br>②「西坂戸にゃん’sのお友達大作戦！」：オリジナルの地域キャラクター“西坂戸にゃん”をデザインし、そのキャラクターと西坂戸の風景の塗り絵をつくり、西坂戸の幼児たちに色を塗ってもらった。塗ってもらった作品は、SNSで匿名にして公開した。<br>③「地域の安全守りたい－C.A.T.プロジェクト」：地域猫をモチーフとした交通安全・防犯ポスターを作成し、西坂戸各地に掲示した。 |
| 坂戸市 | 浮世絵講座「役者絵」 | 水田美術館 | 2022年９月３日 | 地域住民を対象にした浮世絵講座として、藤澤茜氏（神奈川大学国際日本学部准教授、国際浮世絵学会常任理事）に「役者絵」をテーマにご講演頂いた。 |
| 坂戸市 | UR北坂戸団地第３回「北坂戸音楽ライブ！」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年９月６日 | 北坂戸駅の近くにあるUR北坂戸団地で、地域住民が音楽を通じて緩やかに交流することを目的として、URとURコミュニティ、UR生活支援アドバイザーが共同で企画した事業。城西短期大学の学生がピアノ演奏で出演した。 |
| 坂戸市 | 坂戸市公民館事業「坂戸市健康講座」講師 | 横川貴美（薬学部薬学科助教） | 2022年９月７日 | 「身近な薬用植物～七味唐辛子～」をテーマに講演を行った。 |
| 坂戸市 | 浮世絵版画の摺り実演会 | 水田美術館 | 2022年９月24日 | 地域住民を対象に、公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団の特別協力を頂き、財団スタッフの解説のもと、浮世絵版画の制作において重要な工程のひとつである摺りを摺師に披露して頂いた。 |
| 坂戸市 | 坂戸市公民館事業「坂戸市健康講座」講師 | 清水純（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年９月28日 | 「健康食品との正しいつきあいかた」をテーマに講演を行った。 |
| 坂戸市 | 浮世絵講座「名所絵・風景画」 | 水田美術館 | 2022年10月１日 | 地域住民を対象にした浮世絵講座として、大久保純一氏（国立歴史民俗博物館教授、町田市立国際版画美術館館長）に「名所絵・風景画」をテーマにご講演頂いた。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 坂戸市 | 坂戸市のイベントチラシの制作 | 田部渓哉（経営学部准教授）<br><br>経営学部マネジメント総合学科 | 2022年10月１日～11月１日 | 坂戸市内で行われるイベントの折り込み広告の制作を行った。 |
| 坂戸市 | 浮世絵講座「美人画」 | 水田美術館 | 2022年10月８日 | 地域住民を対象にした浮世絵講座として、藤澤紫氏（國學院大學教授、国際浮世絵学会常任理事）に「美人画」をテーマにご講演頂いた。 |
| 坂戸市 | 坂戸市立図書館を使った調べる学習コンクール審査委員 | 関口千登世（水田記念図書館事務長） | 2022年10月13日 | |
| 坂戸市 | 城西大学防災訓練 | 大学生機能別消防団 | 2022年10月19日 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合と連携し、城西大学防災訓練を実施した。そのなかで、大学生機能別消防団員は、誘導や非常食配布を担当することにより、実践訓練とした。 |
| 坂戸市 | 留学生による坂戸市内の企業見学 | 澤野勝巳（別科准教授）<br><br>別科日本文化専修課程 | 2022年10月26日 | 別科日本文化専修課程の学生（外国人留学生）が坂戸市千代田にある三島食品（株）関東工場を見学した。 |
| 坂戸市 | 城西大学・城西短期大学地域連携活動発表会 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年10月29日～11月４日 | 本学のさまざまな団体が2021年度後期から2022年度前期に行った地域連携活動について、そのパネル発表を通じて、学内および地域の方々と意見交換・研究交流を行った。 |
| 坂戸市 | ローカルヒーロー博覧会３ | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年10月30日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 坂戸市 | 北坂戸団地文化祭の参加 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年11月３日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 坂戸市 | 浮世絵講座「武者絵、戯画」 | 水田美術館 | 2022年11月19日 | 地域住民を対象にした浮世絵講座として、日野原健司氏（太田記念美術館主席学芸員）に「武者絵、戯画」をテーマにご講演頂いた。 |
| 坂戸市 | 浮世絵講座「おもちゃ絵」 | 水田美術館 | 2022年12月３日 | 地域住民を対象にした浮世絵講座として、新藤茂氏（UKIYO-E PROJECT Adviser、国際浮世絵学会常任理事）に「おもちゃ絵」をテーマにご講演頂いた。 |
| 坂戸市 | 坂戸イルミネーション点灯式 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年12月４日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 坂戸市 | 坂戸児童センタークリスマス会への参加 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年12月24日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 坂戸市 | ローカルヒーローステージ×浮世絵版画の摺り体験 | 水田美術館<br><br>石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2023年２月11日 | ローカルヒーローステージおよび浮世絵版画の摺り体験を行った。 |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸、鶴ヶ島下水道組合行政不服審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸、鶴ヶ島下水道組合情報公開・個人情報保護審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸、鶴ヶ島水道企業団行政不服審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸、鶴ヶ島水道企業団情報公開・個人情報保護審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合行政不服審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合情報公開・個人情報保護審査会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸、鶴ヶ島下水道組合下水道事業運営審議会委員 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2022年度 | |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 普通救命講習 | 大学生機能別消防団 | 2022年７月19日・９月27日 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合の大学生機能別消防団員として、坂戸市内に所在している城西大学、女子栄養大学、明海大学の学生が所属している。城西大学は、女子ソフトボール部27名、剣道部７名、有志の学生２名が所属している。団員活動の基礎として、坂戸・鶴ヶ島消防組合の団員が講師となり、女子栄養大学、明海大学の団員とともにAEDを使用した救命講習を行った。 |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 展覧会「第20回MOA美術館坂戸・鶴ヶ島児童作品展」の開催 | 水田美術館<br><br>柳澤智美（現代政策学部准教授）<br><br>現代政策学部社会経済システム学科 | 2022年10月29日～10月30日 | 学生と地域の方々が協働でMOA主催の児童作品展の坂戸鶴ヶ島地域の絵画展を開催した。 |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合の特別点検の参加 | 大学生機能別消防団員 | 2022年11月６日 | 坂戸・鶴ヶ島消防組合からの要請で、消防組合の行事である特別点検に大学生機能別消防団員１名が参加した。特別点検では、人員服装規律の点検、機械器具点検、表彰式、放水試験（高麗川北坂戸橋上流左岸）を実施した。 |
| 坂戸市<br>鶴ヶ島市<br>日高市<br>狭山市 | 環境DNAを用いたホトケドジョウの生息地調査（卒業研究） | 石黒直哉（理学部化学科教授）<br><br>理学部化学科 | 2022年４月１日～2023年３月17日 | 各種団体からの助成金を受けて卒業研究として地域連携・地域の自然生態調査を行っている。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 毛呂山町<br>越生町<br>鳩山町 | | 環境生命化学研究室 | | |
| 坂戸市<br>毛呂山町 | Josai Univ Football Festival | 佐々木達也（経営学部教授）<br><br>東海林毅（経営学部助教）<br><br>サッカー部 | 2022年８月21日 | 坂戸市および毛呂山町の小学生を対象としたサッカー教室を城西大学サッカー部員が運営・指導した。 |
| 坂戸市<br>毛呂山町 | 坂戸市少年サッカートレセン活動 | 東海林毅（経営学部助教）<br><br>サッカー部地域貢献部局 | 2022年12月18日 | 坂戸市少年サッカートレセン活動を行った。 |
| 坂戸市<br>毛呂山町 | 地域交流事業毛呂山町立光山小学校大学見学「美術館体験プログラム」の実施 | 水田美術館 | 2023年２月15日 | 地域交流事業として、毛呂山町立光山小学校が本学へ見学に訪れ、「美術館体験プログラム」に参加した。 |
| 坂戸市<br>毛呂山町<br>越生町 | 子ども大学にしいるま | 城西大学・城西短期大学地域連携センター<br><br>森田勇人（理学部化学科教授）<br><br>阪田知巳（理学部化学科教授）<br><br>石井龍太（経営学部准教授）<br><br>宮田真也（理学部化学科助教） | 2022年７月30日～８月27日 | 坂戸市・毛呂山町・越生町の教育委員会と連携し、地域の子どもたちの知的好奇心を刺激する学びの機会を提供するために、以下３回のテーマで開校した。<br>①「化石学入門」宮田真也（理学部助教）<br>②「作ろう！ローカル悪役」石井龍太（経営学部准教授）<br>③「のぞいてみよう！口の中」明海大学<br>④「－196℃の世界に触れてみよう」森田勇人（理学部教授）・阪田知巳（理学部教授） |
| 坂戸市<br>毛呂山町<br>日高市<br>小川町 | 大学周辺地域の地域プロモーション作品の制作 | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ソフォモアセミナー | 2022年４月６日～2023年１月18日 | 現代政策学部２年生のソフォモアセミナーにおいて、大学周辺地域の理解とそのプロモーションのために、以下を実施した。<br>①セミナー生各人で大学周辺地域の調査・プレゼンテーション。<br>②ペアワークで大学周辺地域のPRポスターの制作・作品公開。<br>③グループワークで大学周辺地域のプロモーション動画の制作・作品公開。 |
| 狭山市 | TJUP事業「コロナ禍の学生生活 振り返り！ピンチをチャンスに！座談会2022－悩み・工夫・これから・・・みんなで語り合おう!!－」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年８月24日 | コロナ禍において、授業形式・サークル活動・学園祭等学生生活にどのような変化・影響があったのか。どのようなことに悩み、苦労したのか、また、どのような工夫・実践により、乗り越えたのか。経験者だからこそ語れる、また、この経験をピンチをチャンスに前向きな発想を交えて、熱く語る大学生の座談会実施により、学生間の交流促進及び、社会性・コミュニケーション力を培う。学生主体事業として、学生イベント交流委員会校の学生達が中心に運営スタッフとして、それぞれ役割分担をもち、事業を進行した。 |
| 狭山市<br>入間市 | 子どもスポーツ体験教室（TJUP共催） | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年８月９日 | 近隣自治体のスポーツ推進の一環として生涯スポーツの充実化を目指す取り組みとして､狭山市･入間市との連携により2012年から「スポーツ体験教室」を継続実施している。この「スポーツ体験教室」を通して、教員を目指す学生達を事前指導により新たな指導法の実践を促し、協力校を含むTJUP加盟大学の |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| | | | | 学生には当日補助業務により、地域の児童を対象に様々な運動遊びを体験させ、各個人の能力・可能性を広げる等の教育支援活動を取組む事業とし、今後の大学生活におけるネットワークを構築するとともに地域社会への貢献力を学ぶ機会となった。 |
| 秩父市 | 龍峰山清泉寺における学外授業 | 村越純子（短期大学准教授）<br><br>短期大学村越ゼミナール | 2022年９月10日 | 秩父にある曹洞宗龍峰山清泉寺を訪問し、その第46代ご住職から御本堂の貴重な文化財の説明をいただいたのち、会議室をお借りしてゼミナール活動を行った。その後、近隣の龍勢会館内を見学、椋神社を参詣するなど、龍勢祭にまつわる郷土文化についても学習した。 |
| 秩父市<br>長瀞町 | 留学生による秩父地域文化研修 | 国際教育センター | 2022年11月13日 | 留学生を連れて秩父の祭り会館や秩父神社へ訪問し、埼玉県秩父地域の文化に触れ、それらが地域の中でどのように位置づけられているかを学んだ。長瀞ではうどん作り、長瀞のライン下りを通じて、同地域の観光資源を体験した。 |
| 鶴ヶ島市 | 鶴ヶ島市教育委員会<br>鶴ヶ島市立図書館協議会委員 | 関俊暢（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 鶴ヶ島市 | 鶴ヶ島市市民協働推進委員会委員 | 柳澤智美（現代政策学部准教授） | 2022年度 | |
| 鶴ヶ島市 | 高齢者スマホ教室 | 勝浦信幸（経済学部特任教授）<br><br>経済学部勝浦ゼミナール | 2022年４月16日・30日 | ４月16日と30日の２日間、勝浦ゼミと鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会との連携で高齢者を対象としたスマホ教室を開催。３Ｇから５Ｇへの移行に伴いスマホを購入した高齢者たちが活用方法についてよくわからずに困っているという声に応えたもの。両日とも35人の高齢者が参加され、それ以上の人数の勝浦ゼミ生がマンツーマンでアシスタントを担った。 |
| 鶴ヶ島市 | 鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年７月25日～８月26日 | 鶴ヶ島市の児童・生徒が学習意欲の向上や学習習慣の定着、「確かな学力」の育成を目指し、夏季休暇中の自主学習をする際に発生した疑問点や誤答を解消するため、大学生が学習指導補助員として鶴ヶ島市内小中学校で指導・支援を行う。大学生にとっては、児童生徒への指導を通じて、貴重な経験を積めるほか、教職課程を履修している学生にとっては、現場経験を積むことができるよい機会となった。 |
| 鶴ヶ島市 | 「TJUP教育連携市民フォーラム2022～鶴ヶ島市WIN-WIN事業【鶴っ子サマースクール】による小学校・中学校と大学双方の教育的効果について」の開催 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年９月24日 | TJUP特定地域内の鶴ヶ島市では、市内公立小・中学校13校（小学校８校・中学校５校）で学ぶ児童・生徒を対象に夏休みを利用して自主的に学ぶ機会を提供する【鶴っ子サマースクール】を開催。当初TJUPでは教育支援事業として会員校の学生を派遣し、TJUP会員校在学生を合む62名の学生が計669名の小・中学生への学習支援活動を展開した。今回、この鶴ヶ島市の取り組みと地域に所在する大学の利活用にスポットをあて、大学の地域貢献について考える「市民フォーラム」を開催した。新型コロナの関係で、パネラーによるディスカッションをリモートによりオンラインという形式で行った。 |
| 鶴ヶ島市 | Enjoy Sports Meeting（鶴ヶ島市民体育祭）ボランティア | 陸上競技部 | 2022年10月９日 | 鶴ヶ島スポーツ協会が主催。スポーツ競技の他、鶴ヶ島市のNPO法人や団体が展示企画や模擬店を出店する、複合的イベント。 |
| 鶴ヶ島市 | 「第６回鶴ヶ島市立図書館を使った調べる学習コンクール」応募作品審査会審査委員長 | 関俊暢（薬学部薬学科教授） | 2022年10月13日 | |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 鶴ヶ島市 | ステップアップ研修会「野球教室」 | 硬式野球部 | 2022年12月３日 | 鶴ヶ島スポーツ協会が主催する鶴ヶ島市内在住・在学の中学生を対象とした野球教室において、城西大学硬式野球部の学生が指導を行った。 |
| ときがわ町 | Tokigawa Study | 真野博（薬学部医療栄養学科教授）<br><br>薬学部医療栄養学科 | 2022年４月１日～2023年３月31日 | ときがわ町において、医療栄養学科の学生が、以下の事業に携わった。<br>①特定健診時の栄養食事調査と健康教育の実施。<br>②広報ときがわへの毎月の「城西大学通信」の執筆。<br>③食を語る会の実施（食や健康に関わる専門職種の方の研修会。<br>④Tokigawa Motionの実施（フレイル予防対策）。 |
| 滑川町 | 環境DNAを用いたドブガイ類の生息する谷津沼の探索 | 石黒直哉（理学部化学科教授）<br><br>理学部化学科 | 2022年４月１日～2023年３月17日 | 滑川町からの依頼を受け、昨年度から調査研究を進めている。 |
| 東秩父村 | 東秩父村総合振興計画等審議会委員 | 堀由美子（薬学部医療栄養学科准教授） | 2022年度 | |
| 東松山市 | 東松山市立市民病院運営委員会委員 | 伊関友伸（経営学部教授） | 2022年度 | |
| 東松山市 | 日本スリーデーマーチに向けた「東松山市クリーン活動」 | 城西大学・城西短期大学地域連携センター | 2022年10月29日 | 本学職員が、TJUPの会員自治体である東松山市のクリーン活動（ゴミ拾い）に参加し、参加者同士の交流を深めた。 |
| 東松山市 | 東松山市きらめき市民大学講師 | 若林英嗣（理学部化学科教授） | 2022年６月８日 | 「化学物質と生態系～化学から見た生態のメカニズム～」をテーマに講演を行った。 |
| 東松山市 | 東松山市きらめき市民大学講師 | 勝浦信幸（経済学部特任教授） | 2023年２月８日 | SDGsについて講演を行った。 |
| 鳩山町 | 宇宙・産学官・地域連携コンソーシアム役員 | 石黒直哉（理学部化学科教授） | 2022年度 | |
| 日高市 | 日高市上下水道事業運営審議会委員 | 秋田素子（理学部化学科教授） | 2022年度 | |
| 日高市 | 日高市市民参加推進会議委員長 | 庭田文近（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 日高市 | 日高市行政経営審議会委員 | 宮下春樹（経済学部助教） | 2022年度 | |
| 日高市 | 日高市都市計画審議会委員 | 望陀芙美子（経済学部助教） | 2022年度 | |
| 日高市 | ひだかん実行委員会ソーシャルひだかんファレンス2022最終審査会審査員 | 柳澤智美（現代政策学部准教授） | 2022年９月４日 | |
| 日高市 | 荒川流域ネットワーク主催「アユ漁体験と魚捕り」（高麗川獅子岩橋会場）の運営サポート | 松本明世（薬学部医療栄養学科教授）<br><br>高麗川かわガール | 2022年８月21日 | 荒川流域ネットワークが主催した「アユ漁体験と魚捕り」イベントにおいて、高麗川獅子岩橋会場の設営、子供たちの魚捕りのサポート、捕った魚の調理など、運営をサポートした。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 日高市<br>毛呂山町<br>越生町<br>ときがわ町<br>小川町<br>寄居町<br>美里町<br>本庄市<br>神川町<br>藤岡市<br>高崎市 | JR八高線沿線プロモーション | 庭田文近（現代政策学部教授）<br><br>現代政策学部庭田ゼミナールⅠ | 2022年４月６日～2023年３月31日 | JR八高線の非電化区間（高麗川駅～倉賀野駅）の各駅への来訪を促すために、それぞれの駅近隣の地域資源を発掘し、その場所に因んだキャッチフレーズとコスプレ写真を取り入れたカード「目指せ！八高線マスター！」を作成・配布している。 |
| ふじみ野市 | 華麗なるカレー博への参加 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年11月19日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 毛呂山町 | 毛呂山町まち・ひと・しごと創生有識者会議委員 | 青柳龍司（現代政策学部教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 毛呂山町教育委員会令和４年度毛呂山町学校運営協議会委員 | 石黒直哉（理学部化学科教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 毛呂山町地域ケア会議アドバイザー | 大嶋繋（薬学部薬学科教授）<br><br>井上直子（薬学部薬学科准教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 毛呂山町教育委員会委員 | 岡崎真理（薬学部薬学科教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 毛呂山町教育委員会小・中学校のあり方検討委員会委員 | 真殿仁美（現代政策学部准教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 毛呂山町上水道審議会委員 | 真野博（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年度 | |
| 毛呂山町 | 第２回毛呂山町ビジネスコンテストの運営 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年６月25日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 毛呂山町<br>川越市<br>鶴ヶ島市 | JAWSかけっこ教室 | 千葉佳裕（経営学部准教授）<br><br>経営学部千葉ゼミナール | 2022年１月15日～11月26日 | 大学周辺地域の子供たちを対象に、かけっこの指導を行った。 |
| 茨城県<br>つくば市<br>桜川市<br>石岡市 | ツクバハコネサンショウウオ環境DNA検出手法の確立（卒業研究） | 石黒直哉（理学部化学科教授）<br><br>理学部化学科環境生命化学研究室 | 2022年４月１日～2023年３月17日 | 茨城県生物多様性センターからの委託を受けて卒業研究として行っている。 |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 沖縄県<br>宮古島市 | 狩俣子供会における<br>ローカルヒーローショーの公演 | 石井龍太（経営学部准教授）<br><br>経営学部石井ゼミナール | 2022年９月17日 | 城西大学のローカルヒーローによるステージショーおよびグリーティング（練り歩き）を行った。 |
| 神奈川県<br>相模原市 | 公益社団法人相模原・町田大学地域コンソーシアムさがみはら地域づくり大学講師 | 飯塚智規（現代政策学部准教授） | 2022年度 | |
| 神奈川県<br>相模原市 | 相模原市教育委員会<br>相模原市文化財保護審議会委員 | 神崎直美（経済学部教授） | 2022年度 | |
| 神奈川県<br>大和市 | 大和市文化財保護審議会委員 | 神崎直美（経済学部教授） | 2022年度 | |
| 群馬県 | 群馬県立世界遺産センター第３回セカイト講演会講師 | 井上直子（経済学部准教授） | 2022年11月26日 | |
| 群馬県<br>沼田市 | 沼田市第４次男女共同参画計画推進に係るアドバイザー及び男女共同参画セミナーに係るコーディネーター | 山口理恵子（経営学部教授） | 2022年度 | |
| 東京都<br>昭島市 | 昭島市郷土資料室に対する調査研究協力、企画展協力、採取した標本の寄贈 | 宮田真也（理学部化学科助教）<br><br>水田記念博物館大石化石ギャラリー | 2022年度 | 多摩川中流域の鮮新－更新統上総層群の化石調査・研究に参加するとともに、共同研究者の昭島市郷土資料室が企画した多摩川流域の上総層群産魚類化石の企画展（アキシマエンシスにて開催）への標本の寄贈および助言などを行った。 |
| 東京都<br>大田区 | 令和４年度大田区保健所特定給食施設講習会 | 坂本友里（薬学部医療栄養学科助教） | 2022年度 | 大田区保健所蒲田市域健康課へ「災害時に起こりやすいライフステージ別の健康課題について」を寄稿した。 |
| 東京都<br>大田区 | 地域で活動する栄養士等講習会講師 | 清水純（薬学部医療栄養学科教授） | 2022年３月９日 | 大田区内在住・在勤の栄養士等、食育に興味のある区民を対象とした講習会において、「健康食品の正しいつきあいかた」をテーマに講演を行った。 |
| 東京都<br>葛飾区 | 葛飾区民大学単位認定講座（主催：男女平等推進センター）講師 | 大橋稔（語学教育センター教授） | 2023年２月12日・19日 | 葛飾区民を対象とした講座「視覚文化とジェンダー」（全２回）において講演を行った。<br>第１回テーマ「美にまつわる意識の変化と女性の生」。<br>第２回テーマ「スーパーヒーローから考えるジェンダー」。 |
| 東京都<br>品川区 | 東京都立富士高等学校令和４年度スーパーサイエンスハイスクール事業富士未来構想サポートチーム講師 | 君羅好史（薬学部医療栄養学科助教） | 2022年６月22日 | |
| 東京都<br>品川区 | 品川区立伊藤学園夏季集中講座講師 | 安田英典（理学部数学科教授） | 2022年７月28日 | |

| 地域 | 活動名 | 活動者 | 期間 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 東京都<br>千代田区 | 千代田区立麹町小学校における図工の体験講座 | 宮田真也（理学部化学科助教）<br><br>水田記念博物館大石化石ギャラリー | 2022年６月27日～６月30日 | 小学校４学年を対象に化石をテーマにした図工作品作りに生かすため、化石の講義や簡単な体験講座を行った。 |
| 東京都<br>千代田区 | かがやき納涼会×ひだまりサロンチャオ | 宮田真也（理学部化学科助教）<br><br>水田記念博物館大石化石ギャラリー | 2022年８月27日 | 化石に関する講座を行った。 |
| 東京都<br>千代田区 | 大妻中学高等学校医療系探究プログラム講演会講師 | 畑中朋美（薬学部薬学科教授） | 2022年10月29日 | |
| 東京都<br>千代田区 | 千代田区高齢者活動センターかがやき大学「千代田で学ぶ古生物学～恐竜時代の生き物たち～」 | 宮田真也（理学部化学科助教）<br><br>水田記念博物館大石化石ギャラリー | 2022年11月18日 | 千代田区のかがやき大学において、60歳以上の高齢者を対象に古生物学の普及活動を行った。 |
| 東京都<br>千代田区 | ひだまりサロンチャオ１月「恐竜サロン～恐竜の時代へタイムスリップ！～」講演 | 宮田真也（理学部化学科助教）<br><br>水田記念博物館大石化石ギャラリー | 2023年１月28日 | 千代田区の千代田区社会福祉協議会ひだまりサロンチャオにおいて、児童を対象に古生物学の普及活動を行った。 |
| 長野県<br>伊那市 | 長野県伊那市に住んでいる方々に運動習慣を身につけてもらうには？ | 篠原康男（経営学部助教） | 2022年11月16日～2023年１月18日 | 経営学部の専門科目である「キャリアデザインⅡ」において、学外よりゲストスピーカーを招聘し、長野県伊那市地域おこし協力隊の小西徹さんに働き方とキャリア観の関係について講演いただいた。その後、長野県伊那市の運動実施状況調査の結果を踏まえ、「伊那市に住んでいる方々に運動習慣を身につけてもらうには？」というテーマでの課題解決型学習（PBL）に取り組んだ。学生たちはグループに分かれて、調査結果などに基づく課題を整理し、その解決案を考案し、プレゼンの準備を進めた。授業の最終回には、再度小西さんに来学していただき、考案した解決案をグループごとに発表し、小西さんから講評をいただいた。 |
| 長野県<br>長野市 | 減災のための長野市りんご農家応援プロジェクト | 勝浦信幸（経済学部特任教授）<br><br>経済学部勝浦ゼミナール | 2022年10月８日・９日 | 10月８日・９日の２日間、感染症予防対策を徹底した上で、長野市のりんご農家を支援するためのプロジェクトを実施。このプロジェクトは2019年の台風19号による被害を知ったことがきっかけで2020年から始めたもの。りんごなどの果物の収穫、選別、出荷についても支援・体験することができ、ゼミ生たちの成長にもつながる（２日間でりんご5,200個収穫）。 |
| 福井県<br>越前市 | 福井県越前市における希少野生生物の環境DNA簡易検出手法の確立（卒業研究） | 石黒直哉（理学部化学科教授）<br><br>理学部化学科環境生命化学研究室 | 2022年４月１日～2023年３月17日 | 越前市の小・中学校と連携して、環境DNA簡易検出手法を確立させた。 |

＊2023年２月28日申告分まで掲載している。
※特に県名が付されていない地域は、埼玉県内の自治体である。

# 『地域と大学――城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』投稿規定

１．目的

『地域と大学――城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要(Journal of Josai Community Liaison　Center)』（以下「紀要」）は、城西大学・城西短期大学地域連携センター（以下「地域連携センター」）ないしは本学の地域活動・地域研究により蓄積された成果を掲載し刊行することにより、地域連携および地域を舞台とした教育・地域を対象とした研究を促進することを目的とする。

２．発行

（１）紀要は年１回発行する。

（２）紀要の編集は、地域連携センター内に設置する紀要編集委員会（以下「編集委員会」）が取り扱う。

（３）編集委員会は、編集長１名と編集委員１名以上、および担当事務員１名以上から構成される。

（４）編集長および発行責任者は、地域連携センター所長または副所長とする。

（５）編集委員は、地域連携センター運営委員の中から選任する。

３．投稿・掲載区分

（１）紀要に投稿・掲載する原稿は、ひろく地域に関するテーマで執筆された未刊行のものであり、以下の①～⑤の区分のものとする。

①論文

②地域調査報告

③地域教育実践報告

④地域活動ノート（１件につきＡ４サイズ横書き日本語で２頁以内）

⑤その他（地域連携報告、地域情報、地域資料、講演録、書評など）

（２）執筆者は、投稿時に希望の区分を提示する。

（３）使用言語は、区分④以外は特に定めない。

（４）字数または枚数制限および横書き・縦書きは、区分④以外は特に定めない。

４．執筆資格

（１）城西大学・城西短期大学の教職員・事務職員：専任・非常勤を問わず、上記区分の全てを執筆・投稿することができる。

（２）城西大学・城西短期大学名誉教授および定年退職者：上記区分の全てを執筆・投稿することができる。

（３）城西大学・城西大学大学院・城西短期大学の在学生：上記区分④を執筆・投稿することができる。なお、城西大学大学院博士後期課程在学者は、上記区分③以外の全てを執筆・投稿す

ることができる。

※その他、卒業生や学外者等であっても、上記の資格者との共著であれば当該区分を執筆・投稿することができる。また、編集委員会が特に認めた者は、単著で執筆・投稿することができる。

5．執筆要領

（1）使用言語および分量は、投稿区分④以外は特に定めない。

（2）文章は原則として黒字だが、特に必要な場合は図・表・写真などにカラーを使うこともできる。

（3）申込後、掲載可となった場合は、別に定める区分ごとの「執筆要領・フォーマット」に基づいて掲載用原稿を執筆する。

6．執筆・掲載の採否

執筆および掲載の採否については、編集委員会が決定する。

7．発行形態および公開

（1）紀要は、電子ファイル（オンライン版）および冊子にて発行する。

（2）電子ファイルは、地域連携センターホームページおよび城西大学機関リポジトリ（JURA）からインターネット上に公開する。

8．著作権

（1）掲載された著作物の著作権は、著作者が保持する。

（2）掲載された著作物の著作者は、当該著作物に関する複製および公衆送信を編集委員会に対して許諾したものとみなす。編集委員会が複製および公衆送信を第３者に委託した場合も同様とする。

9．投稿料・原稿料等

（1）投稿者から投稿料は徴収しない。

（2）執筆者に対して、原稿料は支払わない。

（3）執筆者には冊子を１部進呈する。なお、追加の冊子および抜き刷りは、希望者に実費で提供する。

2022年６月23日改訂

城西大学・城西短期大学地域連携センター　紀要編集委員会

# 編　集　後　記

『地域と大学――城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要――』は、本学の地域活動・教育研究により蓄積された成果を広く発信し、地域連携および地域を舞台とした教育や地域を対象とした研究を促進することを刊行の目的としています。

かつて本学経済学部教授であった田村正夫先生（理学博士）は、その著『商業地域の形成－首都通勤圏北西境－』（博文社、1976年）において、坂戸市・毛呂山町・越生町・飯能市の商業を詳細に調査され、その地域形成を地理学的に分析なされました。また、田村先生の授業でも、大学周辺地域を題材に、地域の形成が講義されていました。

このように、本学では開学してからかなり早い時期より大学周辺地域を対象とした研究・教育がなされてきており、その伝統は今後もさらに発展的に継承していきたいと思います。こうした意味で、地域連携センターはその支援機関として重要な役割を担っていく必要があり、本紀要もまた本学の地域活動・研究の発展に寄与していく重要な責務を負っていると考えます。

さて、紀要第３号は、論文をはじめ、地域教育実践報告、地域連携活動報告、地域調査報告、講演録、地域情報、地域活動ノートのカテゴリーにわたって全18編もの原稿を収録することができました。これは、本学の地域研究・地域活動がますます活発化してきていることを表していると思われます。特に、今号の執筆者は、全ての学部・短期大学の教員・学生、そして事務職員および退職者からなっており、多様性をもった研究・教育が行われていることもうかがわれます。収録された原稿からは、コロナ禍が続く中でも、さまざまな創意工夫をもって地域を対象とした研究・教育・活動が行われていることを知ることができ、地域活性化を研究・教育する教員の１人としてとても刺激になります。

なお、地域研究・地域学は、多様かつ学際的アプローチで分析されることが多く、その学術論文の審査体制を構築・継続することが困難であったため、地域連携センター運営委員会および紀要編集委員会での議論を経て、今号からは査読論文の募集は停止させていただくことになりました。しかしながら、このことにより、本紀要の学術性が低下したというわけではありません。むしろ、本紀要がより自由かつ大胆でオリジナリティあふれる研究の発表の場になって欲しいと期待しております。

2023年３月　編集長 庭田文近

城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要第３号編集委員会
編集長　庭田文近（地域連携センター副所長・現代政策学部教授）
高尾浩一（地域連携センター所長・薬学部教授）
奈良博恵（地域連携センター事務長）
渡辺沙織・植木さやか（地域連携センター事務員）

地域と大学――城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要　第３号

令和５年３月31日　発行

編集者　城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要編集委員会
発行者　城西大学・城西短期大学地域連携センター
印刷者　有限会社　東京工芸社
**発行所　城西大学**
埼玉県坂戸市けやき台１－１
TEL　049-286-2233（代）
〒350-0295

Printed in Japan　ISSN　2436-2336（Print）　2436-2530（Online）
©2023 城西大学